但し彼はプラトーンが觀念界を箇物の世界から引離して了つたこと（前述の解說に於いて認識論上の觀念として說明した時には已に多少加工的解釋を施してゐるのである）に就いて激烈な反對をして居る。アリストテレースに依れば、プラトーンが箇物の世界を觀念界から引離して了つたことは、個物の世界の理解に觀念界の認識が何の益にも立たぬとして了ふのである。故にアリストテレースはプラトーンとは反對に、觀念とは言はぬが其に相應すべき形式を箇物の中にありと見る。後世、スコラ哲學に於いて唯名論と實有論との爭あり、實有論は「事物に先つて普遍者あり universalia ante rem」といひ、唯名論は「事物の中に普遍者あり universalia in re」と言つて對峙したが、前者はプラトーン、後者はアリストテレースに出でゝゐて、其本は此處に在る。

作用因と目的とが形式に一致するとは如何なる理由に依つてか。蓋し第一に、物の目的とは其に固有なる形式の完全なる發展に他ならず、第二に、人は人を生ずるの例にても見る如く、完全に發展したる形式も、それと全然同一でないにしても、其に類同なる形式を原因としなければならぬ、卽作用因も亦形式でなくてはならぬからである。「動物論」に依れば、有機體に於いては此三原理は一體をなして居る。けれども家屋の建築の如き場合に於いては三者は、單に概念上に於いてのみならず、事實上に於いても異つて居る。然らば變化生滅の個物世界に於いて質料と廣義の形式とは如何なる關係をなして存するかといふに、質料は可能性、潛在性 δύναμις として、形式は實現又は現實性 ἐντελέχεια として、兩者一體となりて存して居る。卽ち箇物とは形式を附與せられたる質料のことである。而して箇々の事物について見れば質料形式の概念は相對的に可變的であつて、或物に對して質料である物が他の者に對しては形式である。例へば、一定の形に切られた石は家屋に對しては質料であるが、未だ手を加へられぬ石に對しては形式である。又家屋は石に對しては形式であるが、市街の一部としては質料である。其故に、箇物は全體として一の發展の系列をなすことゝなる。而して其最後の階段は質料を離脫せる形式卽純粹形式であつて、卽神である。而して神は一切の變化生成の最後の階段であるから目的であり、又一切の變化生成は形式を作用因として豫想するから、神は作用因である。かくてアリストテレースの形而上學は神の概念に至つてやゝ唯心論の意味での一元論の面影を存して來るが、全體としては模範的の二元論である。

彼の哲學がローマ敎會の御用的哲學であつたゝめ、此說は中世を通じて廣く行はれた。

ロ　デカルト及其學徒の學說　近世に於いて、古代のアリストテレースに拮抗すべき物心二元論者は佛蘭西のデカルトである。彼が「哲學原理」に談る所に從へば、世界は結局物體 corpus と精神 mens とより成る。物體の特徵は長さ、廣さ、深さ等の延長あることである。從つて物體と空間と

は一致する。又從つて原子論が說くが如き、物體の最後の不可分割的微粒子卽原子といふものはなく、又空虛なる空間もない。而して此延長といふ性質より總ての物體の他の特殊性質は說明せられる。卽空間部分の運動よりして他の性質は說明せられる。從て運動の法則が物體界の法則であつて、其最高なる者が容積と速力との積にて定義せらるゝ「運動量の保存の法則」である。唯一樣に充塡せられたる空間に於いて如何にして箇々の物體が區別せられるかゞ問題であるが、之に對して、デカルトは、樣々の運動をもてる諸部分より成るものが同時に移動するより生ずとした。然るに空間と物體とは相離れえない關係に在る故、一の物質部分が運動する後には必ず他の物質部分が移動し來り、こゝに一切の物質卽空間部分の移動を將來する。而して此移動は渦狀形に行はれると。之デカルトの有名なる渦狀說である。

之に反して精神の特徵は唯思惟者であるの一事である。精神には全く延長がない。而して之は唯人間にのみ存し、他の動植物には存しない。彼はアリストテレースに反して動物に生命力の存在を拒み、又十六世紀のイスパニアの醫師でアリストテレースの反對者であつたゴメッ・ペレイラと等しく動物には心なきことを主張した。彼に依れば植物も動物も、唯物質の運動のみに依つて說明せられる一種の自動機械の如きものである。若し動物に精神あらば、彼等には快苦の感受性あるべく、此感受性あらば人は動物に對して絕大の殘虐を犯しつゝあるのであると。

人間に在つても其動物的部分卽身體は機械的に說明せらるべきものである。けれども精神は決して機械的に說明せられない。何となれば精神の出現は肉體中に何等の變化を伴隨して居ないからである。然らば延長的の物體たる身體と非延長的なる精神と何處に於いて結合するかといふに其は腦髓の一部分たる松果線 glans pinealis に於いて結合する。此結合に依つて兩者始めて關係し來ると。然し乍ら元來異質的のものが如何にして關係し來るべきか。デカルトは之を神の助力に歸したるが如くなるも、明言はしなかつた。

そこで之を明にせんと努めたのが彼の下流に立つ人々である。其中で特に著しきはアーノルド・ジューランクス（一六二五—六九）を筆頭とする偶因論者 Occasionalisten である。彼等謂へらく、デカルトは物體と精神との間に相互關係ありとすれど、兩者は全然別種の實體なれば、此等のものゝみにて其相互關係を考へることは困難である。之は正しく神が直接に之に關與するに依るのである。例へば、外界の物體が吾人の五官を刺戟して表象を生ずると考ふるは普通なれど、之外界の物體が直接に爲す所に非ず、神が吾人の精神內に外界事物に相應するが如き表象を生せしむるのである。又吾人の意志で或行動を爲すと考ふるが普通なれど、實は吾人の意志が直接に之を爲すに非ず、神

が外界に吾人の意志に相應するが如き行爲を生せしむるのである。故に、物體や精神は唯外觀上の原因卽偶因 causae per occasionem にして眞の原因ではない。眞の原因は神であると。但し神の關與或は干涉が最初の一時に限られるか、繼續的にであるかといふことについては偶因論者の中でも一定して居ない。

彼等の中でやゝ特色あるをニコール・マールブランシュ（一六三八―一七一五）となす。彼の主著「眞理探究」（一六七五）は認識の客觀性を問題とするが、之を形而上學の立場から爲さんとするに於いて、形而上學の項で論じて差支へない。彼は精神の思惟が如何にして精神と異る實體より成る外界を認識しうべきやといふ問題を攻究した。彼に依れば、總ての眞なる認識は、理念の明晰分明なる把捉に存するのであるが、此理念は對象とは異るが故に、如何にして理念に依つて對象を認識しうるやといふ問題が生ずる。之に對して先づ三つの解答が可能であると考へられる。物體についての理念が物體自身に依つて可能であるか、精神が理念の所產者或は所有者であるとするか、神が之を創造したとするかである。けれども第一は物心二者が全然異質的であることに依つて不可能であり、第二も亦不可能である。之を精神の所有とすることの不可能なるは、延長の理念が思惟の一樣相でないからである。又第三も維持できぬ。若し神の一時的關與に依つてとしたならば吾人の有限の精神が無限の理念をもたねばならぬことゝなるが之は不可能であるし、又繼續的のものとしたなら、我々は未だ神が吾人に實現しない所の理念について知つて居るといふ矛盾に陷る。然らば以上の三つの場合の他に第四の場合がなくてはならぬ。マールブランシュは之が唯一つありとした。其は理念を吾々の理念でなく、神の理念であると考へることである。之を神の理念と考へれば、物質そのものも、吾人の精神も神の所產なれば、理念が物體に相應し、吾人が理念を知りうることも理解能きる。卽「吾々は神の中に萬象を見る」と。

されば デカルト及偶因論者は、皆超絕的の神を假定して居る。その點で物心二元論は彼等の學說の完結的部分ではないが、之に就いては次項に述べる。

併し組織立つた二元論としては、デカルト以後之に繼ぐ者を出して居ない。其故に宛かも最早支持しうべからざる學說の如き觀を呈すれども、事實は容易に之を征服すること難く、別の形で表れて居るのを見る。卽ち十九世紀に於いて大に論究の的となりし物心關係論之である。物心の關係を論ずるや、關係の如何にあるかゞ當面の問題であるが、其奧底に關係せしめらるゝ二つの者は關係の論に先ちて豫め別箇のものと假定せられて居る。尤も一が他より導出せられるといふ意味の關係論もあるが之は除く。之は已に唯物論及唯心論の項で論究したのである。依つて二元論の第二次的

問題としての物心相關論を次に論ずる順序となるが、其前に一言東洋に於ける二箇の二元論的學說に論及して置く。

八　印度の數論と支那の理氣說　東洋に於ける物心二元論の代表者としては印度の數論と支那宋儒の理氣說とを擧げることが能きる。

數論卽僧佉耶 sankhya 學派は印度六派哲學の一であつて、傳說に依れば、迦毗羅仙人を開祖とし、阿修利、槃茶尸訶、褐伽、優樓佉、跋婆利、自在黑等の相承を經て來て居るのであるが、迦毗羅は恐らく架構の人物であるとせられて居るばかりでなく、他の人達についても、歷史は餘り明瞭になつてゐない。唯此派の敎理が槃茶尸訶に於いて大略組織をえ、自在黑に至つて更に整頓せられたといふことは明である。而して自在黑の年代は高楠博士の「婆須槃豆傳」の考證やターラナータといふ人の「佛敎史」に依れば世親（紀元後凡五世紀）或はそれより少し後れて陳那（凡六世紀）と同時代である。槃茶尸訶と自在黑とには著書がある。槃茶尸訶のを六十科論といひ、自在黑のを金七十論といふ。併し前者は已に散佚して傳はらぬ故、今日では最も古いものは金七十論である。之に次いで重要なのは僧佉耶經 Sankhya-sûtra である。

數論派は物質的原理を自性 Prakṛti と名け、精神的原理を神我 Purusa と名ける。而して兩者が結合した結果、自性發動して開展した結果が一切萬象であるとする。自性は變化活動する所のもので、延長あり、增減あるけれども、神我は常住不動の實在で、唯思考そのものゝ他何等の屬性を有つて居ない。自性には薩埵 sattva、羅闍 rajas、多摩 tamas の三德あり、之が平均した狀態に指していふのであつて、若し之が不平均の狀態となれば、自性發動して萬象を開展する。薩埵とは吾等の心を照明し物を輕快ならしむる力、羅闍とは心を動搖せしめ、物を不安定ならしむる力、多摩とは心を制縛し、物をして沈重ならしむる力であると解釋される。然らば三德の不平均が如何にして生ずるかといふに神我と交涉するに至つた結果である。

神我の性質は自性と全然反對である。之は獨存の靈體であつて毫も變化的性質をもつて居ない。觀者、見者卽認識主體であつて客觀的性質をもつて居ない。三德を具へず、從つて非活動的であるが如きである。而して之が自性と交涉して一切萬象を開展する次第は、「自性より大（覺）、大より我慢、之より十六聚類（十一根、五唯）、其十六中の五（五唯）より五大を生ず」といふ風に說かれるのである。併し乍ら一般に印度思想に共通なる思想の曖昧は、之を今日いかなる意味に解し、幾何の價値を與ふべきかに迷はせる。唯全體としての思想が二元論的であることだけは知らねばならぬ。此點は理氣說も亦同じである。理氣說は宋儒程伊川に依つて始めて唱へられ、朱晦庵之を襲踏し、

所謂程朱の學の根本學說として長く後世を支配した。理を精神的原理となすべく、氣を物質的原理と考へてよい。伊川の兄程明道に於いては理卽氣、氣卽理であつて兩者同一視せられたが、伊川は二者を區別して說き、朱子之を承繼したのである。伊川は一切萬物が理氣の二元より生成せらるゝことを譬へて、金を以て器を作るが如きであるとした。「金は卽ち氣にして、器の形は卽ち理なり」と。アリストテレースが石材を質料とし切られたる石を以て形式としたると善く似てゐる。朱子に至つては更に之を說くこと詳しく、以爲らく、宇宙の一切の現象は皆理氣の合成より成る。人間に於いても同一で、其生ずるや、必ず此理を受けて性を成し、此氣を受けて形を成す。兩者は相離れて存在することなく、互に相俟つて存在するものであるけれども、理は形而上の道であつて萬物を生ずる所以の原理であり、氣は形而下の器であつて理に依つて鑄型せらるゝ質料である。理は一にして無差別であるけれども、氣には種々の差別があつて一でない。萬象の個々異別の相を現ずるは此氣の差別に基く。例へば人間界に在つて聖賢は淸爽なる氣より成り、愚人は昏濁の氣より成るが如くである。併し人間の間の差別のみならず、人と物との差別も亦之に基く。「其氣の精英をうる者は人となり、其渣滓を得る者は物となる。」而して彼は理氣の二元より先づ陰陽の二氣生じ、次に水火木金土の五行生じ、之より、二氣五行の精粗の多種類に應じて萬物生ずることを說いてゐるが、今日から見れば、其細目は重要な事項ではない。唯我國に於いては、寧一山、虎關、中巖以來程朱の學次第に擴まり、德川時代には官學として行はれたるため、主とする所は經世濟民修養工夫の實踐的方面でゞはあつたけれども、其根本學說として此理氣二元論が廣く行はれて居たのである。之は私共としては注意して置かねばならぬことである。

三　物心二元論の第二次的問題としての物心關係論

物心の二元を認むる立場に立つ時、之に伴隨する第二次的の問題として、物心關係論のあることは已に述べた。卽ち互に獨立なる別種の存在としての物體と精神との間に如何なる關係ありやの問題である。

人に依りては、此問題そのものが二元論の破綻を示すと考へる。斯る人に依れば、凡そ相互に異別なるものゝ間には關係が生ずることは能きない。故に物心關係ありとせば、其は相互に同種のものたるべきである。偶因論者の如きは斯くの如き假定の下に出發した者である。彼等は幸に神を認めたれば二元論にして猶よく其關係を理解することが能きたが、神を認めず、且つ同時に兩者の關係を認むるならば、勢ひ一元論に入らざるをえないと。併し乍らこは關係の槪念を餘りに狹義に取つたものと言ふべきである。二者の間に關係あるは、必ずしも兩者同種なる場合所謂因中有果の場合のみに限られぬ。物界の因果關係に於いて原因と結果とは同種なりや。化合物の溶液に電流を通

すれば陰陽のイオンは分解する。併し乍らスウィッチをひねつて電流を通ずるといふことゝ分解現象と同種なりや。成程兩現象の間には一定の法則に支配せられた函數關係があるであらう。けれども兩現象を同種なりと言ふことは能きぬのである。同樣に物心兩現象も、同種でなくても、其間に何等かの關係の介在を許容しうる。

而して今日之に對して提出せられて居る學說に、物心並行論 Psycho-physischer parallelismus 及物心相制論 psycho-physische Wechselwirkungstheorie の二學說がある。後者は又物心因果說 psycho-physische Kausalitätstheorie とも呼ばれてゐる。並行論と相制論とを同一視する、ハルトマン、ジームズ、キュルペ、ベッヘルの如き人々もあるが、普通には別箇の學說として對峙せしめる。

イ　物心相制論　第一に物心相制論とは如何なる學說であるかといふに、物心の二元を認むるも、之を相互に影響なきものとは考へず、反對に、物的現象の變化は之に應ずる變化を心的現象の上に生せしめ、心的現象の變化は之を物的(主として肉體的)現象の上に生せしむるといふ見解である。故に其は、物心二元の何れかを他より生ずることをうとなす唯物論及び唯心論とは異つて居るけれども、其現象の變化については、互に、或は因となり、或は果となり、相制すると說く者である。

而して此見解は近世物理學、生理學等の發達に伴つて其事實的證明をえて居る。例へばエルンスト・ハインリッヒ・ヴェーバー(一七九五—一八七八)がワグネル編「生理學辭典」で發表した觸覺の研究の如きは、物質界の變化が心的變化を伴起する法則を示したものである。所謂ヴェーバーの法則之であるが、其は如何なる法則かといふに。人若し百匁の重量を支ふる時には一種の重さの感があるであらう。けれども之に加ふるに僅少の重量を以てしても、吾人は其增加をえて知ることが能きない。更に重量を增加して一定量に至つた時に始めて之を知覺することが能きるといふ事實がある。此事實に於いて此一定增加量を最小可知差違と言ふ。又或範圍內では此一定增加量と元の重量との比は、元の重量の絕對値が幾何であるかに論なく、一定して居る。卽恒數で示しえられる。之を言表したものがヴェーバーの法則である。ヴェーバーの法則は數學的に兩者の關係を規定しうることを示したものであるけれど、單に兩者の間に關係ありといふことは、吾人日常の經驗よりも、幾多科學者の研究よりも實證を呈示することが能きる。氣候の精神に及ぼす作用を見よ。嚴寒の候に於いては吾人の血管は緊縮し、血液の循環は阻害せられ、呼吸の調節は亂され、爲に記憶作用、推理作用は遲緩となる。又炎天暑熱の候に於いては、生理現象は反對となりて、同じく記憶推理等の精神作用を鈍ならしめられる。亞片を喫用する者が其精神活動に影響を受けて、常人に眞近と感じられるものをも遠方に感ずるといふこと、卽ち時空觀念に變化を受けるといふことはよく知られ

て居る事實である。ロッツェの「醫學的心理學」（一八五二）、ヴントの「生理的心理學綱要」（一八七三）、フェヒネルの「精神物理學要領」（一八六〇）の如きは、皆此關係を假定して心的現象の研究を獨立の一領域たらしめんと企てたものである。

又反對に、心的現象が身體に影響を及ぼすといふことも亦看過することは能はざることである。例へば佛蘭西のアルフレッド・ビネ（一八五七―）の研究に依れば、精神作用に際しては、心臟の運動は亢進し、血壓が高まるといひ、又他の或學者は、胃液の分泌が精神作用に影響あることを見た。即空腹の兒童に食物を與ふれば胃液を分泌すれども、豫め之を與へざるの意志を明示して之を見する時は、之を得んとする焦燥の感先に立ちて胃液の分泌なきを見た。

ロ　物心並行論　第二に並行論とは如何なる學說であるか。並行論が相制論と異る所は、物心兩現象の間に時間的因果の關係を附せず、兩者は盾の二面であつて、互に伴隨するものであることを主張する所に在る。其代表者としてランゲを擧げうるであらう。ランゲに依れば、凡そ唯物論の功蹟は目的觀を排して機械的說明を押し通した所に在る。感覺の如きも外界の刺戟が感官を感觸して一定の變動を神經の末端に生ずるもので、之が求心神經を傳つて腦に達し、腦を發した物理的過程が遠心神經を傳つて運動を生ずるに至るので、此間に因果の關係が中斷せられることはない。そして我々は是非さう考へなくてはならぬのである。何となれば物理學的認識の特性たるや、一切を說明するに因果關係を以てするものであるのに、意識を以て因果律に支配せられることがないとしたならばこれ結果なき原因及原因なき結果を豫想しなくてはならぬからである。けれども意識は一面に於いては物理的進行の連鎖の一項であるけれども、他面に於いては之と異る現れ方を有して居る。之意識の主觀的狀態そのものである。

此並行論は甚だしく認識論的色彩を帶びて現れることがある。此ランゲの如きもさうであるが、然る時は前章論述のトレンデレンブルク、ヘルツ等の觀念論的實在論となる。ヘルツの「物理學的表象の思惟必然的結果は此表象の對象の自然必然的結果の表象である」といふ句の如きは明に思惟作用と物理作用との並行論を唱導する者である。然し之は已に認識論上のことなれば、今は入る必要がない。

相制論とるべきか並行論とるべきか。之については史上文獻少なからぬけれども、ヴントの「物理的因果性と物心並行論とについて」（一八九四）、リッケルトの「物心因果性と物心並行論」（一九〇〇）の如きは參考すべき論文である。ヴントは物心並行論に與し（之が彼の主意的唯心論といかなる關係にありやは明かでない。）リッケルトは物心相制論を採用する。私も物心相制論の方を困難が少

いと思ふ。蓋し、今若し問題を吾人人間の心理的現象と或部分の肉體的現象との關係にのみ限局するならば、並行論の方相制論よりも經驗的實證をうること容易である。何となれば兩者並行的に進行せんことを知らんには、唯其間に函數關係の存することを確むれば足る。然るに相制的關係を示さんとせば、更に兩者の函數關係が一方向的であることを知る必要があるからである。併し乍ら若し問題をかく限局せず此等の學說を物心兩自然現象の全部についての理論として樹立する時は、並行論は遠く相制論に及ばないのである。何者、相制論に於いては、物心兩現象相制關係ある場合あり とし、之のみを論ずるものなれば、兩者無關係の場合を假定するも妨げない。然るに並行論は常に物心並行せることを示さなくてはならず、而して之は到底不可能のことであるからである。リッケルトは上述の論文に於いて次の如き「逆理的例」を擧げて並行論が維持すべからざることを述べてゐる。曰く、「茲に一定量のアルコールを服して、吾人の心的氣分を變へるとせよ、そして、アルコールの一滴一滴は皆我々の氣分を變化する心的過程に伴はるゝとせよ、然らば此『アルコールの靈』は更に、アルコールの材料と結合した心的生命に依つて生せられるといふ風であつて」物心兩因果系列は際限なく進むであらうと。勿論假說的に之も考へられぬのではないが、實證することは望がないのである。

四　物心二元論の批評　並行論とるべきか相制論とるべきかといふ問は、暗に已に物心二元論を肯定して居るのである。物心二元論を否定する者は同時に並行論相制論二つながら否定せねばならぬ。然るに物心の關係に關する此等の兩說の二者擇一の問題が常に提出せられるといふことは、二元論の根柢が極めて根柢の深いものであることを思はせる。從つて、結局は之が維持せられないにしても、或は最後迄打破り難きものであるにしても、吾人は之に就いて一層の攻究を經なければならない。其には先づ常識や自然科學が何故に之を打捨て難きかを見る必要がある。

一言にして言へば、其は、物的現象と心的現象とが相違し、互に他に還元しえざる或者を有するに依ると言ふことが能きる。心的現象が果して精神といふ常恒不變の主宰者の作用であるか否かといふやうな議論に入らずとするも、とにかく吾人の直接經驗に照して、物的現象と心的現象との間に相互に還元しえざるものあることは事實である。而して唯物論や唯心論は互に其一を以て他に還元せしめんと欲するけれども、其が今日では未だ大膽なる假說に止るといふことも已に論じ來りし如くである。若し然らば、吾人は一元論を唱ふるよりも寧ろ二元論を唱ふる方、一層實證的、批評的精神を滿足せしむと言ふべきである。

然らば二元論を排する者、何を以て之を採用せざるといふに、之が理由は、吾人の認識の統一慾

を滿足せしめないといふのが根本であるやうである。其意味は、若し吾人にして唯物論又は唯心論を採用すれば、世界最終の要素は一種となり、統一的に世界を理解しうべしといふのである。けれどもこは認識の方法と成果、視點と結果とを混同したものである。吾人は成程成るべく少數單純なる原理を以て世界を理解せんとする。けれども其結果が果して如何なる程度迄之を成就しうべきかは豫め知るべからざることである。若し豫め知りうべきものならば、敢て辛苦して知識の樹を攀る必要はないのである。若し一元に歸しえなば一元論の方一層統一欲を充すことは明であるが、一元に歸しうるか否かゞ問題なのである。併も、假令一元に歸しえずとも、認識の統一といふ哲學の要求が全然充されぬのではない。最も重要なる統一は方法の統一、視點の統一、即ち形式的統一であつて、之は、研究の結果が如何に變じても破壞せられることはないのである。故に此理由を以て二元論を排するは當らない。吾人は知識の內容的統一といふ意味での形而上學の立場からは、二元論、否寧ろジェームズのいふやうに「多元論的宇宙」を主張する方が、より多く實證的、批評的精神に合致すると考ふる者である。

第三項　超驗的實在の假定及其批判

一　超驗的實在の假定に基く二元論　前項の冒頭に於いて一般に二元論的學說を二大別し、其一は認識論的に可認識的とせられたる世界と然らざる世界とを對立せしむるものであると言つたが、こゝにいふ二元論は其に當るものである。超驗的實在とは吾人の認識の範圍外にある實在の意である。換言すれば經驗的實在の背後或は奧底に存する第二の存在の謂である。

前二項に於ける諸學說を叙述するに當つては、吾人は、其等諸學說の立する原理を經驗的實在の中に求めらるゝものとして取扱つて來た。固より此取扱ひが人爲的のもので、歷史上の學說を純客觀的に再現するといふ上から言へば解釋的要素を加へ過ぎたことにもならう。プラトーンの對話篇に現れた觀念は決して吾人の有する觀念ではなく、ライプニッツのいふ單子は吾人の意識そのものではなく、ショーペンハウェルの意志は、吾人の意志と同視しえない或者をもつてゐる。アリストテレースの形式にしても質料にしても物質や吾人の精神とは異るものであつたとも考へられるのである。然るに何故に私は之を混同するが如き叙述を敢てしたかといふに、第一には一々の學說について之を區別すべき境界線を嚴密に劃することが困難であるからであり、第二には之を宛かも經驗的或は可經驗的概念であるかの如く取扱つて置く方が、元來超驗的實在の概念が如何なる心理的根據に基いて、如何なる思惟過程(假令それが誤であつても)を經て生じたものであるかを知るに便宜で

あるからであり、第三には、若しさうしなければ、概論的叙述の性質上、幾度も同一學說を反覆しなければならぬ煩を省くことが難かしいからである。要するに便宜上さうしたのである。

併し此項に於いては前二項とは反對に、宇宙の實體を經驗的實在の中に求めず、不可經驗的な超驗的實在とすること顯著なる學說を主として述べ、之を批判したい。但し今述べたやうに、前二項の叙述には人爲的加工が加はつて居り、超驗的實在についての學說と見らるゝものもあるのであるから、勢ひ、最小限度にではあるが、之に再び論及することもあるは止むをえない。

二　超驗的實在としての一神教的神　此意味の二元論の尤なるものは宗教學上の一神論 Monotheismus の世界觀である。單に神觀にのみ就いて言へば、一神論は唯一の神を認むる宗教であつて、其故に一神教と呼ばるゝものなれば一元論的であるけれども、一般に世界觀として見る時は、超驗的實在としての神と經驗的實在と對立してゐることを特色とするものなれば二元論的である。此神觀は印度には殆どないが、支那にはある。天の思想の如きはそれである。天と言つても地に對する天を指すこともあり、又單に非人格的な宇宙の太原を指すこともあり、運命をさすこともあり、一定して居ないが、之を有意的人格的の常一主宰の超驗的實在と見る場合は一神教的である。例へば詩經皇矣の章に「皇ヒナル矣上帝。臨ミ下ニ有リ赫ナル。監ニ觀シ四方ニ。求ニ民之莫ニ」とあるが如くである。堯舜禹湯文武みな此天を敬崇した。天子といふ語も天命卽神命を受けて之を行ふ者の意である。此觀念は孔子にも存して居た。「論語」に「丘之禱ルヤ久シ矣」とか「獲ル罪ヲ於天ニ無キ所禱ル也」とかいふは之である。而して孔子の道を傳ふる儒教に於いて此一神教的色彩が長く續いて來たことは言ふ迄もない。

けれども、一神教的思想の最も體型的なのは猶太人の宗教思想であつた。舊約聖書にあらはれた猶太教の神觀、新約聖書に現れたイエスの神觀之である。イエスは猶太教の改革者と目すべきであつて、其倫理思想の普遍性に於いて、遠く彼以前の猶太教を超えて居るけれども、神觀に於いては全く同一である。其に依れば神卽ヤーヴェは唯一獨存恒常であつて此世界よりは獨立なる有意的人格的の存在者であり、其意志に依つて此世界を創造し、支配してゐる者である。「創世紀」第一章には「始めに神天と地とを作り給へり云々」と六日にして晦冥混沌の中より、明暗を分ち、水陸を區劃し、草木を生じ、日月星辰を生じ、禽獸虫魚を生じ、最後に神の姿に人を生じて天地の萬物を支配せよと命じ給ふたと書いてある。之固より一箇の神話的宇宙開闢說であるけれども、之よりいでし二元論的世界觀がローマ帝國の政治的勢力の膨脹と共に歐羅巴アリアン民族を征服して了つて來て居る點よりして歷史上注意すべきである。歐羅巴アリアン民族は元來同系統の印度アリアン民族と共に多

神教的であり、又汎神教的であり、決して一神教的であると言へぬ。ラテン民族やゲルマン民族は基督教に接する以前發達したる知的文化を有しなかつたから暫く措く。基督教に接する以前に特有の知的文化を有つてゐた希臘人を回顧するに、古來の多神教は、哲學者、例へばクセノファネース等に依りて批評せられ、漸次力を失つたが、之に代つたものは何であるかと言へば、汎神觀や、機械的自然觀やであつて基督教のやうな一神教ではない。クセノファネースは一神教的と言はれることもあるが、其よりパルメニデースの汎神觀を出したことを思へば、基督教の談るが如き一神教ではなかつたらう。プラトーンの善の觀念を神としても、アリストテレースの純粹形式を神としても基督教的とは言へない。プラトーンの觀念界は超驗的實在たる點に於いて最も基督教の神と一致して居るが人格的色彩がなく、且つ觀念は多である。それでも之は最もよく基督教と調和しうるので、歴史上も最も關係の深いものゝ一つとなつた。

中世を通じて此二元論は遵奉せられた。近世に至つて漸次之に對する批評的精神が起り、希臘的、アリアン民族的の思想を回復したが、併し其道程は遲々牛歩の如く、今日でも其影響は陰然として存して居る。今日獨乙に存する新トーマス主義 Neuthomismus の如きは其一例である。されば思想内容上は到底之を捨つべき立場に在り乍ら猶神の概念や言葉に拘泥して終に體系の矛盾を來す場合が多い。例へば故コーヘンが嚴に汎神觀を排して一神觀を宣揚せしが如きである。況して近世初期に於いて此二元觀との格闘は甚だ困難であつたに違ひない。前述デカルトの物心二元論が物心の對立の他に物心と神との對立を認むるが如きは其一例である。ジョン・トーランド（一六七〇―一七二二）、アントニー・コリンス（一六七六―一七二九）、マシウス・ティンダル（一六五六―一七三三）の如き理神論者 Deisten も超越的神を否定しない。

唯ジョルダノ・ブルーノ及スピノーザの汎神論、カントの認識論、オーギュスト・コムト（一七九八―一八五七）の實證論、ヘーゲル左黨の無神論の如きは、或は徹底的な一神論の反對であり、或は重要な反對要素を含んでゐて、之等に依つて今日は往昔の如き一神教をそのまゝ信ずることは能きぬ。但しブルーノ、スピノーザの汎神論は、今いふ超經驗的實在を認むるといふ點のみよりすれば、二元論的たるに於いて一神教と一致すると私考するが故に之を次に讓り、又カントの認識論とコムトの實證論とは敢て一神教のみならず、汎神論を始め凡そ超驗的實在を認むる總ての學説への共通的反對であると思惟するが故に之も後に讓り、此處には先づヘーゲル左黨について一言せんに。

此一群の哲學者の中で顯著なるはシュトラウス（一八〇八―七四）とフォイエルバッハ（一八〇四―七二）とである、シュトラウスは、其一八三五年發表したる「耶蘇傳」に依つてヘーゲル學派を分裂

せしめた者であるが、最も哲學的であるのは、「舊信仰と新信仰」(一八七二)である。彼は此書で全然實證科學の立場に立ち、一神論的な神概念を拒斥して居る。全篇四章に分れ、一、我等は猶基督教徒たりうるか。二、我等は猶宗教を有するか。三、我等は如何に世界を理解すべきか。四、我等は如何に我等の生涯を秩序づくべきかの順序に論じてゐる。彼自身は神と世界とを一視する汎神教であるが、然し其所謂神はスピノーザの實體の如くでなく單に宇宙の全體といふ意味であつた。

フォイエルバッハには「死と不死とに關する思想」(一八三〇)、「基督教の本質」(一八三九)、「宗教の本質」(一八五一)等の著がある。殊に「宗教の本質」は、エンゲルスをして「人若し此書の解放的影響を自ら體驗してゐなくては、其觀念をうることは能きぬ。感激は至る所に起つた。我々は皆一時フォイエルバッハの徒であつた」と言はしめてゐる程甚大の影響を時代人に與へたものである。彼は明に無神論者 Atheist たることを公言して基督教的神を拒んだのみならず、神の神性は要するに人性の反覆にすぎずとして、其心理的起原を說くことに努めた。彼に依れば、人は其願望の全部を有限なる自己の力にて實現し能はざるが故に、かゝる力を他に求むる。最初は之を自然物にに求め、次に自然以上の世界に求める。前者が原始人の神であつて、後者が精神的宗教の神である。故に要するに神は「神化されたる人間」であり、「人間の內面、自我の表出、表明せられたもの」である。「人間の願望の實在化せられたるもの」であると。

猶かく無神論を標榜せしものに、ブルーノー・バウエル(一八〇九—八二)あり、カル、・マルクス(一八一八—八三)あり、社會民主黨の人々を通じて今日に及ぶ。思想系統は別であるが、ニィチエの如きも明かに二元論に反對である。

三　汎神論に假定せらるゝ超驗的實在　汎神論は普通一神論に對立せしめられる。一神論が經驗的實在の背後に第二の存在を假定して二元論たるに反し、經驗的實在の外に何物をも認めず、其意味にて一元論であると言はれる。併し乍ら汎神論と言はるゝ學說の中にても明かに此特質を具有してゐるものと、細かに點檢し來れば疑問を懷かせるものとがある。

前者の例としては、希臘のエレア學派をあぐるをうる。其祖ともいふべきクセノファネースは當時の多神教を嘲つて、「ネグロ人は其神を黑きものと表象せん。牛は之を牛の形に表象せん」と言ひ汎神論的思想を宣傳した。彼に依れば、多樣なる此世界は一體にして一卽多であり、多卽一である εἷς καὶ πᾶν。これ卽神であるといふ。神の語は存すといへども、其は唯一體としての全體を名くるにすぎぬ。クセノファネース後のパルメニデース、ツェノー、メリッソス等に於いても同樣である。

之に反して後者の例としては近世初頭のジョルダノ・ブルーノや十七世紀のスピノーザがある。

疑問とは卽ち經驗的實在の一元論であるといはるゝに拘らず、暗に超驗的實在を假定してゐるのではないかと思はせることである。ブルーノーは宇宙の一なることを主張し、神は此一なる宇宙の外にありとせず、其に內在せる第一原因であつて、其屬性は力、智慧及愛の三であるとしたが、又如何なる可思惟的のものも之に含まれてゐるともした。自然に內在的ではあるが、其第一原因であれば能動的自然 natura naturans である。之に依つて見れば、宛かも神は經驗的實在の全部でなくて其一部であるか（さうすれば、彼が神の屬性を力、愛、知の三としたことや、神を又單子の單子と呼んだこと等よりして唯心論となるであらう）、或は經驗的實在の外にある超驗的實在であるかの二つの解釋を許すやうに見える。これ疑の生ずる理由である。スピノーザに於いても同樣である。彼は「神卽自然 Deus sive natura」と言つて神と自然とを同一視したと言はれるけれども、彼も亦自然を能動的自然と所造的自然 natura naturata とに分け、前者を神としてゐる所より考ふるに、之は最早經驗的實在ではないと考へられるのである。所造的自然が經驗的實在で、經驗的實在は箇物である箇物は皆神の樣相である。思惟や延長の如きも神の屬性であつて神ではない。かく考へればやはり事實に於いて超驗的實在を假定し、二元論的要素を含む如くに思はれる。

汎神論の最も榮えたるは印度思想であり、其中でも大乘佛敎である。殊に馬鳴（紀元後凡一世紀）の起信論は此點にて大なる影響を東亞の思想史に與へたものである。而して此佛敎の汎神論に於いても從來の解釋にては二元論的要素を脫してゐない。起信論にては實體たる眞如と現象たる生滅差別の世界とは宛かも水と波との如く、波を離れて水なく、水を離れて波なき關係に在りといふ。然れども同時に眞如緣起を說き、眞如が忽然生起の無明によつて攪亂せらるゝ時、先づ第一浪たる阿黎耶識（阿賴耶識と同一と見てよい）を生じ、以下順次波浪を起して一切萬象を顯現すといふ。今此緣起說を參照してかの水波不離の論を考ふるに、謂ふ所の水波の關係は波を以てそのまゝ水と斷ずるものではない。現象界の事々物々がそのあるが儘の姿を以て眞如となすものではない。波浪の形狀千變萬化すれども、水の濕性不變なるが如く、現象界は生滅變化すれども、眞如は不變常恒の一體であると說くのである。此眞如とはそも〳〵何ぞや。それは共相卽經驗的實在より抽象したる普遍者をさすものなりや、それとも經驗的實在には示されざる或者を示すものなりや、將た又經驗的實在の一部にして諸の現象を開展する第一原因をさすものなりや。之解釋の分岐すべき點であるけれども、從來は或は第一の如く、或は第二の如く、或は第三の如く說かれてゐるやうに思ふ。而して若し第二の解釋をとらば、之汎神觀とは言ひ條超驗的實在を假定する二元論であつて、其點で一神論と擇ぶ所なしと思惟するのである。

四　超驗的實在の假定の批判　一神論と汎神論とを採つて超驗的實在の假定を論じたのは、例證的の意味に於いてゞある。一般的に言へば、上にも述べし如く超驗的實在は殆ど總ての過去の形而上學に於いて假定せられて居る。唯物論の原理たる物質、唯心論の原理たる精神、物心二元論が原理とする物心の二元、多くは多少の程度はあるも、超驗的實在とせられて居る。ラスクは「哲學の論理學」で此二元論を二世界說 Zweiweltentheorie と名けてゐるが、此書の第四章で二世界說に相應する範疇論を論ずるに際し、プラトーン、アリストテレース、プロティノス、敎父哲學、スコラ哲學等をあげてゐるに見ても之は知れるのである。のみならず普通には超驗的の transzendent 實在を論ずるものでなくては形而上學とは言はぬ程である。形而上學といふ語と超驗的といふ語とは歷史上は殆んど同義である。カントが形而上學を不成立としたのもかゝる超驗的實在を論ずる形而上學をさすのである。

然らば斯る第二の實在の假定は果して維持しうべきか。今日は之を容認する者は極めて少い。形而上學を說く者でも、かゝる形而上學を說く者は甚だ稀にあるのみである。知らず〳〵之に陷つて居ても、表面上は之を認めない。況んや認識論上の攻究より出發する者に於いては、殆ど全部がかゝる形而上學に反對する。バウルゼンの如き容認論者もあるけれども、其は曉天の星の如く次第に數を減じてくる。然らば此傾向を馴致したものは何であるかといふに主としてカントの認識論である。固よりカントの認識論計りでなく、他にも之を助成してゐるものがある。例へば近世の實證論的傾向であつて、特に其を具體化したコムトの實證論の如きは相當に大なる助成力となつて居る。

コムトの主著は「實證哲學概論」(一八三〇—四二)であるが、彼は此書で、人知發達の段階を三段に分けた。第一は、自然の過程が神的とか魔神的とかいふ超自然的の力に依つて擬人的に說明せらるゝ神學的段階、第二は、擬人的ではないが本質とか原理とか力とか原因とかいふ非經驗的概念を用ひて、やはり超自然的に說明せられる形而上學的時代、第三は、一切の非經驗的要素を排除して、全然經驗的に研究を進むる實證的段階之である。之全く二世界說への反對である。

併しカントの反對は一層複雜なる思索の上に立つて居る。「純粹理性批判」の概要は、其種々なる解釋に應じて、已に認識論の章に叙述したから反復するの要はないのであるが、其に依れば彼が不用意に假定してゐた物自體の世界は結局彼自身の理論に依つて破られてくるのである。而して物自體の世界はこゝにいふ超驗的實在に他ならぬ。今は先驗的辯證論について一言附加へて置くが、之は彼自身の認識理說から斯る超驗的實在の假定すべからざる結論の生ずることを最も具體的に論述したものと言へる。彼はこゝでは合理的心理學の對象たる靈魂と、合理的宇宙論の對象たる宇宙と

合理的神學の對象たる神とが可經驗的でないからといふ理由で、かゝる學の不成立を論斷して居る。三學の批判それ〴〵特有の點を有つて居るけれども、之を概論するに、其共通な論脈は、第一にかかる超驗的對象の概念卽所謂理念が、被制約者より次第に制約者に遡らんとする認識統一の要求より自然に生ずることをのべ、次に吾人の認識作用は時間的制約をうけて居て無限に遡ることは不可能であるが故に、かゝる遡行の最後の項に達したと考へるのは誤りであり、從つて心靈、宇宙の太原、神等について云爲するは認識能力の限界外のことを語るのであるといふに歸する。

此カントの議論には吾人の認識作用の無限遡行の事實的不可能といふことが有力なる根據の一つとなつて居るやうに思はれるが、私は之には多少の異論があると思ふ。成程吾人の事實的認識作用は有限たることを免れぬ。けれども思考の作用と內容とを區別すること獨墺學派(前揭)の如くであるならば、作用は有限でも無限なるものを其思考の內容ならしめえないであらうか。此意味よりして、私は此論據に力をおくよりも、心靈等の概念の不可經驗的概念たる所に、之を實在とするの誤謬の論據を置きたいのである。尤も無限なるものは不可經驗的であるといつて此等の論據を區別するの因なきことを論ずる人があるかも知れないけれど、有限無限の區別と可經驗的不可經驗的の區別とは必ずしも一致しないと思ふ。經驗的實在は名の示す如く可經驗的であるが時空上無限である。

とにかく超驗的實在を假定することはかくして今日では多くの哲學者のとらぬ所である。

五　超驗的實在の假定の心理的根據・併しカントがかの無限遡行よりして超驗的實在の觀念の生じ來つたことを說明したことは他の點より非常に重要である。

蓋し上述の如く、超驗的實在の假定は論理上許されないものであるが、如何にして斯る概念が生じ來るのであるかといふことは論理上の批判とは別箇なる一箇の問題である。而して之に對し新なる研究の途を開いたのが超驗的實在たる心靈等の觀念についての彼の此說明であるからである。彼に依れば形而上學は學としては成立しえないのであるが、一箇の歷史的事實としては生ぜざるをえない理由が吾人の自然の素質の中に存するのである。其素質とは吾人が認識作業を成すに當つて次第に制約より制約に遡り、無限に之を押し進めて、終に無制約的制約に達せんとする認識統一の要求である。此無制約的制約は理念としては吾人の認識の方向を指示するもので、規制的原理として不可缺のものであるが、之を經驗的實在外の一實在とすることは能きぬ。然るにさうしたのが合理的心理學等であるといふのが全體の論旨である。卽理念そのものとしては決して不合理ではないが之を實體化する所に誤謬が生ずるといふ。認識の理想を實在とするのが誤なのである。

此心理學的說明は結局超驗的形而上學をして四語の論過（カントは特に合理的心理學の場合に之を用ひてゐるが、他にも之を應用しうると思ふ）を犯さしむるのであるが、然らば如何にして我々は此誤謬を犯すやうになるか。思ふに其は理論的關心の他に實踐的關心、卽倫理的關心、宗敎的關心、實生活上の關心等が加はつて之を致すのである。一言にしていへば、認識への關心でなくて生への關心が加はつて之を誘致するのである。勿論認識も生の一部として見ることが能きる。認識以外の生で認識に左右せらるゝ場合もある。けれども生は認識に限られず、又認識に左右せられる場合に限らない。反對に認識を左右する場合がある。かゝる場合を今特に生への關心と名ける時、かの誤謬を誘致する。蓋し、認識の理想は生への關心の上から見ても重要なものであるが、此關心は情意を本となすものであり、而して情意は明瞭なる學的判斷の意識を伴ふとは限らぬが故に理想を實在と混淆するに至るからである。

已に誤謬の根源がかゝる生への關心から來るものとしたならば、實在化せらるゝものは決して學の理想に限られぬのは容易に推知できる。道德の理想然り、行爲發動の原動力然り、美の理想然り。リーペルトは「一切の形而上學は實體化された心理學だ」といつたが、それよりも實體化といふ心的過程に依つて一切の事物が形而上學化せられうるといふべきである。プラトーンは一切の觀念を實體化し、一神論者、汎神論者、唯心論者は精神或は其理想的狀態を實體化し、オストワルドはエネルギーを實體化し、ショーペンハウエルは意志を實體化する。基督敎の天國、佛敎の極樂淨土、これ又我等が此世に實現すべき理想的神境の實體化である。中には之を以て意識的の譬喩的言說となすものがある。表現力の貧弱な古代人にあつては、否近代人に在つても譬喩的言說は重大な役目を演ずるものであるから斯る場合も恐らく多からう。而して意識的譬喩ならば、其譬喩の適不適は別として、とにかく實體化ではない。けれども上述の如き心的過程に依つて知らず〳〵（知つてゐたらば實體化しないだらう）實體化した場合が多いのである。

此誤謬は過去の哲學者に最も普遍的な誤謬で、一般の人の哲學への反對嫌惡を誘ふ最大の原因であつたのであるから、私共は須らく之に陷らぬやう努むべきである。

第三節　文化哲學的諸學說

第一項　文化哲學の基礎理論

一　文化哲學の名稱及意義　文化哲學については始めに其定義を述ぶることは甚だ困難である。

蓋し文化哲學といふ語が使用せられ始めてから未だ日淺く、文獻も少い代りに用語法も一定して居ないからである。

文化哲學は獨乙語の Kulturphilosophie 或は Philosophie der Kultur の譯語である。Kulturphilosophie の語を冠した書の出たのは恐らく今世紀に這入つてからであらうと思ふ。アイスラーの「哲學概念小辭典」(一九一三)では「文化」の項にリンデの「自然と精神、文化哲學の一つの試」(一九〇三)、レーゼルの「文化哲學の經驗的及先天的考察の可能について」(一九〇五)の二書あるのみ。又 Philosophie der Kultur の語を冠した書ではコイゲンの「文化の哲學への思想」(一九一〇以後)があげられて居る許りである。併し次第に廣く用ひられて來て居ることは明で、モークの「二十世紀の獨乙哲學」ではジムメルを論ずるに「相對論的文化哲學」の名を以てし、ユィーベルウェッヒの「哲學史綱要」第四卷(十二版)ではニィチェを文化哲學と題して論じて居る。此名稱に最も限定した定義を與へて用ひて居るのは恐らく西南獨乙派の人々で、其機關雜誌「ロゴス」は「文化哲學の國際的雜誌 Internationale Zeitschrift f. Phil. d. Kultur」といふ傍題を有つて居る。此派はカントの批評主義を一の廣大な文化哲學として見、之を繼承發展せしめんとする者である。「ロゴス」第一卷第二號に載せられたヴィンデルバントの「文化哲學と先驗的觀念論」には次のやうにいふ。「眞に文化の哲學即一の概念學たらんとせばいかなる文化哲學も充さねばならぬ共通相に注意を向けることが、(文化哲學の諸體型を構成するよりも)一層重要なことである。與へられた文化を問題とすると課せられた文化を問題とするとに論なく、文化の根據はあらゆる理性活動の內的本質の中に示されねばならぬ。何者、哲學的理解は事實の心理學的或は歷史的確定の後に始めて始り、內在的內容的必然性の視點に從つてのみ權利の問題に答へる。之はとりも直さずカントの批評的方法であり、而して、之よりしてあらゆる文化機能の理解のために生ずる根本見解が先驗的觀念論である。余が『現代の文化』の爲に近世哲學の歷史について草した短い叙述は、批評主義の體系を一の廣大な文化哲學であるとして其特質を示した。余は特に注意しておきたいが、余は之に依つてカントの歷史的な問題提出の今日の精神生活に對する意義を示さんとしたのでなく、彼の學說の結果の今日の精神生活に對する意義を示さんとしたのである。カントが其批評的分析に當つて、常に、『如何なる權利を以て經驗から生ずる個人的意識の中に先天的綜合判斷、卽普遍的必然的にあらゆる經驗に妥當すべき理性機能が可能であるか』といふ問題から出發したといふことは、確かに全く疑ふべからざることであり、實に此中に、人が後に彼の觀念論の主觀的特質と名けた所のものが存する。併し乍ら、同樣に疑ふべからざることは、批判の結果として常に、文化の偉大な形象に對する理性的根據の明示せられしこ

とである。純粹理性批判ではカントの見た學の根本構造、實踐理性批判及其上に立てられた道德形而上學では道德及法律の理性的目的の王國、判斷力批判では藝術及美的人生形成の本質が示された。而して其後に始めて、批評的方法の意味に於いて、社會の宗敎的生活形式の中に、單なる理性からの此等の文化價値がどれだけ含まれてありうるかといふことが問はれた」と。

併し、一般に文化哲學といふ時、此意味に於けるもの許りあるのではない。ヴィンデルバントはやはり右の論文で文化哲學に種々の體型あることを述べて居るが、其に依ると、先づ兩極端ともいふべき二つの種類がある。第一は、將來の文化の理想を樹立し、現實の文化狀態の價値批判の普遍妥當的規範を基礎づけんとするものであり、第二は、歷史的に存在し、與へられて居る文化を理解することに其職能を限局せんとするものである。前者は價値を創造し命令せんとするもので、後者は之を探し、理解せんとするものである。而して、此等兩種の文化哲學の間に介在する多數の種類の文化哲學がある。といふのは、一面に於いて課せられた文化の將來の形象は與へられたる過去及現在の文化についての考に依存するものであり、他面に於いて、與へられた過去及現在の文化を哲學的に理解せんとせば、其將來の發展を考慮に入れねばならぬからである。何故さうなるか。一つには我々の最後の問題は、如何にせば與へられた狀態からかの理想を實現しうべきかといふことであるからであるし、二つには、現在の文化といつても其は常に歷史的進展の中途に在るもので、自己を超えて、將來を指示するものであるからであると。然らば如何なる人々が何れの種類の文化哲學を說きつゝありや。ヴィンデルバント自身が後者に屬するは明であるが、彼は他の人々については之を語つて居ない。が前者の例としてニィチェやオイケンやカイゼルリンク、チェンバレンの新浪漫主義やを擧げて差支へないと思ふ。ジムメル等は中間の種類に屬する者であらう。猶我國でも此語が此等の種々の意味で用ひられて居るやうである。

文化哲學の名稱と其大體の意義は右の如くであるが、文化哲學の名で示さるべき所のものゝ歷史は一層前に遡つて行く。現にヴィンデルバントはカントの哲學を、ユィーベルウェッヒの哲學史はニィチェの哲學を文化哲學としたが、カントもニィチェも文化哲學といふ語は用ひて居ないのである。然らば何人から之が始るかといふことになるが、之には文化といふ語をも少し深く明にすることが必要である。文化 Kultur といふ語は自然 Natur に對立する語で、元來羅典語の cultura よりいで最初は土地を耕作するといふ意味であつたが、次第に一般化して、今日では、元來價値のない所の自然物を盛り育て、加工して、之を高貴なものにする、卽價値のあるものにするといふ意味で用ひられて居る。卽自然の理想化或は理想化された自然を文化といふ。之と似た語は英佛語の文明 Civ-

ilizationであるが、併し、Civilization といふ語が元來市民を意味する Civis からいで、一層精神的意味を有ちさうであるのに、事實は文化の方が精神的意味をもつて居る（尤も英米佛人の中には其反對の意見の人もあるといふ（桑木博士「文化主義と社會問題」參照））。

さて若し文化の意義にして右の如くであるとしたならば凡そ吾人の理想、理想實現の行爲、實現せられたる理想等を論ずる哲學はみな一種の文化哲學であると見ることをうる。又理想に從つて思惟し、意志し、行爲し、創造することを以て人生の人生たる所以の本質であると考ふれば、人生哲學は卽ち文化哲學である。かく考へて行けば文化哲學の領域は非常に廣大である。普通價値の哲學といはるゝ認識論、倫理哲學、美哲學は固より、法律哲學、經濟哲學、歷史哲學に至る迄總て其中のものである。妥當の哲學といふ名稱も文化哲學と內容を等しくすると言ひうるである。然らばさういふ方面の研究は希臘の古代から、殊にソークラテース、プラトーンから已に存して居る。猶太思想の如きは全部之であると言つて差支へないであらう。

けれども、私が今文化哲學といふ時にも少し狹い意味に之を限定したい。單に文化の研究或は體系的研究といふ意味でなく、文化の概念を中心として一切の知識を內容的に統一せんとする者をしか名けたいと思ふ。も少し細かく說明すれば、第一に文化現象を上述の諸種の自然哲學的諸學說で說明する試みも存するのであるが、かゝるものは除くこととし、又文化現象の研究の中には單に文化現象の研究に止つて之と自然現象との關係を論せぬものもあるが之も除くことゝし、最後に文化現象の事實のみを論じて、之がさし示す理想を論せぬものもあるが之も除くことゝし、殘れるものをこゝで特に文化哲學といふ名で示す。殘つた學說といへば、文化の概念を自然の概念より獨立なるものとして樹立し、此概念に依つて自然現象に關する知識も統合し、又過去及現在の文化現象を說明するのみならず、將來の理想をも論ずるといふ包括的な職能をもつた學說である。故に其はヴィンデルバントが擧げた二つの極端なタイプの中間を占むる種類のものゝ一つである。併し文化の概念から出發して一切の知識を統合するといふ意味に於いて、單に文化哲學といへば哲學の一科であるといふ感を懷かせ易く、誤解を招く憂があるので本節の表題を文化哲學的諸學說となした。私の考では哲學は一切の知識の統一的學であり、形而上學は一切の知識の內容的統一の學であり、統一は一つであるべきであるから、自然の概念と文化の概念とを豫め對立せしむることは能きぬ。何れかを他に從屬せしむるか、第三の概念に依つて兩者を統一するかの途しかないのである。自然の概念に依つて統一するのが前節所說の自然哲學的諸學說であり、文化の概念に依つて統一するのが文化哲學的諸學說である。

二　文化哲學的學說の生起の理由　さて、斯る意味の文化哲學的形而上學說を論ずるについては私共は先づ斯る學說の生ずるに至つた理由を消極積極二つに分けて考へて見ることが便宜である。消極的理由といふは文化現象が上述の自然哲學說諸學說の何れを以ても十分に說明することの能きぬ或物を有つて居るといふことであつて、積極的理由といふは、文化の概念を以て或意味にて自然の概念よりも高位なりとなしえないかといふ希望のあることである。

先づ消極的理由について述べるならば、文化といへば上述の如く自然の理想化或は理想化せられた自然を意味するものであるから、第一に其は私共の意志のはたらきに關係ありと言はねばならぬ。第二に其意志のはたらきは何等かの意味にて自然より獨立なる價値意識に左右せられると言はねばならぬ。何となれば意志に關係なければ自然は自然の赴くが儘に進行し、それが特に理想化せられるといふことはありえないし、又若し意志のはたらきに關係しても、意志そのものが自然の理法以上に出づることが能きないものであつたならば、自然はやはり理想化せられることはないであらう。故に自然の概念と文化の概念とは始めから相容れぬものである。然るに上述の諸學說は何れも意志を以て自然より獨立なる價値意識に關係あるものと見ずに、反對に自然の自然必然的連續として發動し、行爲して行くものと見るのである。其故に其は文化の本質を見逃すの結果となる。例へばカントの哲學は哲學的文化の史的一斷層を示すものである、之をカントの頭腦組織の機械的運動に依つて自然必然的に生じたものと考へて、彼の哲學を理解しうるであらうか。ロムブロゾーのやうな學者はさう考へるかも知れないけれど、文化の價値意識との關係は現れないのである。

然らば次に積極的理由は如何といふに、之又右の自然の理想化又は理想化せられた自然といふことを深く探究することに依つて明瞭となる。こゝに對立して居る概念は自然と理想との二つであるが詳しく分ければ三つある。自然と理想と理想の實現との三つである。而して此三つの概念は普通明瞭に區別しうるものと考へられて居る。例へば人類愛の爲に奮鬪しようと自己の行動の標準として立てたものは理想、此標準を立つるに先つて送られた生涯は自然、事實此標準に從つて生活を律して行くのが理想の實現である。理想は單に思想上のこと、其實現は行爲上のこと、三者は相互に獨立に理解しうるやうに考へられる。けれども、三者はさう單純に理解せられないものである。といふのは、理想の實現といふことが自然と理想との兩者を根柢としないでは理解できぬといふことは說明する迄もあるまい。例へば、一の藝術品をとつて考へて見る。ラファエルならばラファエルでよい。彼が聖ピーター寺の壁に書いた壁畫は一個の美の理想の實現であるが、之は一面から見ればラファエルの美の理想の表現であるが、他面から見れば之に用ゆる材料があつて始めて美の理想の表

現たる繪畫となつたのである。又基督教徒が耶蘇を理想の人格と見、佛教徒が釋迦を理想の人格と見て、一は之を神の子と稱し、一は之を如來といふ。此場合耶蘇や釋迦の四肢五體、生理活動は固より心理活動も自然科學的に説明しえらるべきことであるけれども、單にそれだけではない。彼等が發する言語、彼等の擧止動作、それに他の人々の言語、擧止動作とは同一に律すべからざる或物が存するのである。これ彼等の人格が一面に於いて自然的要素をもつと共に、他面に於いて、理想的要素をもつ所以である。然し理想をもつてゐるそのことは自然的要素をもつまいといふ疑問が發せられようが、これ又一種の理想の實現であるとも見られる。何となれば之私共の知的作用の理想化であるとも考へられるからである。例へば仁政により治國平天下ならしめんとの孔子の理想は孔子の夢として終に實現の機會をえなかつた。併し仁政に依る治國平天下の理想を有つてゐるといふことが又一つの自然の理想化であるといへるのである。何となれば知的作用が之に依つて以前と異つた趣を呈し來るからである。其故に理想の把持とか理想の實現とかいふことは自然の概念と關係さしてのみ理解できる概念である。けれども自然の概念が理想の概念に依存するとは如何にしても考へられぬやうに思はれる。

けれども私共は宛かも自分の現在を其理想を他にして考へえぬやうに、例へば自分の現在の病身の狀態を其理想狀態たる健康狀態を他にして考へられず、醫療養生に依つて之を回復するに努めるやうに、一切の自然をも「かく〳〵にあらしめたい」と願ひ、之を實現するに努めないであらうか。自然の河水は低きより低きに己が作つた谷を流れて居るのみ。けれども之を人工の溝渠に導いて灌漑に便し、發電の動力をうる。自然の儘では波浪高くて繫船に都合の惡い所に防波堤を築いて人爲の港を作る。山に埋れてゐたのでは何の役にも立たぬ鑛石を採取分析して有用な金屬材になす。そして此「斯くあらしめたい」といふ願望は終に一切自然に及びはしないか。固より天地一切を人間活動の領域となすといふが如きは、今日の人力では痴人の空想に似て居るが、併しさういふことが考へられないのではない。然らば、一切の自然はあげて、宛かもアリストテレースの質料が形式に對する質料であるやうに、文化の材料と見られはしないであらうか。自然は元來理想化といふことゝ結合して始めて全實在を作つて居るのを、理想化の一面を抽象して見たものといふことになりはしまいか。之が文化哲學的學説の生ずる積極的理由であると思ふ。

固より斯る考を此形で述べた哲學者があるか否かといふことは別問題である。唯文化哲學的學説の主唱者の學説の根柢を檢し來れば、陰に此處に根據を置くものと考へられる。例へばオイケンの「精神生活の哲學」の如きは好例であらうと思ふ。オイケンの哲學は決して文化哲學的といふやうな

言葉を中心にしては居ない。けれども精神生活に依つて自然を變化し、征服し、統一して行く所にあるべき世界を見て自然主義、唯物論等、私の所謂自然哲學的學說を斥けて居る所に、右の根據の暗に假定せられたるを認めうる。又之は非常に重要なことであるが、古來超驗的實在を假定する形而上學が多く唯心論的であるといふことも、かゝる理想化された自然の表象又は概念、換言すればあるべき世界の表象又は概念を實在化するといふ一原因が一面にはたらいてゐるといふことである。動因としての心作用の考察から、理論的に唯心論となるといふ一面もあるが、理想世界の實體化といふ一面もあり、そしてその方が寧ろ多く且つ强い。プラトーンの觀念界は箇物の原因であるが同時に目的である。アリストテレースの形式も、廣義では原因であつて同時に目的である。基督教の神は如何。宇宙萬有の第一原因であるが、同時に全智全能博愛といふやうな理想的人格の要素を具へて居る。彌陀教の極樂淨土の莊嚴は如何。其主たる阿彌陀如來の相好壽命誓願は如何。これ皆自然の理想化たる文化の實體化に他ならぬのである。

三　文化哲學的學說と文化科學と認識論　以上消極積極二理由に依つて文化哲學的諸形而上學說の興起を見る次第であるが、併し私共は未だ理想化せられた全自然を考へうるのみであつて之を實現して居る譯ではない。けれども部分的には、極めて小部分ではあるが實現して居ることも又確かである。そこでかゝる實現せられた文化のみを研究して行く科學が文化科學である。實現せられた文化は卽ち人間の歷史であるから歷史現象を取扱ふ學は文化科學と稱してよい。歷史を縱に眺める歷史學でも、之を橫に眺める政治學、經濟學、藝術學、道德學、宗教學でも。けれども文化は單なる自然ではないから、若し此特殊なる對象の特質を闡明するに不適當な方法で研究するならば文化科學は獨立の學たることを得ないであらう。そこで此特殊なる對象の特質に鑑みて文化の科學を獨立せしめんことを計るのは認識論である。前章の末尾に述べたヴィンデルバント、リッケルトの歷史學、文化科學の理論は其好例である。從つて文化科學獨立の歷史と文化科學の認識論とを考察することは文化哲學的形而上學說を攻究するに方つて豫備的な必要事項となつてくる。併し文化科學の全體の歷史を叙述することは到底概論の限られたる頁の許す所でないから、今は唯文化科學の認識論についてのみ述べる。

文化科學の認識論を自然科學の認識論に比べる時、注意すべき第一の點は認識の客觀性についての論議の誠に少いことである。リッケルトが「自然科學的概念構成の限界」の末章で之を論じて居る位のものである。併し乍ら其解答は私の考とは少しく異るが故に今は之を略して私の考を述べるに止める。私の考では、此論は前章末節に述べた認識客觀性論の結論を以てそのまゝ適用しうると

考へるのである。若し彼處に示したる如く、經驗といふ語を廣い意味に用ひ、認識の自律性を主張すると共に、認識と其對象とを混同することなき一種の實在論の立場に立てば、自然科學と同樣の理論もて文化科學の客觀性も論證しえられると思ふ。

唯問題となるは、文化科學が獨立の一科學として存すとしたならば、丁度自然科學に範疇論ある如く、文化科學にも之がなくてはならぬといふことである。而して此點については已に西南獨乙派などに樣々の試がある。例へばヴィンデルバントの「範疇の體系」(一九〇〇)に依れば、

- 反省的
  - 數學的
  - 形式論理學的
- 構成的
  - 實體性の系列
  - 因果性の系列
    - 力學的
    - 目的論的

とあり、又ラスクの「哲學の論理學」に依れば、

- 構成的
  - 存在の範疇
  - 妥當の範疇
    - 論理的
    - 美的
    - 倫理的
- 反省的一般的

となつて居る。之を歴史上有名なカントの範疇表に比するに一段の深さを加へて居ることは爭はれない。カントの範疇表ではヴィンデルバントの目的論的範疇に相當する者、ラスクの妥當の範疇に相當する者はない。これ全くヴィンデルバントやラスクに於いて上述の意味における文化科學を顧慮した結果に他ならぬ。何となれば、ヴィンデルバントが目的論的範疇に依つて進むといふ歴史學やラスクが妥當の範疇を立てなければならぬ事實とした所の認識、道德、藝術等に關する學、卽論理學、認識論、美學、倫理學等は、みな文化科學であるからである。

私は今此等二人の範疇論の批評は省略する。唯彼等が文化科學を顧慮したる範疇表論を立てんとせしことを指摘し、私も亦、その一點だけに於いては彼等に一致する者であることを言明するに止める。卽私は自然の理想化といふ意味に於いての文化の範疇を立てる必要を認めるのである。然らば私に於いて文化の範疇といふべきは何であらうかといふことであるが、其は價値といつてもよく、

又不許不といつても、妥當といつても、目的といつてもよいと思ふのである。蓋し其は理想化せられざる者に對して一定の、善とか眞とか美とかいふ價値を有するものであり、あるべき事であり、我々の努力の目的となる世界であり、眞、善、美として妥當する世界であるからである。

四　文化價値の種類、段階と其相關々係　文化は自然の理想化である。併しながら一口に自然の理想化といつても、自然は無限に多種多樣であり、又其理想化の仕方が千差萬別である。從つて文化といつても、「一の文化 Eine Kultur」ではなく、寧ろ「多くの文化 Viele Kulturen」がある。そこで之に種類を分ける企てが生ずると共に、全體を統一して一の文化となさんとする企てが生ずる。種類の分け方は恣意的なものであるから種々の分け方が可能である。最も普通に行はれるのは心理學上の知情意三分說に依つて行はれるものであるけれども、他にも多くの分け方が存しもし、存しえもする。知情意三分說に基く時は其作用の名に依つて主知的、主情的、主意的の三に、又此作用の結果と見なさるゝ學術、道德、藝術（宗敎を含むことあり）の名に依つて論理的、倫理的、美的（宗敎的を含むことあり）の三に分けられる。後の場合には多くの場合、文化價値の分類として示される。併し心理學上の知情意三分說と學術、道德、藝術の三分說とは必ずしも相應しなくてはならぬ不可避的理由を有しない。知る作用に依つて學術が發達する。けれども知らんと欲する作用と知る作用と結合して一體となれる場合がある。繪畫や彫刻の如き藝術品は美の感情の勝れた人に依つて創られ、味はれる。けれども數の系列の如き、普通は藝術品ならざるものにも絕大の美を感ずる人もある。又道德を意に配するが、測隱の情、愛の感情の如き情的要素も道德に關係がある。其故に、心理學上の知情意三分說と學術道德藝術の三分說との間には本質的相應關係は存しないのである。ナトルプが其「哲學、其問題と諸問題」（一九一一）に於いて論理學、美學、倫理學を分つに方つて、心理的根據に據らずに論理的根據に據るといつたのはこゝを言つたものである。併し之を理由として心理學的三分說に基く分類が絕對的に不可能だといふことにはならぬ。唯兩分類が一致しないだけの話である。のみならず分類の標準の採り方は隨意であるから、猶色々の分類が可能であらう。民族に依る分類も、國土に依る分類も可能であらう。

之に反して文化統一の仕方は恣意的ではない。恣意的ならば同時に多くの統一を許しうるのであるけれども、文化統一の場合には之は許しえないのである。必ず何等かの一つの文化が中心目的となつて他の文化を皆其手段又は副事項たらしめて行く。例へば藝術至上主義者にあつて最も尊い文化は藝術品の製作といふ自然の理想化であつて總ての他の文化は之に從屬せられて行く。道德至上主義者になると、道德が最も根本的な文化であり、他の文化は皆其手段とせられる。文藝は勸善懲

惡の手段であり、哲學は說敎でなくてはならぬと考へる。併し、同時に多くの統一を許しえないにしても、猶人に依り、社會に依り、樣々の種類の統一がありうるから其點より更に統一の要求が生じてくる。

實際に於いて吾人が文化作業に從事する時には必ず此文化統一を或程度迄行つて居るものである。併し或程度に至ると最早統一は完成せられずに殘されて居る。例へば國家について見ると、各國家夫々其範圍内で樣々の文化作業に從事して居るが、文化作業の各部面、例へば經濟活動、敎育施設、政治運動等が渾然たる一體として唯一の目的を追ふものゝ如くには遂行せられて居ないのである。單に所謂實際活動が然るのみならず、之が指導原理たる文化意識が統一せられて居ない場合すら多いのである。そこで樣々の矛盾や衝突が起つてくる。

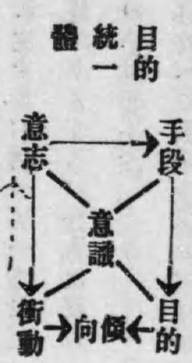
總じて此文化の統一といふ事柄を體系的に開展することは甚だ難かしい問題であつて、今日の所では到底單なる理念としてしか示しえない。そこで第一に生ずる對立は、文化の統一は結局せいぜい個人内部だけのことであるとする者と、然らずして普遍妥當的な統一が可能であるとなす者との對立である。之を文化哲學上の個人主義と團體主義と名けることが能きると思ふ。個人主義より一層極端になつたものが、個人内部だけですら文化の統一を認めず、箇々の理想活動を全く散亂せるまゝにおく所の刹那主義の如きものである。刹那主義に至れば殆んど無理想主義、虛無主義に近い。蓋しそこには理想と自然との對立は殆んど認められないからである。團體主義の立場に立つても又樣々の統一の仕方がある。先づ第一に究竟目的を量的に唯一箇の文化に限る場合と多くの文化を認める場合とが考へられ、次に量的に多くの文化が質的に同種である場合と然らざる場合とが考へられる。又更に此等樣々の究竟目的の各場合に應じて、夫々之に達する手段の相違から樣々の場合が生ずる。一例をあげるならば究竟目的を一箇に限る場合の如きは殆んどないのであるが、假に其に近い者を擧げるならばローマ法王神聖說の如きは之である。ローマ法王は一時には唯一人である。而して此神聖を保持することが全人類の最高任務であると昔のローマ正敎徒は信じて居たのである。又多くの文化を認める例としては民主々義の立場をあげえよう。民主々義の場合に於いては、各箇人は皆平等に究竟目的として普遍妥當的承認をうべきものとせられて居るのである。又究竟目的としての文化を多とする中でも、民主々義の如きは、何れかと言へば各人を質の上からも平等化せんとする傾向が强いが、中には質的には箇性化を重大視するものもある。敎育者が兒童をしてそれ〴〵其天分を十分に發揮せしめんとするが如きは後の場合である。又同一の究竟目的の下にも手段の相違に依つて樣々の立場が分れて來るといふことについては、例へば平和を最高目的とする平

和主義者の中にも、トルストイやガンジの如き絶對無抵抗主義者と、モハメッドやカントの如く戰爭を手段として必要とする人々との相違があるが如くである。

其故に文化の統一を論ずるについては猶一層細かい基礎的思索を必要とする。余は之を次に更にフランツ・シュタウディンゲルの考を批評しながら述べて樣々の學說を分類する基礎的理論としようと思ふ。

五　フランツ・シュタウディンゲルの目的態の構造に關する學說と其批評　フランツ・シュタウディンゲル（一八四九―）はカントの批評主義とマルクスの唯物史觀との結合を企てたことに於いて成功せる一人であるが、今は唯彼の目的態の概念についてのみのべる。彼が「道德法」（二版、一八九七）に示せる目的態の說明は極めて明快である。彼に依れば凡そ認識の對象たるものに二種ある。一は因果態の法則に支配せられる所の現象であつて、他は目的態 Zweck の法則に支配せられる所の事柄之である。前者は自然科學的認識の對象であつて、後者は生物學的科學並びに實踐的學の對象である。就中、人間の意識的意欲及行爲は尤も此目的態の本質を發揮せるものである。意欲の現れ方に階段がある。依りて今簡單なるものより見るに。例へば此處に人あり、胃の腑空虛となつた時は、一の衝動生じ、之が意識に上る。之を圖示すれば「衝動―意識」である。併しかく意識に上つた飢の未だ盲目であつて、其向うて進むべき對象を知らない。然るに此衝動を滿足せしむべき對象の意識を生ずるであらう。此對象卽目的 Ziel である。若し觸覺や視覺に依つて此目的例へば卓上の果物定められれば、肉體の之に相應する部分を動かして、衝動を滿足せしめる。圖示すれば「衝動―意識―目的」である。然るに更に高等なる段階に進む時は、吾人の行動は一聯の秩序正しき計畫的行動をなすに至る。其は目的の意識あり、其何たるかは明になりたれど、直接には之に達しえざる場合に生ずる。例へば一方に於いて飢餓の衝動を感じ、他方に於いて目前の高き樹木の頂上に熟せる果實ありとする。吾人は隣れる樹木より竿となるべき枝を折り取つて其果實を落すであらう。此場合の竿は卽手段 Mittel である。而して此場合二ケの重要なる事項が生ずる。第一に吾々は此手段が目的への到達を其結果として生ずるに適當な原因であることを知らなくてはならぬ。而して之は容易のことでないことがある。例へば重き荷物の運搬に蒸氣力を利用すればよいことは分つて居ても、之を利用する手段として更に機關車の發明を必要とし、之にはワットの天才を要するが如きである。第二は我等の意志を此手段をとることに發動せしむるの必要がある。之又容易ならざることがある。複雜なる手段を必要とする場合には、最初の衝動嵐の如くであつても、意志の發動が萎縮することがあるのである。いかに勉學の志があつても之に必要なる手段を探究するに困難である時

は初一念擡けて平々凡々の生を送ることあるが如くである。然し乍ら兎に角手段の認識及意志なくんば目的態は完成しない。兩者具備して目的態の內面的統一をうるのである。而して此內面的統一の一切の面を結合するものが意識である。意識を通じて衝動と目的と手段と意志とが一列の進行をなす。卽「衝動—意志—手段—目的」である。更に詳しく圖示すれば、



となる。之目的態の一般的形式であつて、之を支ふるものは意識である。卽上述の實踐的認識は此目的態の形式に支配せらるゝ現象を材料とする認識なのである。併し乍ら吾人の衝動は悉く非合理的であつて時と處とを擇ばず、前後の連絡なく生起する者であるから、其間に統一を作るの必要を生ずる。箇人內部に於いてのみならず、人間相互間にも此必要がある。蓋し各人生來の性質、年齡、環境、性別、教育、經驗異るが故に、其々異る目的態を有つて居るからである。箇人內部の場合に於いても、團體內の箇人間に於いても多くの目的態の間には大體三つの場合がある。先づ箇人の場合について述ぶれば、第一に二つの目的態が互に何等の矛盾のない場合がある。例へば今日書物を讀むといふことゝ明日友人を訪問するといふことゝの間には何等の矛盾がない。故に兩者は並存せしめうる。併し並存せしめうるといふだけであつて何等積極的の結合がある譯ではない。第二に二つの目的態の間に矛盾ある場合がある。例へばこゝに人あり、一つの河川の中に鱒を養ひ、又其河の岸に工場を立て、其落水は鱒を殺す物質を含むとする。此場合には兩目的態は必然的に矛盾する。故に其孰れかを放棄するか、或は兩者を調和する方法をとるかの他はない。第一の途をとるに方つては衝動の强さに從ふものであるが、兩者同一の强さの場合には偶然の方法で之を選擇することもある。第二の途を採る時には、矛盾を調和する方法を第三の目的態として立して二者を並存せしめる。前揭の例でいへば、落水を他所に落すとか、鱒を養ふ河を他となすか等の手段をとるが如くである。第三は二つの目的態の間に相互促進の有機的關係ある場合である。例へば工場の落水が農作物の灌漑や家畜の飼養に利用せられると共に、他方農作物及羊毛が工場の原料を供給する場合の如きである。次に箇人間の關係について言つても同樣である。各人の目的態が互に矛盾なく、又內的連絡も

なく並存せる、言はゞ、「天國的無邪氣」の狀態、各人の目的態間に矛盾あり、一を抑へて他を生かすか、一の補助目的態を設けて之を生かすかせざるべからざる場合、各人の目的態相互に促進し合ふが故に、兩者の孰れをもすつべからざる場合之である。甲家の某甲が創作に耽り、乙家の某甲が農業にいそしむが如き場合は第一の場合である。同一の財寶、同一の異性等を甲乙相爭ふが如き場合は第二の場合である。此場合各主張を曲げず、放棄せざる場合は終に爭鬪となり、譎詐、權謀、腕力等を用ひて雌雄を決するに至る。之が相互の讓歩に依つて妥協點を見出す時挿入する所の補助目的態卽契約であつて、兩者の權利の限界を示すを以て目的とする。第三の場合は、例へば一の營業に於いて甲は注文取の方面、乙が商品仕入の方面を擔當するが如き相互扶助の場合である。而して一切の目的態を統一せし目的態を最高目的態とすると。

所論明快、疑問を容れる餘地は殆どない。けれども今私の本概論の立場に立歸つて考ふるに第一に目的態の構造そのものは文化の形式論であつて文化の內容の論でない限りに於いて、文化哲學的學說そのものには關係なく、唯文化の基礎理論を立つるに方つて參考になる。第二にかの目的態の形式に於いて衝動や意志は恰かも目的や手段卽客觀的方面の項たりえないが如き觀を懷かせるが、若し然らば其は訂正せらるべきである。衝動そのもの、意志そのものも意識の中で目的態の一項を爲すことがあるのである。意志の鍛練とか衝動の抑制とかいふ言葉は之を語るものである。其故に、私共は言語に誑されて、意志や衝動が目的たりえないなどゝ考へてはならない。

今此だけの注意事項を忘れずに此シュタウディンゲルの考を本として考ふるに、私共は、之に依つて諸種の文化哲學的諸學說を分類すべき基礎理論をうるやうに思はれる。第一に其は箇々の目的態を文化活動の單位として箇々の單位そのものに價値を認める刹那主義の如きものから一箇人內の諸目的態の統一を絕對善とする個人主義を經、社會の成員各自の統一的目的態の相互統一に更に高位の價値ありとなす社會主義或は團體主義の諸學說迄色々の區別を立てることができる。つまり前述の注意事項の第一に依つてかの目的態論そのものは文化の形式論と見做されるけれども、注意事項の第二に依つて目的態の形式そのものを內容と見なすことをもうるが故に、かゝる學說の分類を爲すことをうるのである。併し、刹那主義の如きは、前にのべし如く、殆んど主義とする價値のないものであるが故に、私は之を除いて先づ個人主義的學說と社會主義的學說とを對立せしめる。併し此意味の個人主義的學說と社會主義的學說との對立は實はそれだけでは餘り意味がない。何故なれば其は目的態の綜合が量的に如何程行はれたるかを示すのみであつて、其目的態の最主要なる項をなす目的(目的態にあらず)の性質については語る所がないからである。其處で第二には此目的の性

質について種々の學説を分くることを得ると考へる。而してこゝに生ずる對立が人本主義と物本主義(原語は唯物論の原語と等しく Materialismus であるが、文化哲學上の學説としては特別の譯語を設くるが宜しいと思ふ。假にかく譯する。)との對立であらうと思ふ。人本主義といふのは、箇人のにもあれ、人類のにもあれ、凡そ人間の理想化を以て究竟目的となすものをしか名け、物本主義とは、法律學上の所謂物件の理想化を以て最後目的となすものをしか名ける。而して人本主義の中にては更に箇人を主とするものと全體を目的とするものとあるべく、此意味にて又箇人主義と社會主義との區別をなしうべきが故に、箇人主義と社會主義とには各二ある譯である。依りて之を區別するため、前者を文化形式の理想化の上より見たる分類とし、後者を文化内容の理想化の上より見たる分類としておかう。

第二項　文化形式の理想化の著眼點に立つ

文化哲學的諸學説

第一目　個人主義

一　個人主義の諸種類及本項目に於ける個人主義の意義　個人主義と名けらるゝ所の學説を歴史について分類し來れば其種類は三四にして盡きぬ。前項で、本書では二種を分くることをのべたのであるが、之は私の意見にて先づ二種に分けたといふだけの話である。ゲオルク・エー・ブルックハールトの「個體主義 Individualismus とは何ぞや」(一九一三)といふ論文の如きは個體主義を大きく八種に分け、更に小さく三十九種に分けて居る。固より其中の全部が邦語の個人主義に相當すべきものといふのではないが、大部分は個人主義と稱して差支へないものである。即、國家的存在の内部に於ける箇人としての箇體を中心とする部類内の五種、國家よりも狹い團體への關係に即して區別せらるゝ箇人としての箇體を重んずる部類の六種、生得的に特性をもつて生れ、特有の發展をなす人間としての個體を中心とする部類の五種、自發的に道德的行爲を示し、生産的創造を爲す個人としての個體を中心とする部類の三種、觀察、研究、省察をなし、言語の能力を賦與せられて居る所の個人としての個體を中心とする部類の七種等の如きは皆個人主義と邦譯して差支へない所の學説である。故に細く分くれば個人主義の種類は實に多種多樣なのであるが、私は文化哲學上の個人主義として先づ文化形式の理想化といふ著眼點に立つ個人主義と文化内容の理想化といふ著眼點に立つ個人主義との二種に分くることゝし、本目では、前者のみを論じたいと思ふのである。

所で文化形式といふ語を用ひ、前項でシュタウディンゲルの目的態論を文化形式論であるとして多少之を解釋して居るのであるが、今、個人主義そのものゝ論に入る先つて、も少し之を明かにして置かう。さて、凡そ文化は自然の理想化であるが、之は總て人間の意欲の實現として現れるものである。例へば水田の開發、鑛山の發掘、車馬舟楫の利用から、土木、建築、美術、學問、道德等に至るまで、皆我々が之を意欲することに依つて、それ〴〵文化の一特殊形態をなし來るのである。ゲルマン民族が基督敎とローマ文明との感化をうけ、所謂羅馬的ゲルマン的文化の花を咲かせたについてはローマ法皇の敎權擴張、敎旨普及の意志、神聖ローマ皇帝例へばカロ、大帝の敎政本位の政治的統一の意志、ゲルマン民族一般の進んだ文明を吸收せんとするの意志等を考慮しなければ之を理解することは能きない。佛蘭西革命以後の第三階級文化を理解せんとすれば第三階級の所謂自由、平等、友愛の理想を實現せんとする意志を根柢にして考へねばならぬ。故に各個人の各意欲を文化の單位とすることができるのである。而して此意欲を論理的に分析して見れば、シュタウディンゲルの圖形化したやうな目的態の組織となる譯である。所で、この目的態は一面に於いては、實現せられた理想的現實態とも考へられるが、他面に於いては、未だ實現せられざる意識內の表象結合とも考へられるが、後の意味にては其は吾人の心內の事項であるから、未だ一般的に文化の名を冠せられえざる所のものである。唯前の意味にてのみ文化の名を賦與することが可能である。然る場合、後の意味の表象結合としての目的態は、之(前の意味の目的態)が形式的部分となるのである。意志が此目的態に依つて規定せられて特殊の意志となりゆくのである。盲目的な意志が目的點を限定せられたる意志となり、其目的の實現に向つて進行しゆくのである。然るに此全一態としての意志活動に於いて前の意味の目的態を中心として考ふる時には到著點の如何が主となつてくるから、之さへ達せられゝば後の意味の目的態の所有者卽意欲者が誰人であるか、多數であるか一人であるかといふやうなことは問題でないが、後の意味の目的態を中心として考ふる時には、各意欲を、少くとも意欲の發動者を、それ〴〵同價値の單位として考へるから、そこで、內容はともあれ、いかにせば、最も圓滑に意欲の結合を計り、衝突を緩和すべきかといふことが問題とならざるをえぬ。で、後の意味のものを文化形式の理想化を著眼點とする文化學說とする。然るにかやうな著眼點に立つて見ると意欲の內容は問題にならぬから、勢ひ各意欲それ〴〵を、又各個人の意欲の全體それ〴〵を單位として唯之を數的に見るといふ結果になるのである。そして其處に生ずるが一か多かの爭である。

其中個人主義といふは、それ〴〵一箇の意欲者としての各人が自己の發する意欲のまゝに行動す

る外ない、他の多數者の意欲と一致すればともかく、然らざれば、自己の意欲を標準とする他途はないと主張する考である。

二　斯る意味の個人主義の最近の代表的學說　個人主義の概念內容が樣々で、其區別が十分明にされて居なかつたゝめ、從來、特定の意味をもつ如何なる體型の個人主義についても然りしが如くに、此意味の個人主義についても其歷史を純粹なる形にて敍述したものはなく、其は事實殆んど不可能のことである。一般に個人主義と言へば、殆んど總ての人は何等かの意味にて個人主義であり其中の顯著な學說だけを集めても、希臘の詭辯學者から始めて啓蒙時代の諸學者から、最近のニィチエ、カスバール・シュミット（一八〇六—五六）に至る迄澤山ある。キュルベのあぐる所では、ソークラテース、ストア學派、エピクロス學派、スピノーザ、ホッブス、デカルト、ライプニッツ、カント、フィヒテ等が皆何等かの意味にて之に入るとされて居る　けれども此等の諸學說には他の意味の個人主義も含まれて居り、之を一々甄別することはできぬから、其中最近の代表的學說としてニィチエとカスバール・シュミットとを述べて見よう。固より此等の二人に於いても、其學說の個人主義たる所以が全く一義的であるといふ譯ではない。之は豫め承知して置いて貰はねばならぬ。

イ　カスバール・シュミット（筆名マックス・シュティルネル）の個人主義　彼はバイロイトの生れで、伯林在學中ヘーゲルの講義を聞いたこともある。故に學統からいへばヘーゲルの徒であるが、勿論左黨に屬してゐる。但し同じ左黨でもマルクスの如く社會主義を唱へず、個人主義を唱へた所は全く違ふのである。大學其他高等諸學校に敎授したことはなかつた。數年間高等女學校に敎鞭をとつたことはあるが、其後新聞通信員として生活したことはなかつた。一八四五年「唯一者と其所有」を著して文卷（一八五二）のみ名一時に高くなつたが、其後間もなく彼自身の名も此書の名も世人に忘れられ、貧窮孤獨の中に早く世を去つた。彼には著作の量少く、目星しいものは、此「唯一者と其所有」の他には「反動史」二卷（一八五二）のみである。併し此一卷の書に說かるゝ所は實に徹底した個人主義であつて、其故に二十世紀に入つてからは此書は各國語に飜譯せられ、廣く注意せらるゝに至つた。實に近代の無政府主義の如きも此シュティルネルを一の淵源とすると稱していゝ。卽佛國のプルードン（一八〇九—六五）と比肩すべき無政府主義的思想の一源泉は彼なのである。唯プルードンと全く違ふのは、後者が社會主義的なるに對して前者が個人主義を基礎とせることである。今其個人主義の如何なるものなるかについて少しく述べようと思ふ。

「唯一者と其所有」は「余は余の事柄を何物の上にも立てぬ」といふ言葉を以て始り、又終る。が、彼は此語の示す通り此書に於いて、法律、道德、宗敎に於ける一切の權威をふり捨てるため、曾て

我々人間によつてなされたる最も大膽なる企をなして居る。彼に依れば、あらゆる事物の尺度は、そこにあるがまゝの「我」である。此個人々々の絶對的自由が人間生活の最高の目標である。此自由を束縛するものは何物と雖も之を承認することが能きない。「余の上に立つものは、其が神であらうが、人間「一般的に考へられた」であらうが、余の唯一性の感じを弱める。又此「唯一性の」意識の前に始めて力を失ふ」。人類といつてもやはり唯自己を究竟の目的としてゐるのであるから、個人を犠牲にして憚らぬ。神といつてもやはり同じである。神は眞理や愛を其任としてゐるといふものゝ、其は彼自身が眞理であり、愛であるからに他ならぬ。從つて人類も神も極端な自我主義者である。從つて余も之を自己の究竟の目的となすべきである。余にとつては余が唯一者であり、全體であると。されば彼は彼自身の他に種々の意味にて權威とせらるゝもの—神、皇帝、法王、母國等を總て棄却した。かういふ點ではシュティルネルの思想は政治上の民主々義、經濟上の社會主義等と同樣の偶像破壞をなして居るのであるが、シュティルネルに特有なるは正しく此政治上の民主々義、經濟上の社會主義等をも自我の絶對自由を束縛するものとして排斥する所に存する。

彼は政治上の民主々義を政治的自由主義、經濟上の社會主義を社會的自由主義と呼び、之に對して、其は古代の專制政治よりも一層大なる壓迫を個人の上に與へるものであるといふ非難を浴せて居る。前者は多數決といふことに依つて、時に、如何に立派なる箇人の意欲をも壓迫し去り、又後者は總ての人を勞働者社會といふ一の新しい女王に、新しき怪物に奉仕せしめる—といふのが彼の理由である。

然らば彼によれば箇人は唯自己の意欲にのみ從ふべきであるが故に、他人の意欲は全く顧慮する必要がなく、從つて社會は、成立しないとしたかといふに、さうではない。各人自己の意欲に從つて行動すべきであるが、其爲に一切の社會的生活が終を告げるといふことはない。一切の交通、友情關係—即、愛の原理や社會性の原理に依つて創造せられる所の一切のことがらが消失して了ふことはない。反對に、各人自己の意欲に從つて行動するとも、之を達成する手段として他人を必要とするが故に、他人を求め、他人と結合しなくてはならぬ。他人も亦然りで、相互に求め合ふからやはり社會といふものは成立する。唯此社會はかく各個人の意欲を中心として成立するものであるから社會といふ特殊の存在が個人の上に存在して個人を拘束するといふことはない。唯結合の意志のある限り結合し、結合の意志の消失するや解體しゆくものである。シュティルネルは之を「自我主義者の聯合 Verein von Egoisten」と名けた。曰く、「自我主義者たる私にとつては、此人類社會の福祉といふことは全く念頭にない……。私は之を絶滅し、其代りに自我主義者の聯合を作る」と。然

らば此自我主義者の結合に於いて何が結合の役目をなすかといへば勿論各個人の意志が相互に他の意志を手段として達成せられるといふことであるが、之を示すものが契約 Konventionalregeln であるといふ。

かく個人の意志の上に君臨する社會を認めぬ所より彼の個人主義は無政府主義 Anarchismus となるのである。

ロ　ニィチェの個人主義　ニィチェが個人主義者たることは疑ふことが能きない。けれども彼の個人主義はシュティルネルよりも、文化形式の理想化の主張の一面が背面に隱れて居る。それ程文化内容の理想化の方面が前面に出て居るのである。

彼もシュティルネルと等しく講壇の哲學者ではない。リュッツェン近傍のルェッケンに牧師の子として生れ、早く父に別れたる後母の手に育てられ、シュールプォールタにて基礎教育を受け、後ボン及ライプツィッヒにてリチェル（一八二二—八九）の下に古代言語學を修め、リチェルの推擧に依つて瑞西のバーゼルに教授となつた。三十六歳、偏頭痛及眼病の爲教職を去るの止むをえざるに至り、以後絶えず病魔と戰つて生活したが、又其間常に著述に從事して休むことがなかつた。併し終に精神の錯亂を起して母及妹の看護を受けつゝ一九〇〇年逝去した。

彼はカントのやうな冷靜緻密な思索をことゝする哲學者ではなくて、情熱的直觀的に事物の心核を把握する哲學者である。ルードヴィッヒ・シュタインの言葉を用ふれば詩人的哲學者である。彼の哲學は常に人生問題、文化の問題を中心とするものであるが、其學說は幾度も急激な變化を示して居る。哲學史家は其思想の發展を大きく三時期に分つを常とする。第一期は希臘思想とショーペンハウェルとの影響を最も强く受けた時代である。けれども希臘思想の晴朗快活なるアポロ的一面とショーペルハウエルの小乘佛教的自我否定とは彼の與せざる所であつた。彼はショーパンハウェルの厭世觀を全くすてたのではない。否希臘思想の中にさへも一種の悲壯幽欝の卽ディオニソス的の要素を認め、喜んだのである。此期の代表作たる「悲劇の出生」（一八七二）は此精神の下に希臘悲劇の出生を說き、彼の友人たりしワグネルの樂劇が再び此精神の下に獨乙人に眞の悲劇を知らせたことを說いたものである。彼は又此期に於いてはショーペンハウェルの影響を受けて人生卽文化の中心は藝術にありと考へて居た。曰く、「唯、美的現象に於いてのみ世界は永遠に正しい」と。其故に、藝術を至上價値とせざる學說には强い反對の態度をとつた。之を示すものが「時代にふさはしからざる考察」（一八七三）である。之は「信者及著述家としてのシュトラウス」、「人生に對する歷史の功過」、「敎育家としてのショーペンハウェル」、「バイロイトに於けるワグネル」の四篇を輯めて居るが

其中の第一の篇ではシュトラウス（ニィチエの考ではシュトラウスのみならず、ユルゲン・ボーナ・マイヤー、リール、クーノー・フィッシャー、ロッツェ等當時の學界の幾多の大星小星を攻擊するつもりであつたといふ）を俗學者 Philister の代表者として攻擊して居る。彼に依れば、シュトラウスは聖典中の神話的要素を排斥するものなるが故に、詩神の子たる藝術家、卽眞の文化人 Kulturmensch の敵であるからである。又第二の篇では、當時の學術研究が過去の歷史の研究に沒頭せるに省みて、歷史研究なるものゝ利益と弊害とを、しかし主として弊害をのべて居る。利益といふは三箇。一、大きな模範を後世に殘すこと、二、過去の理解を易からしめること、三、現前の事實に對し批評的ならしむること之である。弊害といふは五箇。一、過去を重んずるがため、自ら進んでなすといふ獨立獨行の心を殺ぎ、人格をして羸弱ならしめること、二、やはり過去を重んずるため、正しい判決の標準が過去にあるといふ考を懷かしむること、三、民族の本能を害し、自由なる發展を遂げしめないこと、四、人をして自ら亞流末流の者である、賤劣なものであるといふ卑屈な考、否寧ろ迷信を生ぜしむること、五、人をして徒に自嘲自破の心を生ぜしむること之である。そこで、今此第一期の彼の思想を見るに總て事物を個人中心に考へて居ることが看取せられるのである。他人、或は一般に社會の意志に依つて自己の意志をどうしようといふのではない。又自己の意志を以て他人、又は一般に社會の意志をどうしようといふのでもない。唯自己の意志を以て自己をどうしようゝ如何なるものを最高價値とみとめて、之に自己の意欲を向けようといふのが基調になつて居る。而して此最高の價値を藝術の創造鑑賞に求めたのである。故に先づ此點に於いて個人主義的である。固より彼の人生觀が他の人生觀と常に一致することはありえないからそこに個人對個人及社會の意志の爭鬪は豫想せられて居、其故にこそシュトラウス、歷史家等に攻擊の矢を向けたのであるが、さういふ場合でも、いかなる文化內容を最高價値とするかといふ上の衝突と見て客觀的に評價しゆくといふよりは、「これは自分の唱ふる意見だ」といふので自說を高く見る方が强かつたらしく思はれる。その意味でも個人主義的であるといへる。

此第一期の個人主義的要素は第二期、第三期を通じて變らなかつたのみならず、寧ろ强められて行つた感がある。第二期に於いては、彼は、バウル・レー、オイゲン・デューリンク等の感化を受けて第一期に强かつたロマンティッシュの色彩が弱くなり、餘程實證主義的となつて居る。又伊太利に遊んだ結果從來のディオニソス的人生觀より、アポロ的人生觀を重んずるに至つた。そして更に又第一期に於いては藝術を文化の中の最も價値あるものと見做したが、此期では、知識、學問が最も價値ある文化とせられて居る。で文化內容の理想化といふ點より言へば藝術至上主義から學問至上

主義に移つたものと考へられよう。が、其が第一期に於けるが如き個人主義的要素をもてることは依然として居る。やはり、如何なるものを最高價値と認めて之に自己の意欲を向けて行かうかといふのが、主眼となつて居る。そして之を學、知識とし、之を人生の極致としたのである。眞正の文化人は最早藝術家でなくして唯學の爲に學を求むる人間、卽學者、彼の言葉を以て言へば自由精神 Freigeist である。而して知識、學は最高の價値をもつたものであるといふ意見は文化內容の上からの意見であるが、彼はそれが自分の意見であるといふ以上、他說との客觀的比較などは顧慮しなかつた如くである。故に此意味でも第一期の個人主義的要素はそのまゝ殘つて居る。「人間的な、餘りに人間的な」(一八七八)の如きは此期のものである。

第三期は前兩期の思想の綜合せられた時代で最も個人主義的色彩の强い時期である。其代表的なる著作は「ツァラッストラ如是說」(一八八三—九一)であるが、其他、「善惡の彼岸」(一八八六)、「道德發生論」(一八八七)等も重要である。第三期に特有であるのは、文化の極致を道德に求めたことである。而して道德とは何ぞ。それはつまり私共の行爲を理想的ならしむるにあるのであるが、ニィチェに依れば此理想化は、或特定の個人をして眞の人間、力强い人間、卽、天才、權力意志の權化、所謂「超人 Uebermensch」を產出することに在る。然るにかゝる超人は特定の個人であるが故にさういふ個人にとつては世間の道德は役に立たぬのである。さういふ個人は自己の意志の命ずるまゝに權力を振ひ、傳統習俗に抗して新しき文化を創造せなくてはならぬ。事實歷史を見ても過去の文化は皆强大なる意志の所有者たる個人の力を俟つて創造せられて居る。各國民が多少皆英雄崇拜を爲して居るも之に基くのである。故に自己を犧牲にするといふやうな道德、所謂奴隷道德 Sklaven-moral は超人には存しない。超人の道德は全く自律的な君主道德 Herrenmoral であると。各時代の文化の支持者が特定の個人でなくてはならぬといふこと、君主道德はかゝる特定の個人の道德であるといふことは、其以外の人々の道德をして奴隷道德たらしむるの觀があつて、そのため、彼の個人主義は貴族的個人主義たるを免れないけれども、とにかく一種の個人主義には相違ない。「ツァラッストラ如是說」第一部の最初のツァラッストラの演說は「三樣の變化」と題する話である。之は私共の精神の進化過程を三段に分けて寓喩的に說いたものである。彼に依れば、精神は先づ駱駝となり、次に獅子となり、最後に小兒となる。駱駝となつては「何が最も重いものであるか」と問ひ、一切の重荷を負ふて砂漠を走つた。然し乍ら荒凉たる砂漠の中で自己の自由を回復し、自らの主たらんとし、獅子に變化する。そしてそれ迄彼に命令した最後の主と戰ふ。其最後の主は「汝宜しくなすべし Dusollst」といふ大きな龍である。此大龍が今や獅子となつた精神の路上を塞ぎ、しかも

其鱗の一片々々に金色燦然と「汝宜しくなすべし」といふ文字を輝かせ、且つ「一切の事物の價値は余の身に輝いて居る」といひ、「あらゆる價値は已に創造せられてゐる。そして一切の已成の價値は―余である。實に最早此上『余は欲す Ich will』といふべき餘地はあるべからざることだ」といふ。けれども獅子となつたる精神は「余は欲す」と叫んで大龍に反抗する。けれども獅子たる精神のなしうる所は新しき價値創造の豫備的事項たる自由の回復のみである。價値の創造そのものは獅子のよくし能はざる所である。そこで、精神は三度變化して小兒となつた。然らば小兒は獅子のなしえざる何事をなしうるか。小兒は無邪氣で何事も忘れてゐる。更始の狀態で、遊戯三昧、自轉する輪の如くであり、運動の初發狀態の如くであり、神聖なる肯定であるが故に創造をなし、「自己の意欲を意欲し」失はれたる自己の世界を我ものとすると。此獅子と小兒とは明かに自己の意欲に生きる個人主義者の消極積極兩面を示したものと考へることが能きる。序でながら、こゝに大龍に象徴せられし「汝宜しくなすべし」はカントの道德を諷示せしものと考へられる。

ニィチェの考は、學界といふよりも、寧ろ一般思想界に影響する所極めて大であつた。而して今日と雖も猶其影響の跡は大きいのである。ルードルフ・シュタイネル、エルンスト・ホルネッフェル、モングレ等、彼の感化を受けし人の名は屈指に遑がない。我國でも明治の三十年代に高山樗牛氏等に依り大に紹介せられた。けれども彼の思想は多角的であるから、常に上述の個人主義的一面を强調する人でのみないといふことは言ふ迄もない。猶一九二二年ヴェルツバッハに依つて、あらゆる國土に於ける善良なる歐洲人を彼の名の下に叫合せんとする「ニィチェ學會」なるものが創立せられて居る。

三　此意味の個人主義の批評　精神力の薄弱なるものに於いては、自己の意欲は常に他人の意欲に支配せられて居る。此他人の意欲は父母兄弟友人知己等共に生存せる或特定の個人の意欲である場合もあるし、漠然たる社會の集合意欲であることもある。又、法律といふ形式で示されることも習慣といふ形式で示されることも、聖者の金言を以て示されることもある。がとにかく、他の意欲者を、程度の差はあれ、或權威として之が意欲する所を行ふ。ニィチェの所謂駱駝の如くである。唯服從して行く。他律的である。小兒の親に於ける、學童の教師に於ける、未開人の文明人に於ける、皆然りである。此服從が自ら服從すべき理由あるが故にしか欲して爲さるゝ場合ならばよろしいが事實に於いては然らざる場合が多くある。けれどもさやうな服從は意欲者としての自己人格の無視を意味するものであるが故に、私共は何處迄も自己の意欲の蹂躙せられぬやうに努めねばならない。其意味に於いて此個人主義の學說の教ゆる所あるは確實である。其は獨立自尊、獨行獨歩の人

格を作つて行く。而して近世の文明が此自我意識を支柱として發展してきて居ることは今更こゝに言ふ迄もあるまい。

けれども「我はかく欲す」といふことだけを意欲、行爲の規準とするといふことは能きぬことである。カスパール・シュミットに於いても、ニィチェに於いても意欲の内容について更に一定の理想をもつてゐ、それが吾人の堪えゝられぬ底のものでないから幸によいものゝ、唯此意味の個人主義の一面にのみついて言へば、吾人は恐らく、吾人が普通不道德的行爲と認むる所の所行をも、之をなす個人がかゝる行爲を爲さんと欲したといふ理由を以て是認せねばならぬであらう。其故に此意味の個人主義を唯それだけで意欲、行爲の規準となすことはできない。

第二目　社會主義（民主々義）

一　社會主義の諸種類及本項目に於ける社會主義の意義　其對概念である個人主義が多義なる如く、社會主義も亦多義である。けれども本目に於いて論ずる所は、本項第一目に論せし個人主義の對概念としての社會主義である。

此意味の社會主義を此名を以て呼ぶことは一見不適當の感あるを免れない。蓋し、一方に於いて普通此名を以て呼ばるゝは文化内容の理想化の著眼點から、個人よりも社會一般の幸福を目的とする學説、殊に經濟上に於ける社會本位の學説であると共に、他方に於いて此目の意味の社會主義は民主々義の名を以て呼ばるゝを常とするからである。尤も民主々義といふ名稱も多義であるけれども、社會主義といふよりは全體の意志を重んずるといふ意味が明かに示されるの感がある。けれども今特に民主々義の名を避けて社會主義の名を採用する所以は、一つには民主々義といふと單に政治上のみの學説であるかの如き感が起り易いし、二つには社會主義といつた方が個人と社會との對立を直截に示すと考へられるからである。

さて本目にて社會主義といふは、互に相對立して同一地球上に生存する各個人が夫々意欲者として行動する時、相互の意欲、行爲が衝突することがある。さういふ場合に、成るべく多くの個人の意欲の實現を計るべきであるとする學説である。而して成るべく多くの個人の意欲の實現を計らんとすれば、勢ひ個人の意欲の中には全然拒斥せられるものもでき、又部分的に制限を受けるものも出來てくる。從つて、内容はともあれ、又他人の意欲はともあれ、自己の意欲を飽く迄固持せんとする個人主義とは反對となつてくるを免れぬ。

併し乍ら、此意味の社會主義も亦、文化内容の如何はともかく、各個人の意欲は、唯夫々の意欲

たるを以て同一の價値を有するものとせられるのであるからして文化形式の理想化を主とする學說であることは前述の個人主義と一である。而してかく各個人の意欲が同一價値を有するものとして認められ、しかも全體が重んぜらるゝとすれば、勢ひ意欲の衝突を解決するの途は數の上に於いて多數を制したる意欲が高い價値をもたしめらるゝことは言ふを要せぬことである。其意味にて、(固より其が唯一の此意味の社會主義ではないが、)今日の政治上の民主々義は最も體型的に之を代表するものである。

二　此意味の社會主義の代表的學說としての政治的民主々義　かゝる意味の社會主義的學說の萠芽が希臘の古代からあつたことは明白である。例へば希臘のアテーネの如きは有名な民主的都市であつて、奴隸を除いては各市民一定の公會の場所に集つて意見を述べ、萬機公論に依つて決したのである。して見れば、そこに多數の意見、從つて意欲を重んずるの風習があつたことは爭はれない。のみならず之は我々人間が一定の自覺に達する以前に於いて已に殆んど本質的にもつてゐる考であるとも言へぬことはない。蓋し我々の或者が社會の習慣であるからとか、國法であるからとかいつて守る所の樣々の事項が、一歩つき入つて考へて見ると、「社會一般が承認する所であるから」といふ理由に支へられて居ることは決して少くないのである。併し、今はさういふ無自覺的なものは別として、專ら明瞭に一の主張、一の學說として呈示せられたものをのみ見ることにしたい。而して私はさういふものを、第一に近世の政治學說としての民主々義の中に發見しうると思ふのである。

政治上の民主々義を理解するには、吾人は近世の法理學說としての自然權の學說迄遡つて見なければならぬ。自然權說 Naturrechtstheorie とは何ぞや。理想的國家狀態の如何なるものなるかを決定するに人類の自然的性情を本として說かんと欲する所のものである。此說は和蘭のフーゴー・グロティウス(一五八三—一六四六)に始り、ユニトゥス・ブルトゥス(假名)、ブカナン(一五〇六—八二)、アルトゥジウス(一五五七—一六三八)、ホッブス(一五八八—一六七九)、ジョン・ロック(一六三二—一七〇四)スピノーザ(一六三二—一六七七)、ルソー(一七一二—一七七八)等を經て次第に開展し來つた思想である。而して其自然的性情の如何なるものなるかに依り、或は當時の專制君主政治に反對し、或は之を是認した。ホッブスの如きは後者であり、ユニトゥス・ブルトゥスの如きは前者である。專制君主政治は君主の專斷に依つて政治を行ふものなるが故に、若し君主の意志が人性の赴く所に合致すれば事はないけれども、若し之に合致しない時には問題とならざるを得ない。然るに事實當時の英佛等に於ける政治は必ずしも人民の利害休戚にしつくり適合するものではなかつた。こゝに於いて程度は各學者に於て違ふけれども、次第に專制君主政治に代ふべき新なる政體

が要求せられ來つた。之が民主々義の思想である。其は英國に於いては議會政治の漸次的確立に依つて次第に具體化せられ、佛蘭西に於いては一七八九年の革命に依つて急激に具體化せられた。今は此具體化の歴史を記述するのが主眼ではない。唯此民主々義の學説の本質を理解し、之が批評を試みるのが眼目である。

民主々義は自然權説に基く。而してこゝに所謂自然は人間の自然的性情である。そして自然的性情といふもそれは勿論意欲の形式にて表現せられるものと解してのみ意義を有するであらう。其故に專制君主政治に對立する意味での民主々義は多數人民の意志を主とする政治でなくてはならぬ。從つて問題は如何にせば多數人民の意志が行はれるかといふことになくてはならぬ。而して其方法として考案せられたるものが議會の多數決に依る政治である。

かゝる民主々義の主張者として私共は先づ英國のジョン・ロックを擧げうるだらう。ジョン・ロックは已述の如く認識論上でも特筆大書すべきであるが、政治論の上でも見遁してならない學者である。彼の政治論上の著作としては、「政治論二篇」(一六八九)といふ書がある。彼に依れば、凡そ人類には自然狀態といふものがある。之は人間の自然的性情に協つた狀態であるから理想的なものである(こゝが同じ自然法論者でも ホッブスとは 正反對である。 ホッブスでは 自然狀態は理想狀態ではない。反對に同類相食む、「人は人に對して狼 homo homini lupus」の狀態である)。然るにこゝに或る亂暴なる個人があつて此自然狀態を破壞する(こゝが丁度ホッブスの自然狀態に相當する)。そこで總て亂暴の個人が自己の生命、財産、自由を保護するため、契約に依つて政府を作り、或一人の個人に全體の權限を委任した。其個人が卽君主である。けれども政府なるものは右の如き目的を以て作られたものであるから、其目的が達成せられない場合に於いては政府は解散すべきものである。君主も統治權を失ふべきである。而して之を決定すべき者は人民であるから、主權は人民にあるのである。(此點ホッブスと異る。ホッブスでは、一度權利を委任せられし以上君主の權利は絶對的のものである)。約言すれば人民には反抗權 Right of resistance があるのである。丁度支那の古代に於いて夏の桀王、殷の紂王の如き暴君出でし時、之を放伐するの權人民に在りと認められしが如くである。これ正しく此書出版の前年に彼の母國に行はれし光榮革命を辯護したるものである。蓋し此光榮革命たるや、一時クロームウェル(一五九九—一六五八)に依つて實現せられた共和政治が其死後再び王政に復せしところ、ジェームズ二世(一六三三—一七〇一)の專制政治となつたゝめ、再び民權の回復の爲に爲されたる所の革命(但し血を流さずしてすんだので光榮革命といふ)であるからである。而して此革命の結果英國の政治上の原則が確立し、總てブリティンの君主は必ず立法を議會の

協贊に依つてなし、國民に對して責任を有する政黨内閣を通じて治世するものであるといふことゝなつたのであるが、之又ロックの書に是認、辯護せらるゝ所である。彼の說く所に依れば君主專制の危險を防止するためには、特に立法權、行政權、裁判權、殊に前二者の所在を區別することが必要であるといふ。

吾人が、今、此ロックの政治論に於いて特に注意すべきは、君主存在の起源が、曾て考へられし如く神授に基くものにあらで、自然權論の基礎の上に人民の統治權委任に基くといふ點と、人民は立法機關に依つて其意志を表示すとなす點とである。前者は君民統治契約 Herrschaftsvertrag の說にして、後者は後年ルソー等に依りて社會契約 contrat social, Gesellschaftsvertrag の說とせられしものである。孰れにしても民意を重んずるに於て一であるけれども、後者に於いては箇々の人民の意志と人民全體の意志とを一層明確に區別せる點に於いて前者に一歩を進めて居る。併し此社會契約說が明瞭なる形にて獨立せしめられたるは、ロックに於いてゞはなく、佛國のルソーに於いてゞある。最もロック以前にも獨乙のアルトゥジウス（一五五七—一六三二）の「國家論」（一六〇三）の如きは立派に之を獨立させて居るのであるが、其が完成者はルソーである。

ロックからルソーに至る迄にヴォルテール（一六九四—一七七八）とモンテスキュー（一六八九—一七五五）とがある。此等の兩人はルソーと共に佛蘭西十八世紀の開明（啓蒙）思想を代表するものである。ヴォルテールとモンテスキューとは共に英國思想、從つてロックの影響を多大に受けた。中で政治論の上で奮鬪したのは後者であるが、其「法律の精神」（一七四八）はロックの政治思想を受紹ぐものである。此書は立憲君主政體の理想的形態を示したものであつて、其思想は立法、行政、司法の三大權の分立、上下二院制に依る貴族主義と民主々義との調和等を中心とするものである。であるから未だブルボン王家の專制下に在つた佛國としては相當に過激な思想であつたとは言へ、猶君主制を絕對に否認せざる點で餘程溫和な所があつたのである。

然るにルソーに至ると君主政治に對する態度一層冷淡となつたために一層急進的となつた。彼はジュネーヴの微賤なる時計工の子として生れ、若年の頃より常に流離轉沛の生涯を送り、かねて世を白眼視してゐたが、一七四九年佛國ディジョンの學士院が「學問と藝術とは道德の進歩に資したるか」といふ懸賞論文を募集するや、ルソーは、折しも幽閉中のディデロを訪問せんとする途上一新聞紙上にて偶然之を讀み、忽ち一團の思想の疾風の如く頭腦を襲ふありて、之を草し、當選して、一躍して文壇の寵兒となつた。其後「人間不平等起源論」（一七五三）、「社會契約について」（一七六二）、「新エロイーズ」（一七六一）、「エミール」（一七六二）等を出して政治、敎育、戀愛等を論じた。政治

論としては「人間不平等起原論」と「社會契約について」とをあげうる。此等の兩書は必ずしも全然同一の立場に立つものとは言へない。元來彼は當時の文化に對してはきつく呪咀の念を懷いて居て之が一七四九年の懸賞應募論文にてはディジョン學士院の課題への否定的解答として現れて居るのであるが、「人間不平等起原論」は同一の路線上を走るものである。卽彼は先づ人類太初の自然狀態を、戰もなく平和もなく言語もなく勞役もなく、性交の爲の一時的兩性結合の他には何等の社會的結合なき、各自孤立的生存をなして怡樂自適せる絕對平等の黃金世界なりとし、次に此理想的自然狀態が破れて各人不平等の社會の出現する過程を說いて居る。彼に依れば人間不平等の起原は農鑛の起原及び其と結合せる私有の觀念の起原と一である。或個人が一定の地域に墻壁を設け、「之は俺のものだ」と言ひ、他人が此宣言を愚かにも信じたのが今日の不平等なる社會の出現した最初である。これにより土地の私有といふことが起り、正不正卽權利の有無といふことが起る。又自愛が所有欲となり、貧富の差ができ、主從の關係が生れ、贅澤や怠惰といふ現象も生れた。そしてこの權利關係が國家契約に依つて確立せられるに至つて平等無差別の自然狀態は全く破壞せられ、永久に不平等の世界が保證せられるやうになつたと。之に依つて見れば、此書は、歸著する所、一切の國家に反抗して「自然に歸れ」と說く者。支那の堯舜讚美と同一徹であり、現代を末世澆季として呪咀するに終つて居るのである。然るに十年後の「社會契約について」になると、一轉して國家の光明面を示さんとする傾向が窺はれる。彼謂へらく、抑々總ての國家成立の意味は何であらうか。先づ國家成立以前の自然狀態を顧るに、そこには自由獨立にして不足不滿なき個人あるのみ。然らば國家成立の動機は、此自由、獨立、幸福を他人との結合の狀態に於いても維持しようといふことの他にあらうか。卽各個人は此意圖の下に契約に依つて國家を威立せしむるのである。之が社會契約である。從つて社會契約に依つて、各人の意志は全體意志 volonté générale に保證せられて存立するやうになる。固より此場合各個人の意志の全部が是認せられ行くことは不可能であるからして、全體意志を各個人の意志の總和と考へることはできぬ。それは各個人の意志より獨立に存するものである。然らばいかにして之を決定しうべきか。此點に至りてはルソーの考に二つの方面がある。第一は、全體意志の內容上の徵表に依つて之を決定する方面で、第二は、實際上如何なる方法をとつて全體意志を決定すべきかの方面である。ルソーに依れば全體意志は意志の總和卽全部の意志とは異るのであるから、單に全部の意志、或は大多數の意志をのみ決しうる議會政治は必ずしも理想的の政治とはならぬ。つまり議會に於いて多數を制した意志は必ずしも全體意志ではない。更に別種の內容上の徵表、卽私のいふ文化內容の種類に依つて決定し來るべきものである。けれども實際上に於いて

は多數決主義による他ないといふ考である。かく實際上多數決主義を採用する點に於いてロックと一致するが、內容上の標準を以てしなくては必然的に眞の全體意志を決することは能きぬとなす點に於いてロックよりも進んで居る。尤もロックと雖も必ずしも此方面を全然看却してゐるのではないが、斯く明瞭に示されなかつたのである。此內容上の標準を重んずる點は、彼の影響を多大に受けたカントの政治論、法律論では一層濃厚になつて居る。—彼は此立場よりいづる當然の結論としてロック以上に民主政治に左擔した。尤も、行政の首班として君主を認めることを絕對に否認はしなかつた。貧弱なる小國では民主々義がよいが、富强なる大國に於いては君主制がよいと考へた。けれども君主制は動もすれば專制的となる危險があるから全體意志卽主權者は絕えず之を監視する要があるとなすのであるから、基調に於いて純然たる民主々義である。

此政治上の民主々義卽多數決主義は、次第に、最も勝れたる政治の形式として多くの學者に承認せられ、又實際政治の上に具體化せらるゝに至つた。學者の承認といふ方面より言へばカントの「法律學の形而上學的原理」(一七九七)の如きはその一つである。彼はモンテスキュー、ルソー等の影響を受けて居るといひうる。彼に依れば、國家は、モンテスキューの言へる如く、立法、行政、司法の三權力より成立するが、其中の「立法權力は國民の結合意志にのみ歸し得られる。」そして國民が其結合意志に依つて立法を行ふに方つては原則としては投票に依る代議制度に依るべきである。君主は不必要といふ譯には行かない。寧ろ其は必要であるが、其は最早主權の所有者としてゞはなく、行政權力の首班としてゞあると。又實際政治の上に現れ來つたことから言へば、英國の憲政發達、米國の獨立、佛國の大革命の各歷史が雄辯に之を物語るであらう。

今日では民主々義の傾向は殆ど其至るべき所迄到著せんとしつゝある。議會政治が殆んど總ての國に行はれて居るのみならず、議員選擧に投票權を有することに依つて間接に政治に其意志を表明しうる者の範圍は漸次擴大せられつゝある。普通選擧の運動及實施、女子參政權の運動及其一部的成効がそれである。蓋し近世の民主々義の最初に於いては、直接間接に參政權をもてるものゝ範圍は限定せられてゐて、健全にして成熟せる政治的觀念を有するものにても其範圍外に置かゝるものあり、故に人民の多數意志に依る政治といふも、其は限定せられたる一部人民の多數意志に依る政治であり、從つて所謂特權階級に利益ある政治であつたからである。例へば今日の經濟的社會主義者中の議會主義者が參政權の獲得に依り、議會に多數を制して自己の理想を實現せんとするが如きは、民主々義を徹底せんと企つる者と謂つべきである。

三　政治上以外に於ける民主々義的傾向

政治上に於ける民主々義は本目に於ける意味の社會主

義の模範的好例である。そして民主々義と言へば、かゝる政治上のものを主として指す。けれども斯く多數者の意志を重んずるといふ思想は政治上に於ける以外に於いても今日大なる風潮となつて存して居る。蓋し個人間の意志の交渉は、國家の成員としての個人間の意志の交渉に限られぬ。或宗教團體が布教上の方針を決定するが如き場合に於いては、同じく多數決主義に依つて票決することあれども、其は國家の成員としての個人間の意志を纏めたのではなくて、該宗教團體の成員としての箇人間の意志を纏めたのである。斯る場合は教育團體に於いても事業團體に於いても勞働團體に於いても職業組合に於いても存する事柄であつて敢て說明を要せぬことである。

斯くて民主々義は樣々の團體に於いて存しうることであるが、或團體の全體意志が特に最高位置を保つといふことがありうるであらうか。我々は時に二つ三つ乃至數箇の團體に屬する。さういふ場合、各團體の目的とする所が互に他の領域を犯さないやうになつて居れば宜しいが、事實は常にさうなつて居ない。例へば歐洲大戰に際し各國の社會主義者の去就は大に注目せられたものであるが、其は、彼等が、一面において夫々或國家の成員であると共に、他方に於いて社會主義者より成る國際的團結の成員でゞもあつたからである。卽彼等は二箇の團體に屬して居るのであるが、一方の團體の目的より言へば、戰爭に依つて其達成が促進せられる觀があるが、他方の團體の目的より言へば、戰爭に依つて其達成が阻害せられる感があるのである。斯る場合に於いて何れかの團體に最高位置が與へられなければ解決がつかぬやうに考へられまいか。かういふ疑問があるのであるが、之は、已に文化內容上の議論となつて了つて居ると思ふ。純粹に文化形式の上から言へば何れの團體も同一種類であるといふ他ない。何れも多數の意欲に依つて團體意志が決定してゆくだけのことである。其點のみから言へば上述の世界大戰の場合に於いて、社會主義者が祖國に忠なるか、社會主義團體の綱領に忠實なるかといふことは全く賽の目を振るやうなものである。

四　此意味に於ける社會主義の批評　多數の意志を重んずるといふことは確かに道德的正義に協つた社會を形成するに稗益する所が多い。蓋し民主々義の例に見ても、民主々義の社會に於いては少くとも參政權を有する範圍內の人々だけについて見れば、專制治下に於けるよりも、自由と幸福とを平等に享受して居る。けれども、民主々義な社會はそれのみで最早一定の文化價値を有するものであるか否かといふことについては多大の疑問がある。私の考では民主々義そのものは決して絕對的價値を有たぬものであると思ふ。今其理由を說明しよう。

多數者の意志を重んずるといふことは、多數者の意志は常に正義を代表するといふ前提の上に立つて居る。けれども此前提は例外なしに是認せられることではないのである。多數者が理想的の人

間であればさういへるであらうけれども、事實に於いて、多數者が時代の尖端を走るといふやうなことは殆んど絶無といつてよい。常に二三の個人が先驅者となつて來るべき新時代の黎明の帷幕を開く役目を勤めて行く。さういふ先驅者から見れば、多數者の意志は決して最高の價値を表現するものではない。評價の標準にも歸向の目じるしにもならぬ。唯或時代の人心の事實上の水準卽平均高度を示すものに過ぎないのである。從つて斯る一歩高い著眼點からすれば民主々義は衆愚の意見を重んずるといふ危險を伴ふものである。前目で說明した個人主義の生ずる原因の一は確かにそこに在る。卽ち其は天才主義の反抗となつて現れる。

五　文化形式の理想化の著眼點に立つ文化哲學的諸學說の批評　以上の個人主義と社會主義（民主々義）との二學說は各意欲者が自己自身の意欲を重んずるか、意欲者全體中の多數者の意欲を重んずるかに依つて決定する所のものである。そして私共が此等の何れにも滿足しえないことは上述の如くである。けれども其等がかく私共を滿足せしめえない理由の根本は、實に、それが單に意欲を形式的に考察して、其見地から價値の上下を試みるといふ點に存するのである。凡そ此見地から價値の上下を試みることが不可能であることの理由が二つある。第一に甲乙丙丁夫々の個人の意欲を單位として考察して行くに方つて其內容の如何といふことからは全く抽象せられて居る。例へば新なる道德の原理を樹立せんとする高尙な意欲も、巨萬の富を積重ねたいといふ貪婪な意欲も、綺羅綾羅を著飾つて歩き、酒池肉林の間に口腹の欲を滿したいといふ淺墓な意欲も、一汁一椀、弊衣破屋に住つても德を磨き行を潔からしめんとする慊抑な意欲も皆同樣に取扱はれる。金錢萬能論者の意欲も人道主義者の意欲も、弱肉强食の不可避を信ずる進化論者の意欲も、相互扶助の原理に從ふ博愛主義者の意欲も皆同樣に取扱つて行く。けれども斯樣に意欲の內容、性質を他にして其價値を單に數量的に同一意欲を抱く意欲者の數できめたり、意欲者夫々の立場に依つて異るものと見たりすることは意欲の價値を或は偶然に委し、或は相對化する結果とならう。數量的に多數の人の贊成をうるといふことゝそのことが價値ありといふことゝの間には何等必然的の關係がない。又意欲者の立場に依つて價値ある意欲が異るといふことは、立場といふことが客觀的に規定せられてゐれば格別であるが、然らざる限り、全く評價の標準を欠くといふことゝ一とならう。其故に、事實、我々は、或は個人主義、或は民主々義等といつても、純粹に右樣の意味で之を考へて居ることは稀である。必ず何等か內容上の標準を附加して考へて居るものである。例へば個人主義者でも、自己の意欲の內容として、人類愛とか、最大多數の最大幸福とか、自己の生命財產の保持とか、學術研究とか、藝術の製作とか、何かしら同時に考へてゐるし、又民主々義者でも、同樣に、國民の利福とか、總て

の個人の生命財産の保持とか、國力の伸展とか考へて居る。前述のシュタウディンゲルは目的態の論を爲せし後、目的態結合の法則として四箇の原則を擧げて居るが、其中の二つは明に內容上のものである。四つの原則とは、一、選擇の原則 Grundgesetz der Auswahl、二、目的態維持の原則 G. auf die Erhaltung der Zwecke、三、目的態增加の原則 G. d. Vermehrung d. Zwecke、四、制限の原則 G. d. Einschränkung 之である。選擇の法則といふのは、吾人の周圍の事情、個人の素質等に依り難きを避け易きを選ましむる原則である。目的態維持の原則とは、已に統一せられれる目的態の間に再び矛盾を生ぜざらしめんとする原則である。又目的態增加の原則とは、新なる目的態生じたる時之をとり入れて從來の統合的目的態を一層尨大のものたらしめんとする原則、最後の制限の原則は吾人の肉體及精神の力に限度あり、使用しうべき手段にも限度あれば、目的手段の認識確實なる限度內で目的態を立して行く原則、卽目的態の構成を可實現性の範圍に限局しゆく原則である。此中第二と第三とは本項所說の文化形式の論に關係あり、社會主義の立場を取つたものと解せられるけれども、第一と第四とは文化內容の論に於けるものとすべきである。蓋し吾人の周圍の事情、個人的素質、心身の力の限度等は、皆、經驗的に各個人に依つて懷抱發表せらるゝ意志、卽目的態とは獨立に考察せられるものであるから、之に協ふ所のものを以て價値ある目的態となすものと見做しうるからである。卽我々は此處に文化內容の理想化といふ點を次に考察しなくてはならぬ順序となる。

文化形式の上から文化の價値の上下を爲すことの不可能なる第二の理由は、意欲主體たる甲乙丙丁は他の一人又は多くの人の意欲を我意欲となすことに依つて、元來個人主義者でないけれども、個人主義者であるが如き觀を呈することがある。反對に自己の意欲にのみ從つて居るのであるけれども、他人の意欲と偶然に調和して民主々義者の如き觀を呈することもある。而してかゝる意欲主體の何たるかは明瞭に意識に上らぬことが多いからして、事實上之を以て文化價値の上下を爲すは不可能であることである、此點からも次に文化內容の如何に依り文化價値を論ずる順序とならねばならぬ。

第三項　文化內容の理想化の著眼點に立つ

文化哲學的諸學說

第一目　物本主義

一　物本主義及の意義及種類　此處に物本主義といふは前述の如くMaterialismusの譯語であるから、普通は、形而上學上のではないが、唯物論と譯せられてゐる所のものである。ランゲの「唯物論史」は唯物論を理論的と實踐的とに分ち、後者に又倫理學的唯物論の名をも與へて居るが、先づその後者に當るものと考へてよい。併し全然同一といふことは能きない。彼に依れば、實踐的唯物論に二義ありと見て居る。第一の意義では、「物質的營利又は享樂をえんとする現今流行の風潮」をさし、第二の意義では、「人間の道德的行爲を其心意の箇々の衝動より生起せしめ、行爲の目的を無條件的命令者たる理念に依つて規定せずして、我々の願望する狀態に達せんとする努力に依つて規定する一の道德論」をさす。そして倫理學的唯物論の正しい概念は後のものである。蓋し、前の概念に依れば、實踐的唯物論と理論的唯物論との間には一致が見られない。何者、理論的唯物論の偉大な諸體系は、狂熱的空想的な、そして最後には幻滅に陷る所の觀念論よりも一層、其の冷靜嚴肅な態度に依つて私共の精神をして卑近下劣なものより遠らしむるに適して居るのに、物質的營利及享樂を目的とする者に在つては、かゝる高尙なる氣魄を鼓吹する何物をも有して居ないからである。然るに後の概念に依れば、實踐的唯物論と理論的唯物論との間には一定の類似點がある。何者、かゝる實踐的唯物論が「唯物論的と名けらるゝは、正しく、理論的唯物論に於けるが如く、材料より出發して形式に赴くが故である。」唯違ふ所は、此場合材料といふは、外界の物體や感覺內容に非ずして、衝動及快不快の感情であるのみであると。併し乍ら前の意味に於ける實踐的唯物論と理論的唯物論との不一致といふも結果の一面に於いて一致せざるのみ。又、後の意味に於けるそれと理論的唯物論との類同といふも、唯材料を重んずるといふ一面に於いて類似するのみ。他の方面より眺むれば反つて前の意味に於ける實踐的唯物論と理論的唯物論と一致せる所があり、後の意味に於けるそれと理論的唯物論と一致せざる所がある。例へば、或人の處世の格率、或家の家憲が、其人或は其家の富の增殖を無條件的に第一目的となすやうなものであつたと假定する。之は前の意味の實踐的唯物論に相應する所のものであるが、其は物質中心にものを考へる點に於いて理論的唯物論と一致して居る。又例へば或藝術至上主義者、宗敎的狂熱家等が、自己の衝動に從つて萬事を抛擲して一藝術品の製作や自己の信仰の宣傳普及に從事したと假定する。之は後の意味の實踐的唯物論に相當するのであるが、理論的唯物論とは大に相違する點を有つて居る。理論的唯物論者は物質を中心として物を考へるけれども、藝術至上主義者や宗敎的狂熱家等は物質を中心に物を考へはしない。不動の畫を畫かんがため、自己の屋宅が火災に罹つても、以て明王の背火を畫くべき材料を得たりとして欣喜雀躍せし畫師の話もあり、又、壓地回復の念願より、やがて自らの地位の保障せられたる封建制度の崩

壞すべき運命にも盲目に出征した歐洲中世の武士の十字軍の例もある。其故に、必ずしもランゲのやうに實踐的唯物論の眞の意味を第二のそれに解すべき理由はないのである。

私は、寧ろ、第一の意味に之を解した方が誤解が少いやうに思ふ。依つて此書に於いては、凡そ吾人人間以外の自然の理想化に最高價値をおく學說を此語を以て總稱したいと思ふ。

吾人々間以外の自然と言へば其範圍は實に廣大である。上は天涯無窮の空間に運行せる星辰より下は地球上の海陸山川、鳥獸虫魚に至る迄廣汎なる範圍を占めて居る。之に比すれば自然中の殘りの部分たる吾人々間の如きは實に眇たる蒼海の一粟、九牛の一毛にも如かない。而して此廣汎なる外界自然の全部或は一部の理想化に最高目的を置くものは總て此名を以て呼ばるべきが故に、其が全部に亘るか一部に限られるとするか、一部に限られるとするも如何なる一部に限られるか、又其全部或は一部を如何に理想化するかに依つて樣々の學說が生ずる譯である。但し經驗的に言へば吾人人類が、今日其意力の下にもち來しえて居る自然の範圍は未だ吾人の棲息する地球上のみに限られて居る。自然科學の進步に伴隨する工學の進步は地球上に於いてこそ長足の進步を以て自然の征服を爲し遂げたが、併もそれすら未だ、高所から眺むれば大したものではない。近い話が大正十二年九月一日午前十一時五十八分の關東大地震は何を物語るか。三百年の努力もて作り上げられた大都市も自然の一變動と共に一瞬にして萬目荒凉たる焦土と化し去つたではないか。其他自然の暴威が人力の微小を冷笑するの例一々あぐる迄もない。暴風、暴雨、落雷、噴火、旱魃、霖雨、海嘯みな然りである。況んや渾圓球上若干哩の外に至れば、認識力の他には全く人力の及びえざる自然力の專制治下に在る。

さてかゝる經驗的の意味にて人間以外の外界自然の理想化に最高價値を置くものゝ隨一は經濟的財の集積に最高價値をおくものであらう。今日では之は殊に金錢萬能論 Mammonismus の名の下に呼ばるゝ所の考へ方に代表せられる。次には、ぐつと種類は違ふが、藝術至上主義の中にもさういふ傾向を認めうる。猶その他の方面でも同樣の傾向を、多少の程度で認めうる場合もあらうが、今は此等二つの考へ方についてのみ述べることゝする。

二　物本主義の代表者としての經濟至上主義、殊に金錢萬能論　此論に經濟至上主義といふは、必ずしも經濟といふことの眞義を正當に概念し、之に最高價値をおくところの考へ方を言ふのではない。蓋し謂ふ所の經濟至上主義なるものは、專ら經濟的財の集積を第一目的となすものを指すのであるが、斯く經濟的財の集積を第一目的となすといふことが果して經濟といふことの眞義であるかといふにさうではない。更に本章結論に於いて論及する機會があると思ふけれども、經濟の眞義

は單なる經濟的財を以て人類の個體及種族の生命維持の手段と見る所に在るのである。生命維持が、假令第一目的ではなくとも、少くとも一層重要なる目的である。其故に、物財至上主義とでも言つた方がよいのであるが、餘り勝手な造語をなすやうに見えるであらうから、假に標題のやうな言葉を以て呼ぶのである。

元來斯樣な考へ方は、多少知的反省の進んだ人間には取るに足らぬものであると直ちに氣が付くべき筈のものであり、又實際さうである。而して一般に學說といふものは、知的反省の常人以上に進んだ人間、主として學者が自己獨特の考として發表する者を指すものであるから、此經濟至上主義といふ考へ方は、學說として堂々論議されるといふことは甚だ稀である。之は寧ろ一種の考へ方、視點、立場といつたやうな比較的輕い言葉で示すべき筈のものである。私が「文化內容の理想化の著眼點に立つ文化哲學的諸學說」の一として擧げたのも、要するに叙述の體系化を重んじたからに他ならぬ。して見れば、此考へ方が、哲學史上、特にそれと目星しき多くの代表者を擧げえぬことは今更斷る必要はない位である。

けれどもかゝる考へ方が一般に廣く人心を支配して居るといふことも亦爭ふことが能きぬ事實である。深く人生の眞義について考へることをしない一般民衆に於いては勿論のこと、單に思想の上だけでは之の維持すべからざることを充分に理解して居る人達の間に於いても、其生活に卽して之を見れば、相當に此考へ方に支配せられて居る者を多々發見する。今其理由を探つて見るに、吾人人類の根本的衝動としては第一に生きんとする意欲であるが、生きんが爲には生くるに必要なる物資を得なくてはならぬ。野蠻未開の時代に於いては必要に應じては之を自然よりうることに依つて此欲望を滿した。飢え來つてまだ飯もなく、渴し來つて未だ茶もない。唯山野に求めて草根木皮果實をえ、河川沼澤を漁つて魚介をえ、雨露霜雪を樹下洞穴に防ぎ以て生命を維持した。其生活は全く他の獸類と同一であつた。けれども、反省もなく考慮もなく、豫定もない、自然は特に人間の爲に作られたものではない。常に、又至る處、人間の生存に必要な條件が具つて居る譯ではない。候に春夏秋冬あり(尤も熱帶地方のやうに四時常に果實の熟する地方もあるが)、又地に毛不毛あり、時に依り生存に必要な物が欲するがまゝに獲られないことがある。之は生きんとする意志にとつては絕大の苦痛である。そこで此苦痛が動機となつて、人間の知力が發達し、人は、單に現在の衝動的意欲に從つて自然的の生を營む他に、如何にして將來の生命欲をも滿すべきか、平たく言へば將來の飢渴をも醫し、寒暑に堪えゆくべきかと將來の顧慮をなすに及んだ。そして其爲に案出された方法は農業、牧畜等必要なる動植物の栽培飼養、狩獵具の發明等多々あるが、其中で最も重要なる

觀念の一つは現在の必要以上のものでも獲得して將來に備へるといふ貯蓄の觀念であつたと思はれる。然るに現在々々の必要といふことであれば吾人の意欲は或限度をもつものであり、一定量の品物をうることに依つて飽滿するものであるから、唯此限度內で求められて行くことになるが、將來の必要といふことになれば、斯る限度は存しないのである。そこで明日の計が立てば明後日の計・明後日の計が立てば其翌日の計といふ風に漸次進んで止る所を知らなくなる。而して斯く益々遠き、限度のない將來の必要への備へを爲すやうになるといふことは、經濟的財の獲得貯蓄が漸次に其目的を忘却して、己れ自ら獨立の目的となり來ることを意味するものである。之生きんとする意欲を根本的衝動とする人間に在つて此考へ方が廣く人心を支配する所以である。故に、特に顯著な學說として特有の名稱をもつ考へ方といふ程のものではないが、それでも一考して置く必要はあるのである。

此處に經濟的財と稱するものゝ範圍は非常に廣い。單に直接に生命の維持に必要なるものにて人力の加へられたるもの例へば採取せられたる果實、捕獲せられたる魚介禽獸、作られたる住居、衣服等の他、間接に之に役立つものをも皆包攝するのである。今日にて言へば、生產、運輸等に要する諸種の道具、機械や樣々の利權等をみな包攝する。例へば未開拓の絕海の孤島の燐鑛の發掘權をもつとする。此發掘權が該權利者の衣食住に直接影響する所はない。彼がたとへ或時日常生活の上で燐を必要とすることがあつても、わざ〳〵そこ迄出向いて之をえようとはしないであらう。然るにもかゝはらず、此利權を獲得したる以上之を放棄しようとしないのは、之が長い間に、樣々の迂路を經て彼自身或は子孫の生存を助けるからに他ならぬ。發掘の費用、船賃、金利、生活費等を差引いて猶純益があれば、彼は燐鑛の發掘を開始し、發掘せられし鑛石を需要ある地方に送つて、買却し、貨幣と代へるであらう。かくて增殖する彼の貨幣は次第に彼の生存を安固ならしめるであらう。蓋し、非常なる例外の場合を除いては、貨幣は必要に應じていかなる生活必需品とも交換しうるものであるからである。

其意味からいつて吾人の一切の活動を經濟的財の集積を中心として進めて行く者の中にも、如何なる財を集積せんかといふことについて樣々の種類が分岐して來る。がさ樣なことは枝葉に亘るから此處には避け、此經濟至上主義の好典型であり、且つ現代人の胸中深く巢くうて人心を蠹毒することと最も甚しき金錢萬能論について一言したい。

金錢萬能論とは金錢卽貨幣を以て、如何なるものをも購ひうべき至高の價値を有するものとし、從つて貨幣の集積を以て吾人の第一目的となし、富者を崇め、貧者を卑む一の思想を指すものであ

るが、抑々金錢とは何ぞや。貨幣とは何ぞや。凡そ經濟史を按ずるに、其最も原始的なる形態は自給自足の個人經濟であつて、次は相互融通の社會經濟である。社會經濟の時代に於いては、物資の交換に依つて相寄り相助け、以て相互の經濟的需要を充して行く。社會經濟の中で原始的なるは物々交換の時代で、次に物資の價値を代表する中介的の或者を設け、之を介して交換をなす貨幣經濟の時代である。蓋し貨幣とは、物資の價値を代表するかゝる中介的の或者に他ならぬからである。

貨幣の特徴は其が如何なる物とも交換しうる所に在る。從つて其は甚だ便利である。其故に、貨幣經濟の今日に於いては、貨幣を集積すること、或はしうること多き者程生存は安固であるとせられるのである。

三　經濟至上主義の批評　此思想は個人に於いて存することもあるし、國家に於いて存することもある。個人に於いて眼中阿堵物の他何物もない人間を見出すことは決して珍しいことではないが、國家に於いても、其は誤れる富國主義となつて現れ、樣々の缺陷を暴露する。

第一に經濟主體が個人として或は國家として複數の形で對立し、各自己の經濟的財の集積、簡單に言へば富の集積に最高價値を置いたとする。さういふ場合に於いて果して人類の文化は其最も高貴なる形に於いて現れ來るかといふに決してさう行かない。失づ個人對立の場合について見るに、自由主義的卽個人主義的な經濟學、例へばアダム・スミス（一七二三―一七九〇）の「國富の性質及原因の研究」（一七七六）に於いては、各人の勞働、儉約、交換を自由の原理に從つて自由競爭に放任してゐた方が理想的な經濟上の平行狀態をうるといふのであるが、近世の經濟史は單に之を證明しないのみならず、反つて其反對を證明し、カル・・マルクス（一八一八―一八八三）の「資本論」（一八六七―九四）の如き社會主義的な經濟學を生むに至つて居る。固よりアダム・スミスを以て經濟至上主義者となすことは早計である。彼は「國富の性質及原因の研究」では營利衝動を以て搖籃より墓穴に至る迄吾人を支配する根本的衝動として居るが、倫理學上の書たる「道德感情說」（一七五九）では同情の感情を以て一切の善行爲の標準として居る。けれども、假にしか假定して、彼の自由主義を徹底すれば、どうしても自己の富の集積の爲に他人の人格はおろか、生存をすら危うする結果を來すべきは明白である。而して個人の場合について言つたことが國家の場合についても言ひうるであらう。各國家互に自國の富力の增進に專念する結果はどうなるか。其爲には他國の自由、獨立を侵害するやうなことの生ずるは言ふ迄もあるまい。近世世界史に於ける歐洲諸國の殖民史、侵略史、殊にアフリカ大陸、アジア大陸侵略史は雄辯に之を語るものである。例へば英國が印度を侵略した後印度の富源が印度の生民の爲になつたことがどれだけであるか。英國は印度の政府收入の十

分の九を本國に送り、殘りの十分の一で印度の行政、教育等の費用を支辨して居ると稱せられる。しかも印度の大工業發展は本國の工業を萎縮せしめる恐れあるため、印度人の眼をして近世科學に眼覺めざらしめんとして理工學教育には全く力を入れない。かくて印度人は其膏血を英人に搾取せられて塗炭の苦しみに泣くのである。これ正しく個人の場合に於けるが如く、自由主義の經濟至上主義のあらはれに非ずして何であらうか。

第二に經濟主體が個人、國家或は社會として單數の形で存立して居る場合、よし複數の形で存立して居ても、他との對立關係を第二とし、夫々の內部の狀態について之を見た場合を假定して見る。此場合の中、個人の場合は別として、國家又は社會全體の場合に於いては、此等の團體を構成する各成員が經濟的財の獲得及享樂に於いて自由競爭の立場におかれる場合と一定の法則の下に支配せられて居る場合とあるであらう。けれども前の場合は今述べたから更に後の場合を考へて見るに、之又經濟至上主義のとるべからざることを語る。前の場合では主として財の獲得、使用等についての各人の權利關係について種々の困難を惹起するのであるが、後の場合では、此權利關係については問題はないと假定せられて居る。團體內の各成員は各そのうべき所をえ、あるべき地位に在り、皆互に諧和戮力して、吹く風も枝を鳴らさぬ理想的な對人關係が結ばれて居る——例へば、プラトーンの理想的共和國、トマソ・カムパネラ（一五六八—一六三九）の「太陽國家」、タマス・モーア（一四八〇—一五三五）の「無何有鄉」、チャールス・フーリェ（一七七二—一八三二）の「ファランジュ Phalange」、フィヒテの「封鎖商業國」のやうな美しい夢が現實になつてゐるとされてゐる。しかもさういふ場合でも、斯る完全なる協力の下になさるゝ國家、社會の生產活動が、該國家、社會の全活動に於いて如何なる地位を占むべきかに就いては種々の立場が可能であらう。右に擧げた多くの哲人は何れも經濟至上主義者ではない。プラトーンの理想的共和國に在つては智慧、勇氣、自制、正義の四德の完成が最後の目的とせられ、カムパネラの太陽國家では信仰が第一位に置かれ、モーアの無何有鄉では勞働時間は六時間に制限せられ、他は聽講、散策、會食、交遊、睡眠等の時間に割當てられて居るから財欲の他の欲望をも重んじて居り、フーリェのファランジュに於いては人性の完全なる發展が主となり、フィヒテの封鎖商業國でも「人は勞働の義務を有つ、けれども駄馬の如くには非ずして、苦勞なく、愉快に勞働すべきである。而して彼の精神と眼とを天に向くるの時間の餘裕をもたねばならぬ」とされて居る所、財欲以上のものが承認せられて居るを見る。けれども時には斯る平和なる社會の目的が經濟的財の集積を第一絕對のものとなす場合も考へられる。今社會主義的理想社會の例を擧げたから、その方面で言つても、斯る理想社會の方が現在の社會組織よ

も浪費少く多量の生産をなしうるからといふ理由のみから社會主義的社會の實現に努力する者を往々見るのである。卽社會主義的社會では、自由競爭に要する無用の冗費を節し、勞資の對立から起る罷業、怠業の如き時間の浪費を省くことが能きるといふのである。併し乍らかゝる物本主義的人生觀が決して維持すべからざるは經濟的財が何故に價値をもつかを客觀的に考察すれば直に判ることなのである。曾て一七一四年、アナマロイテ Anamaleuke と稱する基督敎徒の一派獨乙のヘッセンに起り、一八四二年共產的社會を實現する決意をなして、總勢凡二千人米大陸に渡航し、アイオワ州に土著し、七箇の村落を作つて所期の理想を實現し、現今に及んで居るが、基督敎の一派である故、信仰をこそ重んずれ、其他に於いては生產的活動の他何物もない。生產的活動に專念するといふことは必ずしも物本主義とは言ひえないけれども、少くとも其に近いとは言ひえられる。蓋し生產的活動を重んずるが、物本主義に由來せずとせば生物學的生命の維持を中心とするものと言ひえられるが、それには諸種の科學の攻究も忘るべからざるものであるが、此團體では斯る方面の顧慮は全然拂はれて居ない。卽此等の部落の住民は富裕ではあるが科學や藝術の如きはないからである。餘り適當な例ではないが、對人關係に於いて理想的な、しかも經濟至上主義の社會のとるべからざるを示しえよう。

之に依つて見れば經濟至上主義は到底支持せられぬものである。猶之を十分窮めんとならば經濟的財、從つて又貨幣等の正確なる概念を知るに如くはない。其にはシュタムラーの「經濟と法律」（一八九六）、ゲオルク・ジムメル（一八五八―）の「貨幣の哲學」（一九〇〇）、左右田博士の「經濟哲學の諸問題」の第二篇「貨幣價値論研究」等を讀まれたい。

三　藝術至上主義に現れたる物本主義的要素　藝術至上主義の中に物本主義的要素を認めるといふことは一見奇異に感ぜられると思ふ。恐らく斯く論ずる人があるであらう。藝術品を單に物的のものとして取扱ふは誤つて居る。藝術の材料は物的のものであらうが、其に依つて表現せられるものは吾人の思想、感情である。思想、感情が盛らるゝに非ずんば、其は單なる自然であつて藝術ではないと。又曰ふであらう、しかも藝術の材料は決して物的のものに限られぬ。彫刻、繪畫、建築等は物的のものを材料とするであらうけれども、演劇、聲樂の如きはさうではないと。併し乍ら、假令藝術に表現せらるべきものが吾人の思想、感情であつても、單なる思想、感情そのものを藝術となすことはない。それが大理石や畫布や木材を用ひて客觀的表現をえて始めて藝術と稱せられるのである。其故に藝術といへば、必ず、或材料の上に表現せられたる思想、感情であるとせねばならぬ。次に此材料が必ずしも物的のものでないことも論者のいふ通りである。けれども反對にそれ

が全部でないことも亦確かである。のみならず此場合に於いて材料が人であるといふことは必ずしも不可缺の要件ではないとも見られる。例へば我國の歌舞伎芝居はあやつり人形の進化したものであつて、昔人形が演じた所のものを今日は俳優が演じて居る。勿論俳優が演ずれば人形が演ずるよりも眞に迫つた表現が見られる。けれども假にあやつりの技術が進んで人形をして生きた人間以上に、少くとも同樣に演ぜしめることが能きれば藝術としては同一價値を有するであらう。

其故に藝術を以て、物的なるものゝ理想化の一種と稱して差支へないであらう。所が人、殊に藝術家の中には、かゝる藝術の製作を以て人生無上の目的であるかの如く考ふるものがある。彼等は藝術の製作のためには如何なる犧牲を拂ふも意に介せずして可なりとし、背倫、淫蕩の生活にも良心の苛責を感ずることがない。固よりかゝる人達の中からも愛惜すべき藝術品の生れることがあらう。オスカー・ワイルドの生活は人として指彈すべきものを有つて居るけれども、「サロメ」や「理想的の夫」を藝術品でないとは言へない。モーパッサンの生活は放縱であつたけれども、彼の諸短篇や「ベラミー」が藝術品たるを拒むことは能きぬ。要するに藝術と人とは別である。けれども藝術家たることが人としての義務を解除しては呉れない。藝術至上主義者はしか考へるけれども、之は誤である。藝術の製作は人生の一面であつて全面ではない。

四　此意味における藝術至上主義の批判として見たるトルストイの藝術論　從つて、此意味に於いて藝術至上主義に反對するものゝ多いは當然である。藝術家の中でも所謂人道主義の藝術家は之に反對する。尤も人道主義の藝術家の藝術至上主義に反對するのは此理由にのみ依るのではない。其他に、藝術に表現せられる思想、感情の內容に於いて人道主義的の要素が基調となつて居なくてはならぬ、人生のための藝術でなくてはならぬといふ理由を以ても反對するのであるが、いかに藝術のあらはす思想、感情が人道主義的であつても、之に沒頭して實人生に生くる者としての我を忘却するならば、之にも反對するのである。斯る人道主義の藝術家の好標本とすべきはレオ・トルストイ（一八二八―一九一〇）であらう。彼の「藝術とは何ぞや」（一八九七）は明かに此二つの理由に基いて現代の藝術を非難して居る。第一の理由に依る非難、卽藝術の理想の論に基く非難に就いては今は言はない。蓋し藝術の理想を以て呉して人道主義的內容を盛るにありや否やと言ふことについては美學者、藝術家等の間に幾多の異說あるべしと考へられるからである。唯第二の理由に就いて彼の述ぶる一節を借用すれば。

曰く、凡そ藝術は言語と共に人類進步の二大機關をなすものであるが、之が運用を誤れば有害なる結果を生ずることが少くない。其第一は藝術的創造に要する人工の巨大なる失費、卽ち之に報ゆ

べき利益なき勞働及時間の徒消之である。自稱藝術的書籍を日毎十二乃至十四時間に涉りて印刷する目的のために、或は又之を演劇、合奏、展覽會等の方法により普及せしむる目的の爲に、幾百萬の人があらゆる疲憊倦怠、あらゆる不自由缺乏を忍ばざるべからざることを思へば我々は戰慄せざるをえない。されど之にも增して恐るべきは、美しき生氣に滿ち、善の種子を賦與せられたる小兒等が、毎日六時間乃至十時間を、或者を音樂を奏するため、或者は爪先にて舞踏するため、或者は先輩藝術家の裸體畫の粉本を模寫するため、又或者は修辭學の規矩に準じて意味の空漠なる文章をものせんため其貴き勢力を消耗するの一事である。此等の薄命兒は、斯る殺人的練習に其肉體的及知識的勢力の全部を年一年と滅してゆく。彼等は之に依りて人生を解すべき力を失ひ、人間の品位についての感情を失ふ。自己の心身、全生涯は藝術への愛欲の爲に全く犧牲に供せられる云々と。

藝術至上主義に含まるゝ物本主義的要素への批評として肯綮にあたつてゐると謂ふべきである。

第二目　人本主義

一　人本主義の意義及種類　此處に人本主義の名を以て呼ぶは、前目所說の物本主義が吾人々間以外の自然の理想化に最高價値を置くに對して、吾人々間自身の理想化に最高價値を置く所の學說を總稱するのである。歐語の Humanismus に相當するものである。けれども人本主義といつても幾多の種類を包含することを豫め承知して居なくてはならぬ。が、それには、其前に一般に哲學史上に存する Humanismus の諸義を知つてゐる必要がある。已に其一種は、認識論の章下に於いて見たる如く、シラーの人本主義として實用主義を意味して居た。が認識論上の實用主義の意味での人本主義はシラー一箇の用法で、普通の用法では之と全く違つた意味に用ゆる。

最もよく知られて居る用法は文藝復興期の新思想をさすに用ひられる用法である。ヴィンデルバンドの「哲學史教科書」では文藝復興期を二期に分け、前期を人本主義的(人文主義的)時期と名けて居る位である。何故に此期の新思想を人本主義と名くるかといふに、當時中世の歐洲思想を支配したスコラ哲學が大に衰へて來た時に方り、偶々東ローマ帝國の滅亡に依り、東方の學者が伊太利に流竄して來、爲に希臘古典の研究に依り、希臘思想の解釋を新にせなくてはならぬ必要に迫られた。從來の解釋ではアリストテレースでもプラトーンでも基督教の教義を說明するに都合のよいやうに解釋されて居た。然るに基督教の教義は總て人よりも神が中心、現世よりも天國を重んずる思想であるから、アリストテレースもプラトーンも其に合ふやうに神本位、超自然界本位に解釋せられたのである。所が希臘古典を原典に依つて研究すると、眞の希臘思想は決して神本位でもなけれ

び超自然界本位でもない。全く人間本位、現世本位である。自然を愛し、世間を樂しみ、現世に於いて幸福なる生活を營まんことを基調となすものである。羅典語の「人間らしき humanus」に相當する思想である。そこで之より humanus といふ語大に用ひらるゝに至り、終に後世之より轉化せる humanismus, humanism 等の語をも生じたのである。卽此語は元來神本位の思想と區別せられたる人間本位の思想をさすに用ひられたものである。當時伊太利の人本主義者の代表者としては、ダンテ、ペトラルカ、ボッカチオ等の詩人を始め、一四四〇年フロレンツの富豪コシモ・フォン・メディチに依つて創立せられたアカデミーに屬したプレトン（一三五五―一四五〇）、ベッサリオン（一四〇三―七二）、マルシリオ・フィチノ（一四三三―九九）、等のプラトーン派の人々、ゲオルギオス・フォン・トラペズント（一三九六―一四八四）テオドロス・ガザ（一四七八死）等のアリストテレース研究者等、極めて多數である。が此時代の人々の「人間らしき」と考へたものは古代希臘及羅馬の思想と離るゝことのできないものであるから、それだけ考が限定せられてゐることは爭はれぬ。

文藝復興期の人本主義は先づ伊太利に榮えたる後佛蘭西、西班牙、獨乙、英吉利等に傳播した。概して言へば歐洲近世思想の特徵は全く此人本主義に在るので、多かれ少なかれ、其影響を受けぬ者は殆んどないのである。例へば、エラスムス、メランヒトン、ルッテル等の人文主義に對する關係を顧みれば、獨乙の宗教改革が之を基礎にせることは言を俟たぬであらう。フーゴー・グロチウスに始る自然法說が中世の神學を基礎とせる中世の法理說に對して、人性を基礎として法理を說くが如きも亦然りである。

Humanismus といふ語は又邦語にて人道主義と譯して然るべき意味に用ひらるゝことがある。此意味では、其は單に個人の利害得失をのみ顧慮することなく、廣く人類一般の福祉を計る所の考へ方をいふ。其は個人主義、物本主義等に對立する意味で用ひられる。

併し今本書に於いて人本主義と題して論せんとする所のものは、此等の何れとも全然一致するといふ譯にゆかぬ。先づ文藝復興期に於ける人本主義と比較するに或意味では其より狹く、或意味ではそれより廣い。第一に文藝復興期の人本主義は神中心の思想に反對する現世本位の總ての思想を包括する意味があるけれども、此處に私の人本主義といふは其全部を指すものではない。スコラ哲學が教會の教理に適合するやうに自然を解釋したに對して、直接自己の觀察實驗に基いて自然を探究するのも文藝復興期の意味よりすれば人本主義であるが、今は唯人類の文化活動に於いて人間の理想化に最高價値をおくものゝみをしか名くる。此點では意味が狹くなつて居る。第二に、文藝復興期の人本主義には復古卽希臘羅馬の古代の思想を復活するといふ意味がある。從つて古典を重ん

じ、所謂古典主義 Klassizismus に陷る傾向がある。けれどもこゝに私がいふ人本主義にはさういふ限定は全くない。其點では文藝復興期のそれより意味が廣いのである。又人道主義といふ意味での Humanismus と比較するに之よりも意味が廣い。蓋し人道主義が物本主義に反對するものである點では之と一致するけれども、其が個人主義（本節第二項第三目の個人主義に非ず。本節第一項末尾參照）と全然相容れぬものである點に於いては之と一致しないからである。即私のいふ人本主義は必ずしも人類一般の福祉を第一目的とするといふやうな特定の限定をもつて居ない。

以上は本書說く所の人本主義と史上廣く用ひらるゝ人本主義 Humanismus との關係である。然らば、本書でいふ所の人本主義に如何なる種類のものがあるかといふに、種々の標準に依つて分類せられるであらうけれども、私は先づ生物學的生命の維持延長を以て第一目的となすものと、精神的向上を以て第一目的となすものとを分けうると思ふ。而して其何れに於いても或個人例へば自己を中心にして其理想化に力を盡すか、總ての個人を平等に見て其何れもの理想化に力を盡すかに依つて又種類が分れる。以下其代表的學說を列擧して行かうと思ふ。

二　人本主義の代表的學說　**イ　生物學的生命の維持延長に最高價値を置く學說**　自己の內觀に訴へても、他人の所作により推論しても、人間の記錄に徵しても、吾人々間の意欲の中で最も根本的なるものは生きんとする欲望である。與へられたる此生命を持續し、能ふべくんば永久に生きたいといふことは、最も力强く私共を動かして居る。而して之を科學的に說明して與れるものは近代の生物學である。近代の生物學は單に人類にのみならず、一般に生物は個體生命の保存と種族生命の保存といふ二大本能（尤も意識的なのは人間に及んでだけだが）に依つて見らるゝ通りの現象を呈して居るのであるといふ。人類の歷史の中でも最も直觀的洞察力の深く鋭かつた哲學者の一人であるショーペンハウエルは、未だ生物學 Biologie といふ學問が獨立しなかつた以前已に此思想をもち、しかも一層普遍的に宇宙の森羅萬象一として「生きんとする意志 Wille zum Leben」の現れに非ざるものなしと說いた。今は斯樣な自然哲學的思辯には這入らないが（已に前節で述べたから）、兎に角生物に在つて、從つて人間に在つても亦、箇體、種族の生命保存の欲望がその自然的生活を律して居ることは爭はれない。

所で、此本能を肯定して、生物學的生命、即肉體的生命の維持に最高價値を置く學說をこゝで第一に說かんとするのである。名くれば文化哲學上の生物學主義と言つてもよからう。已に生命が最高價値をもつものである。從つて生命を第二義的とするやうな考へ方は此と杆格することを免れぬ。例へば此立場からすれば前目で說く所の物本主義、特に經濟至上主義の如きは本末顚倒の考へ方と

言はねばならぬ。澤山の金を貯め乍ら醫者にもかゝらず財布の紐を握つて死んだといふ吝嗇婆さんの話は、經濟的財の目的を失つたことゝなるのである。單に經濟的財に限らない。學問でも藝術でも、皆、假令間接にせよ、肉體的生命の維持延長に有益である限りに於いて價値を得てくる。學問や藝術のために生命を損ふやうなことがあれば、之又本末顚倒の沙汰たるを免れぬ。斯く此考の人は考へる。本篇第二章第三節第三項で述べた實用主義の如きは、認識をしてかゝる生物學的生命維持の手段と考へて居ると見らるべき要素をもつて居る。例へば、ファイヒンゲルはレームント・シュミット編「現代の哲學」第二卷中に自己の學說の要點を十五ヶ條に約說して居るが、其中には之を明言せる箇條がある。卽第三ヶ條に曰く、「表象、判斷及推理、從つて思考は生存意志及征服意志の手段である。其故に思考は元來唯生存競爭の手段であり、其限り單に生物學的機能にすぎない」と。トルストイの藝術至上主義にも多少さういふ考へ方がある。

が此生物學主義に於いても個體の生命を重んずるか種族の生命を重んずるか、又、個體の生命を重んずるにしても自己其他自己に近親の一部、例へば家族、氏族、同國人等のみの生命を重んずるか、總ての個體の生命を平等に重んずるかに依つて種々の立場が生じてくる。

第一に最も卑近にして、多くの人の常識を支配して居る立場は自己或は自己に近い範圍の個體の生命の維持を第一目的となすものである。更に其中で最も低級なるは自己一個の生命の維持のためには何物をも犧牲となすを辭しない利己主義的 Egoistisch のものであるが、それより一歩進んで、家族、氏族、同國人の生命の維持をのみ計る立場も原理上は同種類である。蓋し徹底せる利己主義者が、自己一身の安全を全うする爲に、親子、親戚、朋友の安危を顧みざることある如く、自己の家族、氏族の繁榮を計らんがために、他の家族、氏族の休戚を度外視するは往々見る所であるからである。誤れる國家主義者も亦然りで、他國民が戰禍、凶作その他の原因で如何に疲弊して居ても、之に惻隱の情を起すことがない。彼等は國民以上のものを見ないからして斯る情を起すべき餘地がないのである。

現代に於いて此意味の限られたる範圍の箇體の生命の維持を第一目的となすものゝ中注意すべきは誤れる國家主義、民族主義及階級意識に依る思想の三であらう。誤れる國家主義者は自己と國籍を同じうする個人の生命の維持は目的として眺めるが、他の國籍に屬する個人の生命は唯手段として認める。誤れる民族主義は自己と血液を同じうする個人の生命の維持は目的とするが、他の血液に屬するものゝ生命はどうでもよいとする。又誤れる階級意識に基く考の所有者達は、自己の階級に屬する個體の生命の維持は目的として認めるが、他階級の個體生命は用不著なりとする。例へば歐

洲大戰後敗戰によつて破產に瀕せし獨乙を更に苦しめて措かざりし佛蘭西の如きは第一の例に引くべく、ヨーロッパ・アリアン民族がアジア、アフリカ、アメリカ、オーストラリヤの四大陸に亘りて土著の民族を劣等視し、次第に其生存を脅威せんとするは第二の例とすべく、資本家階級が無產者階級の生存權を奪ふことあるも意に介せず、又反對に無產者階級の人々が有產階級の人々の生命に危害を加ふることあるも之を當然となすがごときことあるは第三の例として擧ぐべきであらう。

此第一の立場に理論的基礎を與ふるものとせられて居るものは、蓋しチャールス・ダーウィン（一八〇九―一八二）の進化論であらう。進化論そのものは古くはエムペドクレースから、近くはラマルク、ギョーテ、オーウェン、スペンサー迄多くの人の說いた所で敢て珍しくないがダーウインの進化論はマルサス（一七六六―一八三四）の「人口の原理に關する論文」（一七九七）の影響を受けて自然淘汰 natural selection の說を基礎とせる所に特異點をもつて居る。マルサスの此論文に依れば、人口の增加率は食物の增加率よりも大であり、從つて食物の不足の爲に人類の將來は悲觀すべきものであるといふのであるが、ダーウィンは之を承認し、其より自然淘汰の說を立てたのである。彼が「自然淘汰による種の起原について」（一八五九）等に說く所に依れば、斯る食物と生物の個體（人間に限らず）との關係は必然に食物の爭奪卽所謂生存競爭 Struggle for life, Kampf ums Dasein を惹起す。而して生存能力の勝れたる、生存の諸條件に適應せる個體は、生存能力の劣つた、生存の諸條件に適應しない個體に打ち勝つて生き延びる。優れたるは勝ち、劣れるは敗くる。之が自然淘汰である。而して、斯る自然淘汰が反覆して行はれる間に、生存能力の優越せるものに存する特異點は子孫に遺傳せられて、益々之を發揮せられるに至り、終に常恒的の特質となつて新しき種を生ずるに至る。之が種の起原であり、生物進化の法則であるといふ。故に進化論の根柢には、個體は相爭はねばならぬといふ思想が橫つて居る。從つて此理論の基礎の上に立てば、我々は先づ優れたる生存能力の所有者となつて、生存競爭に打勝たねばならぬといふ結論を生じて來る。之上述の誤れる諸思想を生ずる所以である。ニィチェの超人說の如きも此進化論の影響を受けたものに他ならぬことは已に述べた如くである。

進化論の說く所は事實の說明としては或程度迄は之を承認しなくてはならぬ。ペーテル・クロポトキン（一八四二―）の「進化に於ける相互扶助」（獨譯一九〇四）に於けるが如く、生存競爭は普遍的に行はれるものでなく、生物の低級なる段階よりして已に相互扶助 mutual aid, gegenseitige Hilfe が行はれて居るとしても、しかも生存競爭の事實が生物界に廣く行はれて居ることは承認せねばならない。けれども事實として其が廣く行はれて居るとしても、之が吾人のとらねばならぬ道である

か否かは疑問である。能きるだけ自然の進行を人爲的に變更し、理想化して行く所に文化の意義がある。之が不可能ならば仕方がないが、能きるならばしかすべきである。そこで不可能であるか否かと考ふるに、ダーウィンの進化論の出發點として假定せられて居るマルサスの人口論は中々打克ち難きものである。人に依ると、統計上、彼の言ひし如く、食物の增加が算數學的級數を以て進み人口の增加が幾何學的級數を以て進むことはないと言ふけれども此議論は正當ではない。何となれば、人口增加の統計の示すところは、食物其他生活條件の不公平なる配分といふ偶然の事情に依つて落伍した、ダーウィンの所謂生存競爭の劣敗者を算入して居ないからである。マルサスの悲觀論は食物の不足に在るのであるから、直接間接に食物の不足に依つて死亡するものが多くして人口の增加が幾何學的級數を以て進まないのは、彼の說を覆すものでなくて、反つて證明するものと言はねばならぬ。之によつて見れば總ての個體が皆一樣に生存を全ふするといふことは始めより個體の繁殖を制限するより他には難しい。のみならず今日の醫學の進步の程度では、個體の天壽命數を思ふがまゝにすることは全然不可能のことであるが故に、人間の生命欲は、個體の生命より種族の保存といふことに向ふ場合を生ずる。之生命の維持に最高價値を置く考へ方の第二の場合である。

之は國家と國家、民族と民族、階級と階級と言べるが如く團體間の大規模の生存競爭が行はれる場合に團體夫々を組成する個人と團體自身との間に現れる考へ方である。例へば國家間の戰爭は一の生存競爭と見做さるべきものであるが、此場合交戰國の人民は自己の身命を國民の生命維持の爲に捧げて戰ふ。又或階級の生存が他の階級に依つて脅威せられる場合には、其階級に屬する個人は階級全體の爲に一身の安危を犧牲に供して戰ふ。佛蘭西革命の鬪士や現代の勞働者運動の指揮者達には此犧牲的精神が旺盛に存してゐ、之が彼等をして時に自己のみならず、多くの人命を損傷するも亦止むをえずと考へしめる所以である。

最近勃興せし優生學 Eugenics を本とする國家の施設の或者の如きも此「小の虫を殺して大の虫を生かす」思想に胚胎して居る。若し個體の生命を全然平等と見るならば、不治の遺傳的疾病、例へば癲病者に子孫を殘さゞらしめんとする法律の如きは許すべからざることゝなるのであるが、之を許容せる國家に於いては正しく全體としての國民の生物學的生命の維持、促進の爲に或種の個體の生命を一代限りで終結せしむることを認容するが爲である。

故に個體は結局全體の爲に犧牲にならねばならぬ場合が必然的に存在するとしても、能ふべくんば、總ての個體をして其生命を持續せしめんことは、單に誰彼の生命に最高價値をおくのでなく、一般に生命といふものに最高價値をおく限りに於いて、吾人の努力の標的であらねばならぬ。少く

とも、それが國民、種族、或は人類の全體としての永續に反せざる限りに於いてさうあらねばならぬ。然るにそれが國民、種族、或は人類の全體としての永續に何等反せざる場合に於いて、或個體の生存が侵される場合が少くない。卽、善良なる人間であつて、其生存が隣人の生命、團體の團體としての生存に影響することなく、しかも他人、或は團體が之を單に手段として見、目的として見ざることよりして、最高價値としての生命を維持しえない場合がある。さういふ場合、其個人又は之が目的として見らるべきことを主張する第三者に於いて、之が强い人道主義の雄叫びとなつて現れることは想像しうべきである。

正に此場合に相應するものが今日の經濟上の社會主義の主張である。社會主義の歷史は古い。其はカル、・カウツキー（一八五四―）が其「近世社會主義の先蹤」（六版、一九二一）に述ぶる所に依つてもプラトーン及原始基督敎に遡り、中世の宗敎團體の共產主義や獨乙宗敎改革時代のトーマス・ミュンツェル（一四八九―一五二五）等を經て來たとして居る。原始基督敎が共產主義的なりしことについては新約聖書中に權證あり。例へば使徒行傳第四章に曰く、「信者はみな心を一にし意を一にして誰一人その所有を己がものといふことなく、凡て之を共に有てり」と。又曰く、「其中に一人も窮乏者なかりき。蓋地所或は家を有てる者は其を售りて其售りし所の價を挈來り、使徒等の足下に置く、これを各の用に從ひて分け與へしが故なり」と。併し乍ら今は社會主義の淵源及歷史を講ずるが目的ならず、社會主義が文化哲學としていかなる地位を他の諸學說の間に占むるやを明にせんことが目的なれば、近世社會主義の心核に就いてのみ述ぶることゝする。近世社會主義思想の直接原因は機械の發明に依る大規模工業の發展である。大規模工業の發展の結果、從來の手工業時代には親方弟子の人情的關係であつたものが、雇主と賃金勞働者との關係となり、賃金勞働者は雇主にとつては機械と同じく唯生產の手段と見られ易い。雇主は機械を所有し、原料を買入れ、其投資に對する利益をのみ多からしめんと計る結果、勞働者は其費す勞力に相應するだけの報酬を得ることができぬ。しかも獨力で事を始めようとしても機械や原料をうることができぬ。然るに機械力を用ゆると否とでは生產力に大なる相違があるから、機械工業に對して手工業者に立歸ることはできぬ。そこで是非賃金勞働者とならねばならぬが、さうなると此「ならねばならぬ」といふ弱味が雇傭契約に反映して、不利な條件の下に雇傭關係を結ばねばならなくなる。而して勞働者は時に其生活の必要物をも求めえられず、又失職する機會すら多くなるに雇主の方は餘剩價値の搾取に依つて益々富み、贅を盡し、贅澤品の製造を盛ならしめて、生活必需品の物價を昂騰させ、愈々勞働者の生活を威嚇する。そして其結果、貧の爲に、生きんが爲に爲さるる樣々の恐るべき社會現象を生ずる。これ全く

資本家が勞働者の人としての存在を無視するに起因すると言はねばならぬ。近世社會主義は此無視せられたる勞働者の生存權を回復せんことを根本要求となすものに他ならぬ。限られたる個體の生命を至高價値とする立場に對して一般に總ての個體の生命を至高價値とする立場の反抗であるといふべきである。これ生物學主義の第三の立場である。

此立場に對しても進化論に理論的基礎を求めらるゝ場合がある。クロポトキンの如き相互扶助論を別にしても、生存競爭の立場から之を論ずるものもある。例へばフリードリッヒ・アルベルト・ランゲの「勞働者問題」(一八六五)の如きそれである。併し乍ら生存競爭の意味を變じて、人間間の競爭と解せず、單に生存のための努力と解し、人類が人類として永存を全ふせんには、相互協力に依りて進むといふ社會主義的組織に依らずんば能はずといふ意味に之をとらざる限り、進化論を社會主義の基礎理論とはなしえない。若し夫れ之を以て社會主義を實現する手段としての階級鬪爭として採用するとしても手段の爲に目的を殺すの結果となると思はれる。

更に此立場に全然別箇の根據より立つ者は新カント派の一派たるマールブルヒ學派の人達である此派の人々は社會主義者たるに於いて、マルクスやエングルス及其徒と同一であるけれども、哲學的根柢には大なる逕庭がある。彼等は皆カントの「實踐理性批判」(一七八八)に現れたる倫理思想を根柢とする。今コーヘンに依れば、カントの道德律たる斷言的命令 Kategorischer Imperativ の公式三つある中にて、道德の形式的方面を規定せる最初の二つは人常に注意するけれども、其實質、內容に觸れたる第三の公式には餘り注意をしない。けれども此第三の公式こそいとも重要なものである。三つの公式とは、第一、「其に依つて汝が其の同時に一般的法則たらんことを欲し得るが如き準則に從つて行動せよ」、第二、「汝の行爲の準則が汝の意志に依つて普遍的法則となるべかりしが如く行爲せよ」、第三、「汝が人類をば、汝の人格をも他人の人格をも、常に同時に目的として使用し、決して單に手段として使用せざるやう行動せよ」の三である。之はカントの「道德形而上學の基礎づけ」(一七八五)に出てゐるものである。所で若し此第三の公式に注意すれば其處に人類の理念が說明せられて居るのを見るといふ。今ランゲの「唯物論史」に附せし彼の序論の中より、彼が此等の公式に就いて述ぶる所を引用すれば、曰く、「今日ですら猶人は、—誰でも知つて居る如く—イムマヌエル・カントの發見に非ずして發明にかゝると言はれる所の斷言的命令に就いての疑問に對する解答として、一般的法則を準則から區別する所の定義(フォルムリールング)を受取るだらう。之に反して人類の理念を其內容として說明する所の此命令の定義(フォルムリールング)に就いては、一般的敎養は、殆ど、或は全然、知らない。又人間を自己目的と見て、『單に手段で』ある一切のものから區別する所の第三の定義について

も、假令全然ではないにしても、猶一層知らない。自己目的は人格者（ペルソーン）の概念、卽倫理學の根本概念を產出し、又規定する。單なる手段は物件（ザッヘ）である。物件は經濟的交易の物件としては商品である。であるから、勞働者は決して商品と考へられることは能きない。國富と言はるゝ比較的高い目的のためにも亦さう考へられることは能きない。「彼は『常に同時に目的として』考察せられ、取扱はれねばならない」と。

カントが生物學的生命を絕對價値と見たとは信ぜられないが、少くとも生命を物件より比較すべからざる程高い所に置いたことは確實である。而してコーヘンは之を繼ぐのである。

四　此學說の批評　生物學的生命を至上價値と見るものは、物件を至上價値と見るものよりも一歩進んで居ることは爭はれない。併し乍ら文化哲學上の此生物學主義も絕對的に維持しえられる學說ではない。第一に個人の生命にしても種族の生命にしても、唯之が維持延長せられるだけで何の價値があらうかといふ疑が起る。生物學的生命卽肉體的生命とは唯肉體の諸機官が機能を停止しないことをいふだけのことである。彼が如何に生きるか、如何なる精神的生活をなすかといふやうなことには無關係である。白痴の生命も、狂人の生命も、罪人の生命も、常人の生命も、聖賢の生命も皆一列一體に取扱ふ。故に此考へ方からすれば、生きて地獄の苦みを受けつゝありとするも自ら生命の斷滅を計るといふことは至大の罪惡でなくてはならぬ。又第三の立場に在れば他人が如何に極惡非道であつても、之に自己を防禦するため、又は之に復讐するため他人の生命を絕つことは（死刑の如きも）罪惡であるとせねばならぬ。トルストイやガンヂの如く絕對無抵抗主義の立場にならねばならぬ。但第二の立場をとれば種族生命の維持の爲に個體の生命を犧牲にすることが能きるが所謂種族生命の維持といふことも、其精神生活の內容とは沒交涉に考へられた生命の時間的延長を指すに過ぎぬ。けれども我々は單なる生命の延長を以て滿足できぬことが多いのである。苦しき生よりも死を擇み、死を擇まざる迄も、よりよき生を營まんとして煩悶する。於是、同じく人間本位の學說ではあるが、肉體的生命よりも吾人の精神活動のうちに至高價値を置かんとする學說を生ずる。之にも細別すれば種々あるが其中の體型的な二三を述べよう。

八　快樂主義　快樂主義といふは快の感情に至上價値を置き、之を規準として一切の意志活動を律せんとするものである。尤も快の感情を如何なるものとなすかに依つて快樂主義にも種々あることは豫め知つて置かねばならぬ。原語にも Hedonismus, Eudämonismus, Epikureismus 等の語がある。最後の語はエピキュロス及其徒が快樂主義者であつたに依る。

快樂主義の祖先は西洋哲學史上に於いては、ソークラテースの亞流なるキレーネ學派であらう。

由來希臘人は現世の幸福を重んじた民族で、ソークラテースの倫理思想に在つても所謂福德一致の說を立て、幸福の概念が重大な役目を演じて居るのであるが、此派の祖キレーネのアリスティッポス（凡紀元前四三五―不明）は更に一層此概念に重きを置いて快樂主義者となつたのである。アリスティッポスに在つては愉快なる感覺卽快感を惹起すことが吾人の行爲の規準である。しかも其は苦を除くといふが如き消極的のものではなく、進んで快を得んとする積極的のものである。又過去の快感を喜ぶとか將來の快感を目的とするとかいふのではなく、箇々の現在の快感が價値をもつとする。從つて其は、感覺的快感、卽五官に依つて生ずる快感を主とする。併し此派もテオドロス、ヘゲシアス等になると苦を離脫するといふ消極的方面が強くなつた。

キレーネ學派に次いで擧ぐべきはエピクロス學派の快樂主義であるが、之は前者に比すれば遙かに理性的である。エピクールも快感を以てあらゆる努力の目的とする。けれども凡そ二點に於いてキレーネ學派と異つて居る。彼は快感を運動の快感と靜止の快感との二種に分け、キレーネ學派は唯運動の快感のみを認めたとするのが第一。快苦に肉體的（感覺的）と精神的（理性的）との二種を分け、後者の方が強いとするのが第二である。運動の快感とは積極的のもので、靜止の快感とは消極的な苦痛よりの解放を意味する。又何故精神的快樂が肉體的快樂より強いかといへば、後者は唯現在の瞬間に限られるに、後者は、過去の記憶及將來の希望にも及んで現在の快感を强めるからだといふ。そして此等の種々の快感の中で最も勝れて居るのは心の平靜 ἀταραξία の快感であるが、そのためには能きるだけ情慾を制する必要がある。又如何なる快感も求むべく、如何なる苦痛も避くべしとは限らない。蓋し、快樂の原因たるものが次に一層大なる苦痛を伴ふこともあり、又、苦痛の原因たるものが次に一層大なる快樂を伴ふこともあり、又、苦痛の原因たるものが次に一層大なる快樂を伴ふこともあるからである。すべて我々の行爲及行爲の中止は其より生ずる快と苦との總量を計量して定むべきであるとする。此等の點より考へて彼は成程快樂論者ではあるがアリスティッポスの輩とは雲泥の相違がある。されば彼の推擧する生活法の如きも、平常は質素簡朴を旨とし、唯稀に贅澤な生活をしてもよいと考へて居た。

近世の快樂論者は先づ英國に發見することが能きる。ロックに已に其跡を見る。其最も明瞭なる形にて現れたるはジェレミー・ベンタム（一七四八―一八三二）以來の功利主義者に於いてゞある。ベンタムに依れば快感及快感を生ずる所のものが最高の善である。唯問題は如何なる快感をえらむべきかといふこと、卽快感の計量 hedonic calculus であるが、其には快感の强さ、永續性、遠近等及び快感を味ふ個體の數を考慮に入るべきである。多くの個體が快感を味ふ時之を團體の幸福といい

ふ個體の快感を離れて團體の幸福はない。後者は前者の總計を謂ふに過ぎぬ。で、眞の快感の計量から言へば、他人の快感をも顧慮した方が自己の快感をも促進することゝなる。其故に倫理學は利己主義を排して全體につくことを薦むる。德といふも小さき目前の滿足を捨てゝ遠く大なる滿足を求むることである。斯くて道德的行爲の究極は快感、幸福の最大限を求むること、所謂最大多數の最大幸福 greatest happiness of the greatest number にありとする。ジェームズ・ミル（一七七三―一八三六）、其子ジョン・スチューワート・ミル（一八〇六―七三）も此ベンタムの快樂主義を襲つて居る。けれどもジョン・スチューワート・ミルに至つては、快感に量の差別の外質の差別を分つことに於いて一歩を進めて居る。

大陸では自然哲學上の唯物論者であつたラメットリーに之を見出す。彼の「幸福論」は純然たる快樂主義である。彼に依れば、人間の幸福は快感をうるに在る。快感には質の上の區別なく、唯大小長短の區別あるのみである。卽我々は單に肉體なのであるから所謂高尙な精神的快樂も結局は肉體的快樂に歸するが、唯感性的滿足は强烈で短く、全心生活の調和より起る幸福は靜かで永續的の差あるのみである。反省は快感を與へることは能きぬ。唯高めることは能きるが、それは其が可能であるといふので、同時に快感を奪ふこともある。無一物で幸福な自然人もあれば、富、名譽、愛に十分で不幸な文明人もあると。之に依つて見ればラメットリーの快樂主義はキレーネ學派風であると言へる。此ラメットリーに對し、宛かも往昔エピクールがアリスティッポスに對するが如き關係にあるのがホルバッハである。

二　其批評　凡そ快を求め苦を避けんとするは人性の本然より出づるものである。最大の快樂は何人も之を欲し、苦は最小の苦も之を嫌ふ。併し乍ら一時の快は長時の苦を招き、一時の苦も永遠の樂の因となることあり、又甲の種類の快は乙の種類の苦を誘ひ、又其反對のことがある。眞の快苦の標準は決して草々に決せられぬ。依つて快樂が人生至上の目的であるとするも、如何にして如何なる快樂を求むべきかといふことが必然的に次の問題とならねばならぬ。

快感そのものに種類を分つことになれば勢ひ、ベンタムが爲したやうに、其强弱、永續性、遠近、快樂を味ふ個體の數等を標準にして定めなくてはなるまい。性質上の差別もあらうが之を概念的に示すことは不可能である。例へば拔苦與樂の道たる佛敎の與ふる樂は法悅、法樂ともいふべき特殊のものであるが、法悅、法樂のいかなるものなるかは唯佛與佛の不可言說的のものとせられて居る。此不可言說底のものを餘人に示すに佛陀は非常に苦心して居るが結局譬喩を以ての他示しえなかつた。例へば念處經（昃六）に於ける四禪の安樂境の說明の如きがそれである。（姉崎博士「根本佛敎」

一五八頁參照)。而して右のベンタムのゝやうな標準を以てすれば大體に於いて、永續性は短くても强烈なる快感を求むるものと、弱くても永續的なるものを求むるものとの二類を分つことができる。前者はキレーネ學派やラッメトリーのやうな人達で後者はエピクールのやうな人達である。併し其何れをとるべきか、或は何れをもとるべからざるかといふことについては、彼等が此等の快感を如何にしてえんとするかといふことゝ關係して來る。

此處に「如何にしてえんとするか」といふことは「何に快感を見出すか」といふことであるが、此點より右の二類を見るに前者は主として肉體的卽感覺的快樂を主とするもので、後者は精神的快樂を主とするものである。而して前者の極端になつたものは自己一身の快樂をのみ求むる廢頽的な人間である。現代文明の缺陷の一は此種の廢頽的の考に感染した人間が多いといふことである。又感覺的快樂は物本主義と關係することが多い。其等の點よりして感覺的快樂說は取ることが能きない。又精神的快樂を主とするものに於いては快苦の觀念が餘りに常識的の快苦の觀念と相違する場合が多く、寧ろ快樂主義の名を捨てた方が宜しいやうな場合もあるのである。例へば前述せる佛敎の場合に於いて、佛敎は拔苦與樂の敎であるといふものゝ、所謂苦も樂も感覺的快樂主義者の考へるやうな苦や樂ではない。後者の考へて居る樂も眞の樂ではなく、捨棄せらるべきものであり、其爲には其考へて居る苦も甘受しなくてはならぬ。さういふ點よりすれば、精神的快樂を主とする快樂主義に於いては、此名を避くる方がよいと思はれる。所謂快樂とは理性的評價に依つて價値と斷ぜらるゝものをえた喜を一般にさすとしか考へられない。

ホ　主情主義　快苦も一の感情であるが、其は感覺的である限りに於いて極めて低級のものである。之に反して我々が一般に情緒情操などといふ高等の感情の理想化に至高價値をおく學說をこゝに主情主義 sentimentalismus の名を以て呼ぶ。前述の精神的快樂主義の中にも之に攝せられるものもあらうが、中には之と相容れぬものもあつて一致しない。蓋し精神生活を樂しむ者の中には理知的精神生活に至高價値をおく者卽主知主義者もあるのに、主情主義は主知主義とは相反するものであるからである。

主情主義の特徵は、情緒、情操の纖細さ、輕快さ、明暗の度、多樣性等を重んずる所にある。從つてそれの組合せに依つて樣々の個性が現れる。快樂主義にあつては感情は結局快苦の二範疇に分けらるゝのみであるが、主情主義者はさやうに單純に考へない。感情生活の無限に複雜な發展を心掛ける。

近世の主情主義者としては先づ佛蘭西のジャン・ジャック・ルソーを擧げることをうる。彼は啓蒙時

代の主知主義的傾向に對して感情を重んずべきことを絶叫した。そして後代に多くの影響を與へた。カントの如きも其感化を受けた一人である。彼は自ら告白して、若しルソーなかりせば自分は徒に學問せんことのみに汲々として、人間を尊重することを知らなかつたであらうといふ意味のことを述べて居る。卽遺稿の中に曰く、「ルソーは私を矯正して呉れた。私は自身の傾向上研究家である。私は知識に對する大きな渴きと、之を進ませんとする貪欲な焦燥とを感ずる。そして進む毎に又滿足を感ずる。而して私に曾て、此總てが人類の榮譽をなすものであると信ぜられた時代があつて私は無知の俗人を輕蔑した。併し今日は、此眩惑的な美點は消失し、私は人間を尊重することを知つて居る。而して若し私にして、此考察が、あらゆる他のものに價値を與へ、人類の權利を回復しうると信じえないならば、私は自らを普通の勞働者よりも遙かに一層無益であると考へるだらう」と。直接には人類愛を鼓吹せられたことを言つて居るのであるけれども、元來理知主義者のカントに感情生活の點火がなされたことをも意味して居る。

併し、カントは、それにも拘らず、主情主義者ではない。彼の倫理學は彼の寧ろ主知主義者たることを示す。主情主義を繼承するものは彼の晩年頃より崛起したローマンティック Romantik の文學者及哲學者の一部である。ローマンティックといふ語は、古典主義 Klassizismus に對する語であつて、古典主義が希臘羅馬の文化を憧憬するものであるに對し、ゲルマン民族がローマ文明と接してローマ化せられた頃の文明を思慕する所より生じたのであるが、又他の觀點よりすれば、古典主義が聰明なる理知を重んずるに對して、燃ゆる熱情、夢みる想像を重んずる所にローマンティックの特徴が存して居る。シュレーゲル兄弟、グリム兄弟、フリードリイヒ・フォン・ハルデンベルク（雅名ノヴァーリス）の如きは之に屬する。哲學者では無論フィヒテ、シェルリンク、ヘーゲルがその代表者であるが、特にシェルリンクが主情主義的であらう。

最近獨乙に起つて居る新ローマンティックの運動も主情的である。

主情主義は宗教及藝術と大なる關係を有つて居る。宗教が感情生活を重んずることは、特に感情に偏しない佛教に於いてすら猶且つ然りである。況んや元來知識を輕蔑する基督教に於いては尙更然りである。シュライエルマッヘル（一七六八―一八三四）が宗教を以て無限なるもの、神に對する絶對憑依の感情であるとなせしが如きは其好典型である。藝術に於いても、壯美とか優美とかいふ感情を惹き起すのが主であるから、之が創作にも、又鑑賞にも情操の陶冶せられてあることを要求する。

ヘ　其批評　感情生活に至上價値を置く結果は一面に於いては理知の眼を眩ますと共に、他面に於いては意志力、實行力を薄弱ならしめる傾向がある。理知の眼を眩まさるゝの結果は、總ての感

情を感情として一樣に重んじて行く餘裕を失ひ、唯現在の自己の感情に支配せられて、前後左右を顧る遑がなくなる。戀愛に陶醉して總てを忘るゝ者、一の宗教に熱中して是非を忘却する狂信家の如き之である。又意志力を薄弱ならしめらるゝ結果は、唯己の感情の赴くまゝに泣き、笑ひ、悲しみ、喜び、實生活と沒交渉なる人間を作る。又それ程に自己惑溺に陷らずとも、主情主義の弊を示す者は多い。山川風月の情趣を味ひ、詩歌管絃の調をきき分くる力はあつても、自己の生命を維持する米麥の値を知らず、作りやうも知らず、手に入れ方も知らず、平安朝の大宮人の如き人達がそれであらう。されば其は人生に潤ひを與へるものであるけれども到底複雜な人生問題を之によつて解決することはできぬ。

ト　主意主義と主知主義　主情主義が感情の理想化に至上價値を置くと全く同一の意味に於いて意志或は理知の理想化に至上價値を置く者を文化哲學上の主意主義 Voluntalismus 及主知主義 Intellectualismus と名ける。其意義は大體主情主義との比較に依つて明であらうと思ふから詳しくは述べぬ。

主意主義といふ語はテンニース（一八五五―）が一八八三年に雜誌「學的哲學季報」に始めて用ひ、後パウルゼン又之を用ひ、一般に普及したものである。テンニースの主意主義は「人間の身體の心的等値者としての本質的意志 Wesenwille なるものを立て、之より普通我々が意志と名ける所のもの、彼の言葉で言へば恣意 Willkür を導出する。又本質的意志なるものは身體と等値なるものとして、身體自身を意志と見たる箇所もある。さういふ意味で彼の主意主義は心理學的或は自然形而上學的の主意主義と考ふべきであるが、それはこゝにいふ主意主義とは異る。此處にいふ主意主義は吾人の意志的活動に於いて理想化せらるべきものゝ中意志を最も重しとなすものである。認識論の項下にて述べたる實用主義、並びにカントよりフィヒテを通じて現代の西南獨乙派等に及べる「實踐理性の優位 Primat der praktischen Vernunft」の思想の如きは之に類緣のある思想である。けれども、實用主義に在つては特に實生活上の意志即生物學的生存のための意志を重しとするの心あり、實踐理性の優位の思想に在つても特に道德的價値への意志を重んずるの傾向あり（實踐理性の優位については種々の解釋を施しえ、從つて其等の幾多の解釋を分別しておかねばならぬが今は其に立入らず）、一般に意志の理想化に最高價値を置くものとは斷せられない。

然らば、一般に意志の理想化に最高價値を置く學說とは如何なる學說か。完全に適當な例とは言ひ難いけれども、バウル・ナトルプが其敎育學上の述作で、意志の陶冶を至重視せるが如き意味にて意志の理想化を至重視するものを斯く名くるのである。ナトルプが「社會敎育學」（第五版、一九

二一)に說く所に從へば、敎育に於いて最も重要なるは意志の淘冶である。敎育 Erziehung といふ語が已に之を表して居る。我々は知的敎育、美的敎育、宗敎的敎育とか言つて此語を一層廣い意味に用ゆることもあるが、其は、此等の淘冶が意志の淘冶に依存して居るからか、それともそれが意志の淘冶に影響を與へるからかに他ならぬ。それでなければ我々は敎育といふ語を用ひずして敎授 Unterricht とか淘冶 Bildung とかいふ語を使用する。所で意志に三つの階級がある。一、衝動。二、狹義に於ける意志。三、理性的意志之である。此等の三つの階級を通じて共通なることは存在するものに對して存在すべきものを求むる傾向であるが、其に伴隨する自己意識の明瞭の度に依つて三つの階級が分れて來る。衝動に於いては其存在を要望せらるゝ所のものは現在の時處に限られて居る。第二の狹義の意志に於いては、其存在を要望せらるゝものは現在の時處に限られて居ない。多くの衝動の中、一を擇み他を斥けて、擇まれたるものへの方向に强な大力を以て進む。第三の意志に於いては最早或特定の目的に執著するといふことはなく、遼遠なる理念としての目的を要望しつゝ經驗的目的を導いて行く。然らば彼がいふ意志の淘冶とは何を意味するかといふに凡そ二つの解釋を許すやうである。第一は次第に衝動的意志生活より理性的意志生活に進むこと、卽ち意志生活を理性的になし行くことを意味すと解するのであつて、第二は彼が「個人的德の體系」に於いて第二の德目として擧ぐる勇氣卽道德的實行力の涵養を意味すると解するのである。勇氣とは何ぞや。其は自己修養 Selbstzucht 卽自己の衝動を「意志の法則」卽實踐理性の法則に隨順せしめる所の力をいふのである。德 virtus は元來「男らしさ」を意味するのであるが、其が勇氣の本來の意味である。「男らしくあれ」とか、「意志をもて」とかいふのが勇氣をもてといふことだ。勇氣 Tapferkeit といふと動もすれば爭鬪を意味すると一面的に解せられるが爭鬪といふことは必ずしも道德的でない。道德的實行力としての勇氣は善の實現のために衝動生活より起る障碍を征服し行くことであると。二つの意味に聯關はあるが、第一の意味では理性の淘冶が主となり、第二の意味では實行力の陶冶が主となる。私のいふ主意主義は勿論後者に至上價値をおくやうな學說をいふのである。

ナトルプは此意志の淘冶の爲に所謂社會敎育學を主張する。社會敎育學とは意志の淘冶は唯社會の影響の下に爲さるゝものである、人は他人の意志の影響の下に「欲すること」を學ぶといふ理論の下に意志敎育に必要なる社會組織を論ずるものである。そして彼に依ればかゝる敎育說は瑞西の敎育家ペスタロッチ(一七四六—一八二七)に發するものである。

ナトルプに於いては社會を重んずるが故に、主意的であるとは言へ、同時に諸意欲の統整者たる理性をも重んずる傾向が强いが、一層理性を從屬的のものと見るものは個人主義の項で述べたニイ

チェである。駱駝變じて獅子となり、「我は欲す」といひて大龍と爭ふの譬喩譚（本節第二項第一目參照）は彼の主意主義を語るものである。

次にこゝにいふ主知主義は、理知の開發に最高價値を置く所のものであるが、主知主義といふ語も用法が多いから、他の用法から豫め之を區別して置かねばならぬ。即ち、認識論上感覺論に對して合理論をしか呼ぶこともあり、心理學上心的生活の最も基本的なるものを知性となす學說をしか呼ぶこともあり、倫理學上あらゆる行爲、意欲は理性に統率せらるべしとする學說、即本能主義等に對する學說をしか呼ぶこともある。が此處に主知主義といふは吾人の文化活動に於いて知性そのものゝ開發を第一目的となすものを言ふ。

主意主義の例として教育學上の學說を引きたるを以て主知主義にても先づ其方面の例をとることゝすればヘルバルトの教育學の如きはそれである。彼の教育學上の主知主義は心理學上の主知主義に基いて居る。彼の心理學に依れば、知情意の三作用のうち最も本源的なるは知の作用たる表象の作用である。表象が互に相反對せるものなる時は互に相妨げ、一方は意識外に去り、表象せんとする努力が起る。之が欲望が達しえられる範圍のものに向つて努力せる時之を意志といふ。感情も亦かの反對せる表象の妨げ合ふ時に生ずるものであるといふ。從つて教育上も知的陶冶を中心とするものである。彼の教育學が其教授法論たる五段教授法を中心として考へらるゝは全く其主知主義の反映である。

廣義の知性には實驗觀察の力、內的直觀力、判斷力、推理力等、種々の分別をなしうべく、從つて其何れを重んずるかに依つて主知主義者にも種々の區別が生じうべきが、其は認識論の項下を參照することに依つて自ら理解しうべしと信ずるより今は總て省略する。又箇々の例をあぐることも省略するが、一言時代について述ぶるならば、希臘時代は主として主知主義的であり、近世に於いて十七八世紀の開明時代、十九世紀の中葉の如きも然りであつた。

チ　其批評　文化は意志力に依る自然の理想化であるから文化の促進に意志の陶冶の重要なることは論を俟たぬ。又理想化である限り、理想化せらるべきもの、及理想化せらるべき仕方等について知性の指導を必要とし、從つて知性の開發の重要なることも言を要せぬ。けれども意志を强固ならしめること、知性を開發することが、夫々それのみで至上價値を與へらるべきか否か疑問と言はねばならぬ。若し無條件的に强大なる意志力を最後の理想とするならば、成吉斯汗やナポレオンの如き英雄、ビスマルクやレーニンの如き鬪爭的政治家は文化の頂點を示すものと言はねばならぬ。又博大なる知性を以て理想の究極となすならば、パリサイの徒の如き知解の輩を斥けしイエスの言

葉も眞とするに足らざるべく、學者はあらゆる場合に於いて、それのみで、無上の尊崇に値するものといはるゝことゝならう。これ肯ひえざることである。

猶主情主義主意主義及主知主義につきて一般に一言し置きたきは、此等の考へ方が學說の形を以て意識的に自己の意志活動を指導しつゝある場合は比較的少くて、天性、境遇、職業等其他の事情に依つて、知らず〳〵此等の考へ方の何れかに墮することの多いといふことである。例へば學者となると其學說は主意說であつても、其人の考へ方の奥に主知主義が横つて居り、藝術家となると如何に眞理を重んじても、其底に主情主義的の所があるが如くである。其故に此等の諸方向の本義、利害得失を批評せんとならば、どうしても一定の形式を整へた學說の中に、文化活動そのものゝ中に流るゝ考へ方を凝視する要がある。文明批評或は文化批評の任務がそこに在る。

とにかく此等の主義は皆人性の一面的發達に努力を專注し、他を忘れるの結果となるを免れぬ。茲に於いてか、知情意の圓滿なる發達、又は心身の圓滿なる發達卽人性の全面的發達を至上價値とするものを生ずるに至るは自然の理である。例へば英國のシャフツベリー（一六七一―一七一三）の如きは之に近い。斯る學說を完全說 Vollkommenheitstheorie と名けえよう。が之については、今は略することゝする。

第四項　厭世論と樂天論

附　自由意志の問題

一　厭世論の意義　以上吾人が吾人の意欲生活に於いて至高價値として追求する樣々のものに從つて、個人主義、民主々義、物本主義及人本主義の意義及諸形態を列叙して來たが、こゝに一つの問題がある。我等は其等の孰れかを最高の目的として追求するが、果して所期の目的を達しえられるか否かである。我々は其等の何れかゞ現に存在してはゐないが、求めらるべし Sollen とする。けれども求めらるべしといふことは求めえられる Können といふことではない。不許不 Sollen と可能 Können, Möglichkeit とは不可分離の概念ではない。そこで、至高價値に關する學說が何れであるにしても、該至高價値は求めうべからずとなす者と、求めうべしとする者とを生ずる。求めうべからずとなす者之を厭世論 Pessimismus と言ひ、求めうべしとする者之を樂天論 Optimismus といふ。

厭世論の原語 Pessimismus は最惡を意味する羅典語 Pessimus より出で、世界及人生に於ける惡い方面を强く見るのを言ふのであるが、次第に意義を明確にして、吾人の文化活動に於いて至高價値を實現しえないとするもの、卽文化活動の可能を否定するものを指すやうになつた。例へば詩人

にして、哲學者であつたヒエロニムス・ローム（雅名ハインリッヒ・ランデスマン、一八二一―一九〇二）は「無根據の樂天論」（一八九七）で、カントの物自體不可認識說の根據の上に立つて學的厭世論なるものを主張して居る。卽彼に從へば、吾人の認識は人間の主觀的先天的な精神活動及感性活動の牢獄に幽閉せられてゐるものであるから、眞理を認識せんとする燃ゆるが如き欲望は、終に苦痛となり、絕望に終る運命をもつて居る。卽「有限なる人性の能力を以て存在の起原及目的を闡明せんとするは不可能である。此知見が學的厭世論である」と。斯の如きは正に至高價値を暗に「存在の起原及目的の闡明」といふ認識とし、之が可能を否定するもので、こゝにいふ厭世論の一種といひうるだらう。が、こゝではかゝる特殊のものに限定せず、一般に之を論ずる。

二　厭世論の史的概觀　希臘には厭世論者は誠に少い。蓋し希臘人の素質が元來樂天的であつたのに依るのであらう。僅かに一二の例外を見うる。例へばキレーネ學派のヘゲシアスの如きである。ヘゲシアスはアリスティッポスの積極的快樂主義を消極的快樂主義に改めた人であるが、一說に依れば、彼は厭世主義的の講義をなして多くの聽者を自殺せしめたゝめ、プトレマイオス・ラグ王に依り其講義を禁止せられたといふ。其がため彼は自殺敎唆者。Πεισθάνατος と綽名せられた。

原始基督敎は信者に未來の天國を約束するものとして或意味の樂天論であるが、併し現實世界を中心として考ふれば厭世論である。アダム・イヴの墮罪に依つて地上の天國は望まれぬとされる。假令未來の天國、地上の天國の解釋に依つて地上の天國の可能を認めるとなすも、その可能は生るゝより罪の子たる我々自身の力に依るのではない。全く神及基督の贖罪に依つて救はれるのである。從つて文化哲學の上より見れば、吾人の文化活動の可能を否定するものに攝すべきものである。

印度に於いては厭世思想は大に發達した。印度の思想にて厭世的傾向のないものは絕無であるといふて宜しい。佛敎又其例に洩れない。固より基督敎が未來の天國の思想に於いて活路を見出して居る如く、印度に於いては、解脫の思想に於いて徹底厭世論を免れて居る。けれども求むる所を得ざるより得る所の苦（所謂八苦の一なる求不得苦のみを指さず。蓋し八苦はみな廣い意味で求むる所をえざるより出づる苦と考へられるからである）を說くことは深刻を極めて居る。例へば中阿含苦陰經は、「族姓子者。隨其伎術以自存活。或作田業。或行治生。或以學書。或明算術。或知工數。或巧刻印。或作文章。或造毛筆。或曉經書。或作勇將。或奉事王。彼寒時則寒。熱時則熱。飢渴疲勞蚊蛇所螫。作如是業求圖錢財。彼族姓子。如是方便作如是業作如是求。若不得錢財者。便生憂苦愁慼懊惱。心則生癡作如是說。唐作唐苦所求無果。彼族姓子。如是方便作如是行作如是求。若得錢財者。彼便愛惜守護密藏。所以者何。我此財物。莫令王奪賊劫火

燒腐壞亡失」。出財無利。或作諸業而不成就」。彼作如是守護密藏」。若有王奪賊劫火燒腐壞亡失」。便生憂苦愁慼懊惱」。心則生癡作如是說」。苦有長夜所可愛念者彼則亡失。是謂現法苦陰」。因欲緣欲以欲爲本。復次衆生因欲緣欲以欲故。母共子諍。子共母諍。父子兄弟姉妹親族展轉共諍。彼已如是共鬪諍已。母說子惡」。子說母惡」。父子兄弟姉妹親族更相說惡。況復他人。是謂現法苦陰」。因欲緣欲以欲爲本。復次云々」と以下欲望を本とする人生が如何に慘憺たるものなるかを詳說して居る。これ明に財欲とか生命欲とかいふ現世的欲望が欲するがまゝに充されざることを說けるもので、その限り厭世論であること言ふ迄もあるまい。但し佛陀に在つては之は唯現前の事實として示されたので、理論として我々の意欲する所のものが一から十迄達せられないと述べられてゐるのではない。從つて修道求覺の滅道二諦が說かれてゐるのであるが、後來の敎徒の中には種々の思辨や內省に依つて人性邪惡の假定の下に一切の修道の不可能を斷ずる者もでた。其代表者が淨土敎である。

カントの如きも其倫理思想の根柢に厭世論がある。所謂「根本惡 radikaler Böse」の說がそれである。彼は彼の所謂斷言的命令に從つて意欲、行動することが善であると考へて居たのであるが、吾人には性來かゝる道德的傾向に反對する所の傾向もあつて、强さから言へば其方が寧ろ强い。從つて五十年の一生の間に道德的に完全な人間となるやうなことは到底できないと考へてゐた。有名な靈魂不滅の要請は、此論據の下に、一般に道德の可能であるべきための制約として要請せられたのである。

けれども哲學史上其說の徹底せる點にて、且つ影響の大なる點にて、又我々に時代を距ること短き點にて特に注意すべきはショーペンハウエルの厭世論である。ショーペンハウエルの認識論や自然形而上學については已にのぶる所あつたが、彼の厭世論は、其形而上學から自然に出づる結論である。彼の自然形而上學によれば世界の本體は意志である。此意志は時間空間の形式に入つて個體となるが、元來意志であるが故に自己を主張して止まぬ。無機界に於いても有機界に於けると同じく生きんとする意志が各自己を主張し、互に相爭ふ。況んや生物界に於いては一層然りである。しかも意志そのものは盲目であるから終極の目的といふものはない。斯くて我々は求め、喘き、渴き、永劫に苦痛の谷に呻吟するのである。然らば自殺が最後の途であるかといふに、之も許されぬ。蓋し其も亦一の意志のあらはれであるから苦痛の原因であるからである。そこで彼は生存を持續せんとする意志も生命を斷滅せんとする意志も共に斷滅する所の一心境をえて以て一切の苦惱を脫すべしとする。其に二つの途がある。一は藝術に依つて事物の中にプラトーンの所謂イデアを見ることで、

も一つは佛敎や基督敎の聖者達が進んだ捨欲、聖行に依つて事物の中にイデアを見るとである。藝術においては一時的にイデアの世界に住し、宗敎に於いては永久にイデアの世界に住する。イデアを見るとは何ぞ。普通我々の知的活動は意欲生活の手段であるが、かく手段としてゞなく、しかも悟性感性等によらず、知的直觀に依つて事物の永遠の相を見ることである。從つて彼の厭世論も最後に於いて一の主情主義的、唯美主義的、宗敎至上主義的の樂天論的要素を認めて居る。蓋し彼は知性と意志とを全く別視對立せしめたから、かゝる解脫觀は全く意志生活と關係ないやうであるけれど、斯る解脫境を求むる意志の實現は可能であると假定せられて居るからである。

ショーペンハウエルより出で、其厭世論を緩和したる者はエデュアルド・フォン・ハルトマンである。彼もショーペンハウエルの如く世界を苦痛の谷と見る。けれども我々は理性に依つて此苦痛を解脫することが能きる。之には世界そのものに存する漸次的進化の過程を認識して世界そのもの卽神の解脫に寄與することが必要である。之が文化活動であるといふ。卽彼の厭世論は世界を有目的々と見ることに依つて緩和せられて居る。之にはダーウィンの進化論の影響を拒むことが能きない。彼に「ダルヴィニスムスに於ける眞理と誤謬」(一八七五)あるは故なきでない。ハルトマンの如き漸次的進化の可能を認むる學說を改良主義 Meliorismus といふ。

ショーペンハエウルと同樣に、否それ以上に徹底せる厭世論者に猶「世界の知識と本質との矛盾」二卷(一八八〇—八一)の著者ユーリウス・バーンゼン(一八三〇—八一)、「解脫の哲學」二卷(二版、一八九四)の著者フィリップ・メーンレンデル(雅名フィリップ・バッツ、一八四一—七六)がある。バーゼンに於いても世界の本體は意志であるが、其は內部に矛盾を藏し、自ら己と相爭ふ。其故に一方では或者を欲しつゝ、他方では之を欲して居ないといふ結果になる。從つて論理的に不可能なるもの、矛盾が實在の眞理であり、論理的に必然的なること、卽矛盾がないといふことは實在の上では不可能のことである。ヘーゲルの辯證法は矛盾の擧揚を談るが、實在の辯證法 Realdialektik には矛盾の擧揚はない。我々は矛盾の苦痛を脫することは到底できないのである。從つて解脫の希望は一の幻想である。認識に依つて意志を否定するの途も杜絕せられてゐると。又メーンレンデルに依れば、元來一である所の神は「死せんとする純粹意志 reiner Wille zum Tode であつて自ら多くの意志に分裂して死し去つた。斯くて生じた多くの箇體的意志が卽我等でやはり死せんとして努力する。そこで互に相爭ひ、互に力を弱め、漸次死に至ると。彼は職業は商賈であつたが、一八七六年自殺して其說を實現した。

三　樂天論の意義

こゝにいふ樂天論は、上述の如く、至高價値に關する學說に於いて至高價値

とせらるゝものが求めうべしとなすものを指すのであるが、此語も決して古來全く一樣に用ひられたものではない。語源は Optimus て最善を意味し、世界人生の光明面を强く見る考へ方を指すのであつたが、漸次意味を明確にして右樣の學說をいふやうになつたのである。

四　樂天論の史的概觀　樂天論に在つては僅に其重要なる代表者の名を擧ぐるに止める。蓋し倫理學、宗敎哲學等について、積極的にあるべき所の世界を擧示する所の哲學者の大部分は、皆何等かの意味にて樂天論者と稱してよいからである。

先づ希臘人に於いては、ヘゲシアスの如き例外を除いては大部分が樂天論者である。エレア學派プラトーン、アリストテレース、皆然りである。殊にアリストテレースのエンテレヒー論は世界を漸進的に進化するものとする點に於いて然りである。

中世における基督敎の傳播は厭世的傾向を强めたが、併し基督敎の中にも其樂天論的傾向を示す一面もあつた。辯神論 Theodizee と稱するもの之である。此語は神を意味する θεός と正義を意味する δίκη との合成語で、世界及人生に存する惡に對して神を辯護するを目的とする。辯神論の起原は希臘時代、殊にストア學派に於いて已に見らるゝ所であるが、基督敎傳播後は一層基督敎的神の辯護が爲された。

近世に於いては「辯神論」(一七一〇)の著あるライプニッツの樂天論が特色をもつて居る。此書に說かるゝ所に依れば、此世界は神の所造として、總ての可能なる世界の中で最も善いものでなくては能はず之を創造せねばならぬからである。尤も此最善の世界も可能なる世界の中の最善の世界であつてはならぬ。何となれば、若し然らずとせば、神の睿知は之を認識し、又神の善意は之を欲し、其全て絕對に完全無缺だといふのではない。けれども其は世界そのものが有限なるものであるから止むをえぬ。のみならず我々が惡となす所のものも實は我々の考へる程大なるものではない。肉體的害惡も、道德的罪惡も皆堪えゝられる程度のものである。否、寧ろ其は我々がよりよき狀態に進むために必要なる階段であるから、卽善をして在らしむるための惡である。宛かも基督の贖罪はアダムの墮罪に依つて制約せられ、ローマ共和國はセクストゥス・タルキニウスの暴逆に依つて制約せられて居るが如くである。其故に世界の調和は惡の存在に依つて破られはしないと。

カントも先批判期の初には之に從つて居た。「樂天論」(一七五九)は其を代表する。併し後になると彼は此立場を全く放棄して省みなかつた。其故、ライプニッツの樂天論を繼承するものは寧ろヘルデル、レッシングの如き人々である。唯彼等に於いては、進化論的な考が加はつて居る。そして此進化論的樂天論の大規模に現れたのがヘーゲルの哲學である。

五　厭世論及樂天論の批評　以上厭世論及樂天論の諸學說を見る時は、其多くの者に於いて自然哲學、形而上學が其根柢とせられて居ることを發見する。尤も現前の單なる事實に基いて居るものもないではない。殊に厭世論に於いて其然るを見る。蓋し現前の世界及人生が悲愁苦惱の重い雲に閉されて居るといふことは何人も肯ふ所であるからである。然し乍ら一度思を人生の問題に潛め、如何にせば此悲愁苦惱の重雲を拂つて赫々たる天日の下に生くべきか、吾人が希求要望する所の理想界を現實となすべきかといふことになると、吾人は、多くの場合、先づ吾人の努力からは獨立に世界人生は將來如何になり行くであらうか、如何になり行く運命をもてるものかと問ふ。そして存在する所の自然、過去の人間の歷史、及現在の狀態——さういふやうな事柄を客觀的に考察して、或は將來の人類の發展に希望ありとし、或はなしとする。ありとするものが樂天論でなしとするものが厭世論である。其故に勢ひ自然哲學的形而上學が厭世論及樂天論の基礎に取られる傾向がある。然るに自然哲學的形而上學說が基礎に置かれるといふ事は、世界人生の進行は豫め定つて居るものであると假定せられることを意味するのである。卽所謂決定說 Determinismus であることを意味するのである。決定說の中、自然的因果性の一切萬象を支配せることより世界人生の過程が豫め決定せられおることを說くもの、卽總ては宿命 Fatum の命ずる所であると說くものを宿命說 Fatalismus といふ。けれども決定說を基礎として果して人生の眞義を明かにしうべきか。人生の人生たる所以は其文化的活動に在り、文化的活動は吾人の意志、行爲に依る自然の理想化であるが故に、假令其理想化の進むべき路は理論上定つて居るとしても、理想化そのものは、意志の發動及實行が此路をとる限りに於いて可能である。而して吾人の經驗的意志が果して此路をとるや否やは決定せられて居ることではない。已に決定せられて居るものであるならば、何ぞ、私共は、ことさらに、吾人の活動を甲より乙に向くるため、說敎、訓誡、警告等の敎育的努力をする必要があらう。又三思三省自ら良心に問ふの修養をなす必要があらう。總てを行くがまゝに行かしむれば足る譯である。けれどもさうできないといふのは全く、吾人の意志活動の方向が、神とか自然とか宿命とかに依つて豫め決定せられて居ないと考へられるに依る。是に於いて、決定論に對して非決定論 Indeterminismus と稱する學說が對立してくる。

決定論を根柢として厭世論も存する如く、非決定論を基礎としても厭世論も樂天論も存しえよう。けれども何れかと言へば非決定論は後者となる傾向を多く有つて居る。蓋し吾人の意志決定に於て左右しうる範圍內にて至上價値を立つれば、吾人は之を實現しえて滿足なる生を送りうるからである。がそれよりも重要なるは非決定論は文化哲學成立の暗默の假定であるといふことである。何

となれば、已に人生の進行の筋道が始から定つて居れば何等理想化活動を容すの餘地を存しないからである。假令將來何億萬年かの後に極樂淨土のやうな世界が實現しても、それは自然が至るべき所に至らしめたので、人間が之を將來したのではなく、從つて文化ではない。其故に文化の概念は至上價値の實現であるが、それは自由意志に依る至上價値の實現でなくてはならない。依つて又特に文化哲學上で樂天論といふ時は自由意志の認容による樂天論でなくてはならぬ。此事は現實の世界及人生を邪惡不完全の世界と見、且つ吾人の意志活動から獨立に考へられた自然の進行に滿足できぬ見解を懷いた時、別して顯著に示されるものである。蓋しその場合には至上價値の實現は唯自由意志による吾人の活動の一途に依つてのみえられるからである。フィヒテがカントの自由意志の論證に接して歡喜したのは此好例である。

此意味にて、文化哲學の重要なる問題として意志自由の問題が存して居る。

六　意志自由の問題　自由意志の問題の核心は自由なる意志は存在するか否かである。此問題の起原は比較的近い。古代に於いては殆んど注意せられず、僅にエピクロス派に於いて、行爲の責任を說明するためには意志の自由を主張せねばならぬといふことが說かれたのみである。中世の基督敎倫理學に至つて始めて此問題が重要視せられて來た。アウグスティーヌスの如きは之を否定する傾向が强かつた。人間はアダム、イヴの墮罪に依つて罪を犯さざるの能力 posse non peccare を奪はれ、罪を犯さゞるをえないこと non posse non peccare となつて了つた。けれども彼の後スコラ哲學に至れば一般に意志の自由が容認せられた。アクィーノのトーマスに於いては、意志は幸福及善の究意目的に依つてこそ規定せらるれ、之に達する樣々の途の孰れを擇ぶべきかに就いては、自由の選擇がありとする。ドゥンス・スコートゥス（一二六五或は七四―一三〇八）も亦然りで、意志の決定は習慣、傾向等に依つて影響は受けるが、之に依つて定命的のものといふことにはならぬといふ。近世に於いてはスピノーザが決定論者の尤なるものである。ライブニッツにもその傾向が存する。單によりよき動機に支配せられるといふ意味のものばかりでなく、豫定調和說の如きは世界の運行の筋書を必至的のものと見たやうに考へしめる。英國の十七八世紀の哲學者にも決定論者が少なからずある。ホッブス、ヒューム、プリーストリー（一七七三―一八〇四）の如きである。殊にプリーストリーの「哲學的必然性論」（一七七七）の如きは、「事實行爲せしが如きより異つて行爲しうべきであつた」といふ思想は一の幻想で全く無意味だと極言して居る。之に反して同じ頃の理神敎者の信條の中には、靈魂の不滅及神の存在と並んで意志の自由の一項が重大視せられてゐる。彼等は好んで之を譬喩を以て證明せんと企てた。例へばテ、ンス（一七三六―一八〇五）の如きは、之を鋼鐵發

條に譬へて居る。鋼鐵發條がどの方向に働くかは偶然の事情で決るとしても、働く力は發條に固有のものである。のみならず、働く方向も亦意志自身に依つて決定せられるのであるといふ。

自由意志問題の歴史に於いてもカントの位置は特記に値する。之に關係深きは第一批判と第二批判、殊に後者である。彼も當時の一般の哲學者のやうに形而上學の主要問題を靈魂不滅、神の存在、意志の自由の三問題とし、其等の各を主として論ずる合理的心理學、宇宙論、及神學の三部門の學としての可能を先づ第一批判で論じたのであるが、其中自由意志を論じたのは「純粋理性の二律背反」中の第三の二律背反に於いてゞある。彼は、此處に於いては、因果系列の無限の連續は決して無制約的初發原因としての意志の存在と矛盾するものではないといふことを述べて居る。蓋し因果律の支配は全く現象界に限られるが故に、本體卽物自體の世界に於いては自由を許しうるからである。卽消極的に意志の自由の可能を示したのである。然るに第二批判はかく消極的に其可能を示されたる自由意志の存在の更に必然的なることを積極的に示さんとする。彼は先づ「道德形而上學原論」以來の思索徑路に從つて先づ道德律の如何なるものなるかを明かにし、次に此道德律の事實的存在を根據として意志の自由ならざるべからざることを論ずる。彼に設問して曰く、「格率の單なる立法的形式のみが意志の充分なる規定根據たることを前提して、其形式に依つてのみ規定せられうる意志の性質を見出せ」と。そして自ら答ふらく、法則の單なる形式は單に理性に依つてのみ考へられ、從つて決して感官の對象ではない。其故に又現象に屬しないからして、意志の規定根據としての形式の表象は因果の法則に從ふ自然界の出來事の凡ゆる規定根據とは異らざるを得ない。何者、後の種類の規定原理はそれ自身皆現象界に屬するからである。所で此立法的形式以外如何なる意志の規定根據も意志にとつて法則たりえないとしたならば、斯樣な意志は現象界を支配する自然法則卽因果律からは獨立でなければならぬ。然るに斯る獨立性を嚴密な意味で自由と謂ふ。其故に格率の單なる立法的形式のみを法則とする意志は自由意志であると。卽カントは非決定論の代表者と目すべきである。シェルリンク、ショーペンハウエルも意志の自由を主張する。が、ショーペンハウエルのは自由の意味は道德などゝの關係をすつかり稀薄にするやうな意味に變つて居る。其後ロッツェも非決定論者であつた。道德上の責任は意志の自由を假定しなくては說きえぬとする。十九世紀の中葉以後は自然科學が勃興したゝめ、意志作用も因果律の支配を脫する能はずとの意見が廣く行はれるやうになつたが、併し非決定論者もなくなつたのではなく、最近又增加して居る。

最近の文獻ではヴィンデルバントの「意志の自由に就いて」(一九〇四)、ローラントの「意志の自由と其反對者」(一九〇五)、リッブスの「意志の自由の問題」(一九一二)、ドリーシュの「自由の問

題」(一九一七)、メッサーの「意志自由の問題」(一九一八)等がある。ヴィンデルバント、リップスは決定論、ローラントは非決定論に類し、ドリーシュは之を不可解決の問題とする。メッサーのは決定論及非決定論の客觀的叙述である。

猶十九世紀の佛蘭西哲學中カント系統の哲學では、科學と道德、從つて又自然因果律と意志の自由との對立の問題が中心とせられて居、之が佛蘭西のカント哲學の特徴を爲してゐる。

最後に余自身はカント、ロッツェ等が道德の成立のために自由意志の假定を必要とするといふ考に贊する者である。けれども此論證は論理的に自由意志が道德概念の制約であることを證明するのみで、其存在を證明するか否かは疑問である。私は其は寧ろ一の信 Glauben であらうと考へる。又カントでは其は單に道德概念の論理的制約であるとせられて居るが、私は廣く文化概念の論理的制約であると考へる。

第四節　形而上學結論

一　以上の總括　以上、私は、世界及人生の一切の知識の內容上の統一としての形而上學を、先づ自然哲學的諸學說、文化哲學的諸學說の二類に分け、次に更に其等の各を細目に分つて論じて來た。そして、文化哲學的諸學說を論ずるに先ち、特に文化哲學の基礎理論なる一項を設け、自然哲學的諸學說の維持すべからざることを論じて置いた。

之に依つて見れば、私は或は文化哲學的學說中の或者に贊するものであるが如き觀を與へたかも知れぬ。併し乍ら、以上文化哲學的學說として述べたる所のものに私は無條件的に贊成するものではない。

其理由は次の如くである。凡そ形而上學上の學說として提出せられる以上、其は形而上學の課題たる世界及人生についての一切の知識、學の內容上からの統一といふ任務を果さねばならぬ譯である。唯自然哲學的學說に於いては、物質とか精神とかいふ自然的存在を以て、或は之が實體化と考へらるゝ神とか物自體とかいふものに依つて知識を統一せんとするに對して、此は、理想的に言つて何人の意志を最も重んずべきか、或は究竟目的を何と見るべきか、とにかく「あるべきもの」に依つて之を統一せんとするに依つて文化哲學的學說と稱せらるゝの差あるのみである。然るに上に前節第二項及第三項に叙述したる諸學說、卽個人主義、社會主義(民主々義)、物本主義及人本主義の諸學說は此意味にて說かれざることが屢々ある。否、多くの場合に於いては唯特殊科學上の學說として說かれるのである。例へばカントの如きは、人格本位の學說を持したのであるが、之は決して人

格の概念の下に自然物の概念を攝したのではない。其故に彼の、人格本位の學說、いはゞ人格主義は倫理學上の知識を統一しはするが、自然科學上の知識は統一せずに居る。其故に一口に個人主義、社會主義(民主々義)、物本主義及人本主義といつても、其多くは形而上學上のそれとは言ひえない。然らば形而上學說の學說としての其等の學說にはいかなる條件が具備して居なくてはならぬか。惟ふに其は、其等の學說の基礎概念たる文化の概念が、何等かの意味で自然についての知識をも統一する所のものでなくてはならぬといふことである。然らば其は如何なる意味にて自然についての知識をも統一することが能きるか。私の考では、それには所謂自然は自然科學の方法に制約せられた世界であつて、實在そのものを示すものでないと見るのが最も妥當な考であると思ふ。其意味は、凡そ實在の眞相は、之を全體として眺めた場合に於いては、決して吾人の文化活動と切離して考へられるものではない。文化活動は自然の理想化である。して見れば、文化活動から切離して考へるといふことは、其理想化の一面を捨象して實在を見るといふ結果になる。換言すれば元來人間の活動から切離して考へれば唯其一面のみしか視野に入らぬ所の實在を、ことさらに、其一面だけ見るといふ結果になるといふことである。此考よりすれば、吾人は、敢て吾人の文化活動から獨立に實在を見てゆくといふ見方が、特殊科學としての自然科學の見方として存しうることを拒む譯ではないが、しかも此見方のみでは實在の全面を示さずとして、吾人の文化活動と關係させて之を見てゆく見方も必要であることゝなる。例へば原始人の群居生活を說明するに十分であらうが、之に依つて實在としての彼等の全面を十分に理解したと言へるであらうか。我等比較的文化の進んだ民族が彼等と接觸すれば、彼等自身其群居生活を純化しようと計るであらうし、又我等も彼等をして一層我等に近づけたいと計るであらう。之卽文化活動である。して見れば、此文化活動に依つて高上せしめらるべき一面を考へなくては、我等は原始人を十分に理解したと言へぬであらう。かくて我々がある所の世界といふは、あるべき所に在らしめられる一面を捨象して考へられた世界と言はねばならぬ。自然の運行によつて來るべき將來といふは、若し我々にして文化意識なく、文化活動なくんば、來るべき將來に他ならぬ。其故に、此意味に於いて私は自然の概念は、實在の認識としては、文化の概念に補充せられて始めて妥當なるをうると思ふ。文化の概念が自然についての知識をも統一するは此意味に於いて可能である。然るに又此事は、之を他面より考ふれば、文化の概念も、自然の概念に補充せられて始めて妥當なることを示すものである。蓋し、所謂至上價値として示さるゝ所のものは、成程吾人の意志活動に依る理想化の產物であるが、何の理想化であるかと言へば自然の理想

化であるからである。例へば、大理石を材料とする立派な女神の彫像が藝術家の手に依つて出來上つたとする。此藝術品が藝術品たるの價値は該彫像に示された女神のイデーにも存しようが、もつと具體的に言へば、其大理石を材料として此女神のイデーを表現した所に存するのである。卽我々は此藝術家の手にかゝらなかつたならば單なる他の大理石塊と形に於いて變らなかつたであらう所の一の大理石塊が、微妙なる鑿の力に依り、優雅な神々しい姿を示すに至つたことに驚嘆する。もつと卑近な例を取ると、電信電話等の發明か文化たるの理を知らんとすれば、勢ひ斯る通信機關が發明せられぬ前の通信の方法に及び、更に原始人の意志傳達の方法に及ぶであらう。而して斯る特殊の方法が發見せられなかつたならば、一日數十里の外に及ばなかつた所のものが一瞬時に何千里に及ぶことを考へて、其處に文化の高上を見る。其故に、文化といふ概念も自然の概念に補充せられて始めて完全に理解せられるのである。そして若し吾々にして文化哲學的學說を以て採用しうべき形而上學說とならさんとならば、其は文化の概念と自然の概念とを上の如き相關々係に於いて見るといふ條件の下に於いてのみ可能である。蓋しさうでなくては、文化哲學的學說に於いて一切の知識、學を內容上統一するといふことは不可能であるからである。斯く私は考へる。

從つて其は文化哲學的學說と稱しても差支へないが、又自然哲學的學說と稱しても差支へないのである。蓋し其考へ方に於いては、自然といふも自然科學がいふやうな自然に非ず、文化といふも倫理學者等のいふ文化に非ず、自然は文化と一體となつて、自然、文化未だ相分れざる以前の實在の眞風光を示すからである。自然は我と一體となり、客觀と主觀とは融合し、唯々唯一無二の眞實在の玄々微妙の動轉あるのみとならう。

二、唯一眞實在の概念　然らば斯くの如く物我一體、主客融合、存在不許不未分の眞實在の概念を示せ。かく讀者は要求せられるに相違ない。けれども之を示すことは今の私には能きない。又其は偉大なる哲學者といへども唯極めて概略的に、或は象徵的に示しうるのみであらう。蓋し其には人類の長い歷史の間に獲得し來れる總ての斷片的知識及系統的知識を打つて一丸となし、箇物の中に全體を視、全體の中に箇物を見、物に觸れて行あり、行の中に存在の響をきくといつたやうな複雜した姿を示す所の概念であるからである。實在の此複雜な姿を示すには小さなる經驗的自我に跼蹐するやうな理知では駄目である。廣大無邊なる實在の永遠より永遠に亘つて流るゝ姿を、そのものと一如して捕ふる大なる理知の人であらねばならぬ。孔子五十にして曰く、「心の欲する所に從つて矩を踰へず」と。又佛典に說いて言はく、「應に住する所なくして其心を生ずべし」と。正に斯くの如く、天地の規矩と一如し、萬法と共に動いて、しかも己の位を維持する底の大器量人であらねばならぬ。

しかも斯る概念を把住せる人にとつては其概念は單なる概念なるに止らずして、常恒に其内外の生活を律し、應機接物、任運に、自然と冥合せる大神境を打出し來るであらう。禪門の所傳に依れば、「釋迦牟尼佛見明星悟道して曰く、我と大地有情と同時に成道す」と。我國に於ける曹洞の四祖瑩山紹瑾禪師之を「傳光錄」に釋して曰く、「いはゆる我といふは釋迦牟尼佛にあらず。釋迦牟尼佛も此我より出生し來る。たゞ釋迦牟尼佛出生するのみにあらず、大地有情もみな之より出生す。大綱をあぐるとき衆目盡くあがるが如く、釋迦牟尼佛成道するとき、大地有情も成道す。たゞ大地有情成道するのみにあらず、三世の諸佛もみな成道す。云々」と。言幾多の解釋を容るゝの餘地あるべしと雖も、文化と自然と融合せる、一大自覺の對境をさして言つたものと解すべきではあるまいか。

自ら其概念を開展することはしないけれども、いさゝか其向ふべき方向を示して形而上學の結論とする。

哲學概論索引

索　引

(五十音順. 但し細則は清音, 濁音, 半濁音, 長音, 促音, 拗音の順とす.)

甲

人　名　索　引

ア

アイザーク Isaak von Stella 217.
アイスラー Eisler 11, 182, 422.
アヴェナリウス Avenarius 183, 186, 192, 241, 292, 308.
アウグスティーヌス Augustinus 96, 540.
アグリッパ Agrippa 158, 299.
アナキサゴラス Anaxagoras 151, 343-4, 388.
アナクシメネース Anaximenes 344.
姉崎博士 378.
アーノルト Arnoldt 197, 201.
アムブロシウス Ambrosius 97.
アリストテレース Aristoteles 18-21, 23, 25-6, 39, 47, 71, 131, 138, 155, 345, 368, 388-90, 398, 407, 416, 497, 536.
アリスティデス Aristides 18.
アリスティッポス Aristippos 514.
アルキメデス Archimedes 47.
アルケシラオス Arkesilaos 299.
アルトゥジウス Althusius 465, 468.
アレキサンダー大王 Alexander the Great 20-1.
アレキサンダー Alexander 163, 183, 297.
アンセルムス Anselmus 24, 78, 158.
アンティオコス Antiochos 131.

イ

イエス Jesus 24, 409, 527.

ウ

ウフェス Uphues 155.
ヴント Wundt 10, 30, 149, 325, 336, 363, 368, 378, 381-2, 402-3.
ヴィテロ Witelo 27.
ウィリアム・オッカム William Occam 159.
ウィルヒョー Virchow 227, 354.
ウィルボア Wilbois 226.
ヴィンデルバント Windelband 8, 11-2 31-2, 87, 115, 120, 129. 167, 276-7, 279-80, 282-3, 320. 327, 336, 342, 424-5, 427, 433-5, 497.
ヴェーバー Weber 401.
ヴュルツバッハ Würzbach 461.
ヴォルテール Voltaire 351, 468-9.
ヴォルフ Wolff 28, 134.

エ

エネシデームス Aenesidemus 158, 297-8.
エピクテート Epiktet 21.
エピクール(エピクロス) Epikur (Epikuros) 21, 345. 513-4, 518.
エムペドクレース Empedokles 151, 343-4, 388, 504.
エラスムス Erasmus 498.
エルザレム Jerusalem 11-2, 119, 378.
エルドマン Erdmann 149, 267
エルハルト Simon Erhardt 7-9.
エンゲルス Engels 102, 412.
エックハールト Eckhart 159, 218.

オ

オイケン Eucken 120, 425, 431.
オイデモス Eudemos 156.
オーウェン Owen 504.

大正
14. 1. 6
内交

オストワルト Ostwald 120, 293, 343, 356, 357, 421.
オルバッハ Holbach 351-2.

カ

カー Carr 226.
カイゼルリンク Kayserlingk 2, 221, 425.
カイベル Keibel 243.
カウフマン Kaufmann 243.
カウツキー Kautzky 508.
ガザ Gaza 498.
カッシラー Cassirer 115, 120, 275.
迦毗羅仙人 396.
ガリレイ (ガリレオ) Galileo Galilei 27, 54-5, 80, 176, 275, 349.
ガルヴァニ Galvani 350.
カルネアデース Karneades 299-300.
ガレヌス Galenus 156-7.
ガンヂ Gandhi 440-513.
カンパネラ Campanella 491.
カント Kant 26, 29, 39, 50, 55, 73, 80-1, 94, 123, 138, 146, 164, 219-20, 248, 252, 255-8, 260, 263, 274, 276, 282, 303-4, 313, 319-20, 328-30, 335, 373, 384, 416, 419, 423-4, 440, 450, 512, 520, 523, 532, 537, 544-5.
ガッサンディ Gassendi 350.

キ

キルヒホッフ Kirchhoff 293.
キルヒマン Kirchmann 12, 183-4, 336.
ギンケル Kinkel 275, 329.
キュルペ Külpe 11-2, 172, 174, 243, 400, 450.
ギョーテ Goethe 89, 104-5, 278, 374, 504.
ギョールラント Görland 329.

ク

クセノークラテス Xenokrates 131.
クセノファネース Xenophanes 69, 410, 413.
クライビッヒ Kreibig 293.
グランヴィール Glanville 302.
クリスチァンセン Christiansen 118, 281-2, 313-4, 319-21, 330.
グリム兄弟 Grimm 521.
グリーン Green 267.
クロイソス Kroisos 16.
グロチウス Grotius 465, 499.
クローツェ Croce 267.
クローナー Kroner 226, 232, 374.
クロポトキン Kropotkin 505, 510.
クロームウェル Cromwell 467.
桑木博士 129, 324.
クンツェ Kuntze 281.

ケ

瑩山紹瑾禪師 550.
ゲオルギウス Georgius von Trapezunt 498.
ケプレル Kepler 27.
ケーベル Koeber 12, 378.
ゲーリューサック Gay-Lussac 47.
玄奘 170.
ゲンティーレ Gentile 267,

コ

コイゲン Koigen 422.
孔子 549.
虎關 399.
喬答摩 99.
護法 170.
コペルニクス Kopernikus 27, 66.
コーヘン Cohen 35, 94, 115, 120-1, 123, 149, 155, 167, 198, 201, 206, 246, 272, 274-5, 309, 329, 331, 411, 511-2.
ゴーリキー Gorky 62.
コリンス Collins 411.
ゴルギアス Gorgias 153, 297.
コルネリウス Cornelius 9, 241.
コーン Cohn 282-3, 320.
コンディヤック Condillac 183,
コント Comte 5, 136, 411, 417.

サ

祭皮衣仙 59.
左右田博士 493.
サロモン Salomon 329.
サンシェ Sanchez 300.
サンタヤナ Santayana 163, 183.

シ

シグワルト Sigwart 276.
島薗順 396.
シジウィック Sidgwick 336-7.
シラー Schiller, F. C. S. 54, 163, 284, 288, 294.
シルレル Schiller, F. 104.
成吉思汗 527.
ジムメル Simmel 332, 422, 493.
釋迦(牟尼佛) 41, 550.
シャスラー Schasler 267.
シャナカ王 59.
シャフツベリー Schaftesbury 528.
シャロン Charron 300.
朱晦庵 397.
シュタウディンゲル Staudinger 440, 448, 478.
シュタイネル Steiner 460.
シュタイン Stein 455.
シュタムラー Stammler 275, 329, 493,
シュタッドラー Stadler 206.
シュテルンベルヒ Sternberg 9, 35, 130.
シュトラウス Strauss 267, 411, 456.
シュトゥルーフェ Struve 10.
シュトゥリュンペル Strümpell 10.
シュプランゲル Spranger 327.
シュミット Kaspar Schmidt 450, 462.
周茂叔 36.
シュライエルマッヘル Schleiermacher 226, 521.
シュライデン Schleiden 354.
ジューランクス Geulincx 393.
シュリック Schlick 183, 188.
シュルツェ Schulze 354.
シュレーゲル兄弟 Schlegel 521.
シュワン Schwann 354.
シュッペ Schuppe 149, 240, 242.
ジェームズ James 163, 192, 284-5, 341, 400.
ジェームズ二世 James II. 467.
シェルリンク Schelling 9, 30, 161, 219, 220, 227, 258, 262-3, 373-5, 521, 543.
商羯羅主 170.
清辨 170.
ショーペンハウェル Schopenhauer 30, 40-1, 106, 112, 161, 205, 219, 220, 320, 377, 407, 421, 455, 501, 543.
ジョーンズ W. Jones 162.

ス

スアベディッセン Suabedissen 7-9.
スコートゥス Duns Scotus 54, 158.
スターリング Stirling 267.
スミス Smith 489.
ステーンベルゲン Steenbergen 226.
ストロング Strong 183.
スピノーザ Spinoza 26-7, 61, 80, 99, 160, 194 262-3, 374, 413-4, 450, 465, 541.
スペンサー Spencer 73, 142, 504.
スポールディング Spaulding 163, 183.

セ

セオフラスト Theophrast 345.
セクストゥス.エムピリクス Sextus Empiricus 130, 158, 297, 299.
世親 169, 396.
セネカ Seneca 21.
セラース Sellars 183.
セレーナ(=シャルロッテ) Serena (Scharotte) 349-50.

ソ

足目 169.
ソークラテース Sokrates 17-20, 35, 40, 54, 75, 154, 295, 334, 426, 450.
ソルデルン Schubert-Soldern 242.
ソロン Solon 16.

タ

道昭 170.
ダーウィン Darwin 354, 504.
高楠博士 396.
高山樗牛 461.
ターラナータ 393.
ダランベール D'Alembert 302.
タルキニウス Tarquinius 537.
ターレス Thales 91, 93, 344.
ダンテ Dante 498.

チ

陳那 170, 396.
中巖 399.
チェンバレン Chamberlain 425.

ツ

ツィーエン Ziehen 183, 187.
ツィツェロ Cicero 21, 131.
ツェノー Zeno 70, 75-6, 413.
ツェラー Zeller 163, 267.
ツェルゾス Celsus (Kelsos) 157.
ツォルベ Czolbe 355.

テ

程伊川 397.
程明道 398.
テオドロス Theodoros 514.
テオフラストス Theophrastos 156.
デカルト Descartes 27, 40-1, 62, 80-1, 160, 197, 275, 301, 391-2, 450.
テテンス Tetens 541.
デーモクリトス Demokritos 152, 175, 342, 344-5.
テルトゥリアヌス Tertullianus 158.
テンニース Tönnies 522.

ディデロ Diderot 351, 353, 469.
ディートリッヒ Dietrich 27.
ティモン Timon 158, 297.
ディルタイ Dilthey 325-6.
ティンダル Tindal 411.
デューイ Dewey 284, 288.
デューリンク Düring 186, 457.

ト

ドイセン Deussen 12, 378.
トーマス Thomas Aquinas 24, 158, 541.
トーランド Toland 349, 411.
ドリーシュ Driesch 379-80, 543-4.
ドールトン Dalton 360.
トルストイ Tolstoi 440, 595, 513.
ドルネル Dorner 9.
トレミー王家 Ptolemaios 21.
トレルチ Tröltsch 282.
ドレーク Drake 163, 183.
トレンデレンブルク Trendelenburg 196-8, 403.
トゥキディデス Thukydides 16.

ナ

中江兆民 4.
中江藤樹 107.
ナトルプ Natorp 9, 120-1, 130, 141, 155, 275, 329, 473, 523, 525
ナポレオン Napoleon 527.

ニ

ニコラウス.デ.アウトリクリア Nikolaus de Autrikuria
ニコラウス.フォン.クーエス Nikolaus von Kues 275.
西周 36.
ニータンメル Niethammer 267.
ニーチェ Nietzsche 89. 123, 162, 413, 422, 425, 459, 454, 461-2, 525.
ニュートン Newton 27, 45, 50, 83, 275.

ネ

西 寧一山 399.
ネルソン Nelson 120.

ハ

ハイデンライヒ Heidenreich 10.
バイロン Byron 58.
バウエル Bauer 413.
バウア Bauch 120, 281, 320.
パウルセン Paulsen 9, 12, 118, 130, 335-6, 282, 416, 522.
バークレー Berkley 89, 160, 230-1, 233-4, 236, 238, 240, 302, 369.
芭蕉 89.
パスカル Pascal 301.
ハートリー Hartley 350.
ハルデンベルク Hardenberg 521.
ハルトマン E. von Hartmann 155, 162, 198, 207, 379, 400, 534.
ハルトマン. Nicolai Hartmann 275.
パルメニデース Parmenides 69, 75, 257, 341, 344, 410, 413.
バーンセン Bahnsen 535.
幣茶尸訓 396.
バックル Buckle 351.

ヒ

ピーアス Peirce 284-5.
ビスマルク Bismark 527.
ピタゴラス Pythagoras 15, 23, 41.
ピトキン Pitkin 183.
ビネ Binet 402.
ピロン Pyrrhon 158, 297.
ビュヒネル Büchner 354-5.
ヒューム Hume 160, 191, 237, 302, 541.

フ

ブカナン Buchanan 465.
福澤諭吉 4.
フーゴー Hugo 159, 218.
ブートルー Boutroux 221.
プライデラー Pfleiderer 267.
プラトーン Platon 11, 17-20, 23, 25, 39, 47, 89, 130, 138, 154, 194, 275, 290, 345, 364, 388-90, 407, 416, 420, 426, 497, 536.
フランクリン Franklin 93.
プラット Pratt 183.
フーリエ Fourier 491.
ブリークレブス Brieglebs 10.
フリシャイセンケーラー Frischeisen-Köhler 326.
フリース Fries 161, 320.
プリーストリー Priestley 541.
ブルトゥス J. Brutus 465.
プルードン Proudhon 451.
ブルーノー Bruno 26, 54, 349, 411, 413-4.
ブルックハールト Burckhardt 447.
プレトン Plethon 498.
ブレンタノー Brentano 120, 317.
プロクロス Proklos 23.
プロタゴラス Protagoras 153, 295, 297.
プロティノス Plotinos 217, 368, 416.
フック Hooke 349.
フッサール Husserl 120, 150, 304, 317.
ファイヒンゲル Vaihinger 50, 120, 197, 201, 247, 269, 284, 288, 292, 294, 502.
フィチノ Ficino 498.
フィゲンス Huyghens 47.
フィヒテ Fichte 26, 30, 55, 61, 83, 219-20, 258, 260-1, 263, 373, 375, 385, 450, 491, 521, 523, 540.
フィローン Philon 23, 47, 157.
フィッシャー Fischer 115, 163, 197, 201, 267, 276, 456.
フェヒネル Fechner 379, 388, 402.
フォイエルバッハ Feuerbach 267, 411-2.
フォークト Vogt 354-5.
フォルケルト Volkelt 150, 202, 330.
フォールベルク Forberg 267.
フォールレンデル Vorländer 275.

ヘ

ヘゲシアス Hegesias 514, 530, 536.
ヘーゲル Hegel 4, 30, 34, 83-4, 116, 136, 161, 258, 261, 264, 267, 331, 373, 375, 521.
ベーコン(フランシス) Francis Bacon 27, 288, 73, 79-80, 160, 348.
ベーコン(ロージャー) Roger Bacon 73, 79-80, 160, 348.
ペスタロッチ Pestalozzi 525.
ペトラルカ Petrarca 53, 498.
ヘーフレル Höfler 317.
ヘーラクレートス Herakleitos 69, 116, 151, 193, 298.
ペリー Perry 163, 183.
ペリクレス Perikles 16.
ヘリゲル Herrigel 282.
ベール Bayle 301.
ベルグソン Bergson 88, 116, 163, 192, 221, 225-6, 378.
ヘルシェル Herschel 80.
ヘルツ Hertz 198, 359, 403.
ヘルデル Herder 374, 537.
ヘルバルト Herbart 7-9, 30, 136, 196, 320, 526.
ヘルムホルツ Helmholtz 162, 227, 269, 320, 354.
ペレイラ Pereira 392.
ヘロドトゥス Herodotus 16.
ベンタム Bentham 515, 517.
ベック Beck 206.
ヘッケル Häckel 356-7.
ベッサリオン Bessarion 498.
ヘッセン Hessen 282.
ベッヘル Becher 400.

ホ

ポアレ Poiret 301.
ポアンカレー Poincaré 65, 216, 293, 312.
鳳潭 170.
ボードレール Baudelaire 58.
ボナヴェンチュラ Bonaventura 159.
ホヒーウェル Whewell 80.
ボルツァーノ Bolzano 162, 316-7.
ホルト Holt 183.
ホルネッフェル Horneffer 460.
ポーロ Paul 24, 97.
ボッカチオ Boccaccio 498.
ホルバァハ Holbach 517.
ホップス Hobbes 28, 183, 348-9, 450, 465. 541.

マ

マイノング Meinong 150, 317.
マイモン Maimon 255, 304.
マイヤー Mayer 320, 354, 359, 456.
マルヴィン Marvin 183.
マルクス Marx 102, 108, 413, 440, 489.
マルサス Malthus 506.
マルティー Marty 317.
マールブランシュ Malebranche 394-5.
マックタガールト Mc. Taggart 267.
マッハ Mach 183, 186-7, 241, 284, 292-3, 308.

ミ

ミル(ジョン.スチューアート) J. S. Mill 80, 185, 284, 516.
ミル (ジェームズ) James Mill 516.
ミレー Millet 104.
ミッシュ Misch 326.
ミューラー Müller 177, 354.
ミュンスターベルヒ Münsterberg 282.
ミュンツェル Münzer 508.

ム

無著 169.

メ

メディチ Medici 498.

馬鳴(メメウ) 414.
メランヒトン Melanchthon 498.
メーリス Mehlis 282.
メリッソス Melissos 413.
メルゼンヌ Mersenne 176.
メーンレンデル mainländer 535.
メッサー Messer 172, 544.

モ

モーア Moore, G. E. 163, 183, 290.
モーア Moore, Thomas 491.
モーク Moog 422.
モハメット Mohammed 440.
モーパッサン Maupassant 494.
モレショット Moleschott 354-5.
モンテギュー Montague 183.
モングレ Mongre 400-1.
モンテギュー Montague 183.
モンテスキュー Montesquieu 468-9, 472.
モンテーヌ Moutaigne 300.

ヤ

ヤコービ Jacobi 374.

ユ

ユィーベルヴェッヒ Ueberweg 184, 268, 364, 422, 425.
ユエー Huet 301.

ヨ

ヨハネ John 24.

ラ

ライニンゲル Reininger 241.
ライヒリン・メルデック Reichlin-Meldegg 10.
ライプニッツ Leibniz 27, 50, 89, 160, 195, 275, 341, 363, 371-2, 407, 450-1.
ラベイッソン Ravaisson 221.
ラインホールド Reinhold 9, 148, 260, 309.
ラグ王 Lagu 530.
ラシェリエ Lachelier 221.
ラスヴィッツ Lasswitz 206.
ラース Laas 183-4.
ラスク Lask 87, 120, 215, 281-2, 319, 323, 327, 330, 416, 434-5.
ラブジョイ Lovejoy 183.
ラプラース Laplace 50.
ラファエル Raphael 429.
ラマルク Lamarck 504.
ラメトリー Lamettrie 351, 361, 518, 518.
ランゲ Lange 163, 198, 268-9, 272, 331, 343, 346, 353, 402, 480, 482, 510-1.
ラッセル Russel 65, 120, 163, 183.
ラッド Ladd 335-6.

リ

龍樹 169-70.
リチュル Ritschl 454.
リービッヒ Liebig 354.
リープマン Liebmann 8, 163, 268-9, 271, 330, 335-6, 373.
リーベルト Liebert 226-7, 288, 324, 329, 373, 420.
リール Riehl 205, 210, 268, 320, 456.
リンデ Linde 422.
リッケルト Rickert 86-7, 120, 226, 231, 283, 309, 312-3, 318, 320, 323, 331, 403-4, 433.
リップス Lipps 543-4.

ル

ルギエロ Ruggiero 288.
ルクレティウス Lucretius 348.
ルケ Luquet 226.
ルソー Rousseau 40, 465, 468-9, 471-2, 519-20.
ルヌービエ Renouvier 8.
ルッテル Luther 97, 498.

レ

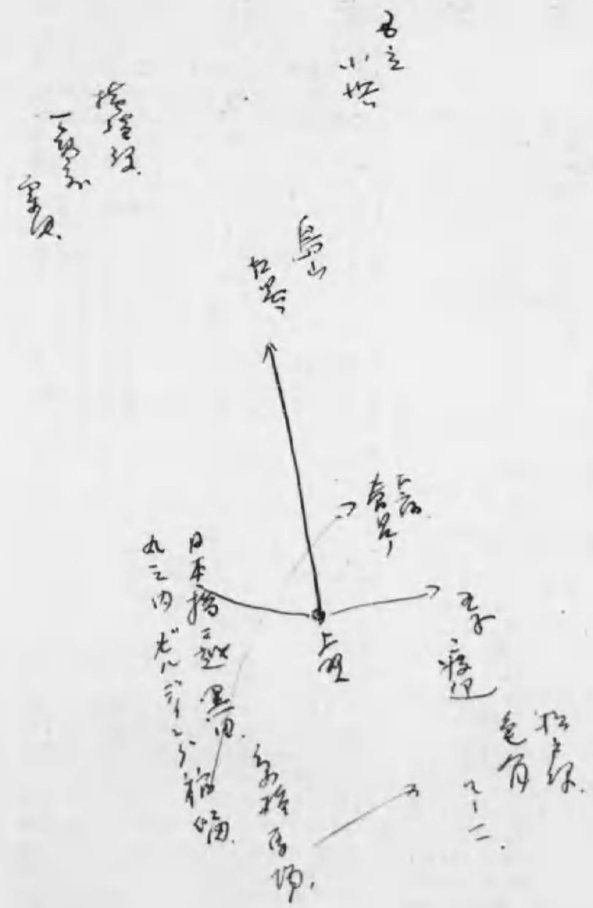
レー P. Ree 457.
レオナルド Leonardo 27.
レオン Leon 15.
レーセル Leser 282, 422.
レーニン Lenin 527.
レッシング Lessing 374, 537.

ロ

ロア Le Roy 226.
ロイキッポス Leukippos 342, 344-5.
ロスキー Losskij 11, 227.
ロージャース Rogers 163, 173.
ロダン Rodin 104.
ローム Hieronymus Lorm 530.
ローラント Rohland 543-4.
ロンブロゾー Lombroso 429.
ロック Locke 29, 39, 160, 179, 238, 302, 465-6, 468, 515.
ロッツェ Lotze 149, 162, 209, 227, 276, 378, 402, 456, 544.

ワ

ワイルド Wilde 494.
ワグナー Richard Wagner 64, 104, 106, 455.
ワグネル Rudolf Wagner 354.
ワルヒ Walch 10.



乙

書名索引

ア

アカデミカ後書 Academica posteriora (ツィツェロ) 131.
亞細亞人の哲學に就いて On the philosophy of Asiatics(論文.ジョーンズ) 162.
宛もの哲學 Philosophie des Als-Ob. (ファイヒンゲル) 289.
或哲學者の旅行日誌 Das Reise-Tagebuch eines Philosophen (カイゼルリンク) 2.

イ

有機體の哲學 Phil. d. Organischen (ドリーシュ) 379.
如何にして私共の觀念を明瞭ならしむべきか How to make our Ideas clear (論文ピーアス) 285.
醫學的心理學 Medizinische Psy. (ロッツェ) 402.
意志と表象としての世界 D. Welt als Wille u. Vorstell. (ショーペンハウエル) 112, 161, 205, 207, 376.
意志自由の問題 Das Problem d. Willensfreiheit (メッサー) 544.
意志の自由と其反對者 Die Willensfreiheit u. ihre Gegner (ローラント) 543.
意志の自由について Ueber Willensfreiheit (ヴィンデルバント) 543.
意志の自由の問題 Das Problem d. Willensfreiheit (リップス) 543.
意識に直接に與へられたるものについて Essai sur les données immediates de la conscience [英獨譯——時間と自由意志 Zeit u. Freiheit, Time and free Will] (ベルグソン) 224.
一元論 Der Monismus als Band Zwischen Religion u. Wissenschaft (ヘッケル) 356.
一書翰集 Briefwechsel vom Wesen der Seele (ホッホアイゼル) 353.
一般形態學 Generelle Morphologie der Organismen (ヘッケル) 356.
一般的認識論 Allgemeine Erkenntnislehre (シュリック) 188.
イムマヌエル.カント Immanuel Kant (バウフ) 320.
イムマヌエル.カントの認識論 I. K. s Erkenntnisth. (フォルケルト) 202.
因明瑞源記(鳳潭) 170.

ウ

宇宙の調和 Harmonie universelle (メルセンヌ) 176.
ウパニシャッド Upanishad (奥義書に同じ) 89.
ヴィルヘルム.テル Wilhelm Tell (シルレル) 104.

エ

英國文明史 An Introduction to the History of Civilization in England (バックル) 351.
易 87.
エミール Emile ou sur l'education (ルソー) 467.
エネシデームス, 卽ラインホールド教授の唱ふる根元哲學の基礎について並びに理性批判の越權に對する懐疑論の辯護 Aenesidemus od. über d. Fundamente der von Prof. Reinhold gelieferten Elementarphilosophie, nebst einer Verteidigung des Skeptizismus gegen die Anmassungen der Vernunftkritik (シュルツェ) 303.

オ

オイティフロン篇 Euthyphron (對話篇の一部, プラトーン) 76.
奥義書 (ウパニシャッドに同じ) 59, 99.
オルガノン Organon (アリストテレース) 77, 156.

カ

解釋篇 De Interpretatione (オルガノンの一部, アリストテレース) 77.
幸福論 discours sur le bonheur (ラメトリー) 516.
學藝大集成 Encyclopedie ou dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des metiers (ディデロ及ダランベール出版) 134, 353.
確實性と眞理性 Gewissheit u. Wahrheit (フォルケルト) 149.
學術の成發及發達 de dignitate et augmentis scientiarum (ベーコン) 133.
學問と藝術とは道德の進歩に資したるかへの應募論文 discours sur les sciences et les arts (ルソー) 469.
學的哲學季報 Vierteljahrschrift f. wissenschaftl. Phil. (雜誌) 522.
感覺の分析 Analyse der Empfindungen (マッハ) 187.
感性界及睿知界の形式及原理 De mundi Sensibilis atque intelligibilis forma et principiis (カント) 250.
カント及亞流 Kant u. d. Epigonen (リーブマン) 271, 374.
カント研究 Kantstudien (雜誌) 288.
カント著純粹理性批判解釋書 Kommentar zu Kants K. d. r. V. (ファイヒンゲル) 201, 288.
カントと現代の哲學(桑木博士) 324.
カントとマールブルヒ學派 Kant u. d. Marburger Schule (論文.ナトルプ) 121.
カントの經驗の類推 Kants Analogien d. Erfahrung (ラース) 184.
カントの經驗理說 Kants Theorie d. Erfahrung (コーヘン) 272, 320,
カントの認識論批評 Kant-Kritik I. Kriktik der Kantischen Erkenntnislehre (クリスチアンゼン) 282, 314.
カントの認識論と形而上學 Kants Erkenntnistheorie u. Metaphysik (エデュアルド.フォン.ハルトマン) 208.

キ

舊信仰と新信仰 Der alte u. d. neue Glaube (シュトラウス) 412.
舊約聖書 Old Testament 409.
機械學原理 D. Prinzipien d. Mechanik (ヘルツ) 359.
幾何學的に論證せられたる倫理學 Ethica, ordine geometrica demonstrata (スピノーザ) 80.
起信論(馬鳴) 415.
希臘波斯戰爭記(ヘロドトス) 16.
基督敎の本質 Das Wesen des Christentums (フォイエルバッハ) 412.
金七十論(自在黑) 396.
近世社會主義の先驅 Vorläufer des neueren Sozialismus (カウッキー) 508.
近代哲學 Mordern Phil. (ルギエロ) 288.
饗宴篇 Symposion (對話篇の一部プラトーン) 19, 76, 365.
共和國篇 Politikos (對話篇の一部プラトーン) 19.

ク

苦陰經 531.
偶然論 Die Lehre vom Zufall (ヴィンデルバント) 276.
俱舍論 66, 380.
科學的唯物論の征服 Die Ueberwindung d. wissenschaftl. M. (オストワルト) 375.
科學と憶說 La science et l'hypothèse (ポアンカレー) 293.
科學の價値 La valeur de la science (ポアンカレー) 216, 293.
貨幣の哲學 Phil. d. Geldes (ジムメル) 493.
觀念論と實證論 Idealismus u. Positivismus (ラース) 184.

ケ

經濟哲學の諸問題 (左右田博士) 493.
經濟と法律 Wirtschaft u. Recht (シュタムラー) 275, 493.
形而上學 metaphysica (アリストテレース) 37, 77, 389.
形而上學及道德學評論 Rev. d. metaphys. et de morale (雜誌) 221.
形而上學入門 Introduct. à la metaphys. (ベルグソン) 163, 221.
形而上學綱要 Elemente d. M. (ドイセン) 378
藝術とは何ぞや What is Art? (トルストイ) 495.
經驗的立脚地よりの心理學 Psy. vom empir. Standpunkt (ブレンターノ) 317.
經驗と思惟 Erfahrung u. Denken (フォルケルト) 149.
解深密經 170.
解脫の哲學 Die Phil. d. Erlösung (メーンレンデル) 535.
[敎訓詩] De rerum natura (ルクレティウス) 348.
現實態の分析 Analysis d. Wirklichk.

(リープマン) 8, 271.
懸賞論文 Preisschritt (Untersuchung über die Deutlichkeit des Grundsätze der natürl. Theologie u. d. Moral (カント) 83.
現代哲學入門 Zur Einführ. in die Phil. d. Gegenwart (リール) 205, 210, 224.
現代哲學の特徴 Grundzüge d. gegenwärtig. Zeitalters (フィヒテ) 385.
現代(時代)にふさはしからざる考察 Unzeitgemässe Betrachtungen (ニーチェ) 455-6.
現代の哲學 deutsche Philosophie d. Gegenwart (シュスット) 289, 502.

コ

講義要領告知 Nachricht von d. Einrichtung d. Vorlesungen in Winterhalbjahr 1765-1766 (カント) 123.
國家論 Politica (アルトゥジウス) 468.
國富の性質及原因の研究 (Inquiry into the nature and causes of the welth of nations (スミス) 489.
個體主義とは何ぞや Was ist Individualismus? (ブルックハールト) 447.
根本學 Phil. als Grundwissenschaft (レームケ) 150.
根本經驗說 Essays in radical Empiricism (ジェームズ) 286.
根本佛教(姉崎博士) 517-8.

サ

サー.ウィリヤム.ハミルトンの研究 Examination of Sir W. Hamiltons Phil. (ジョン.ステューアート.ミル) 185.
創世紀 Genesis (舊約聖書の一節) 98, 409.
創造的進化 (L'évolution créatrice (ベルグソン) 221, 224.
Sagiatore (ガリレー) 176.
サロメ Salome (ワイルド) 494.

シ

視覺新論 A new theory of vision (バークレー) 236.
爾雅釋言 33.
思想と事實 Gedanken u. Tatsachen (リープマン) 8, 271.
新エロイーズ La nouvelle Héloise (ルソー) 469.
新カント主義,ショーペンハウエル主義及ヘーゲル主義 Neukantianismus, Schopenhauerianismus u. Hegelianismus (ハルトマン) 208.
新機關 Novum Organum (ベーコン) 79.
新實在論 New realism (ホルト等合著) 188.
新約聖書 New Testament. 98, 409, 508.
新理性批判 Neue Kritik d. Vernunft (フリース) 161.
進化に於ける相互扶助 Gegenseitige Hilfe in d. Entwicklung (クロポトキン) 505.
神祕主義と論理學 Mysticism and logic (ラッセル) 188-9.
心理學及生理學的認識論 Psychophysiologische Erkenntnistheorie (ツィーエン) 187.
眞理探究 de la recherche de la vérité (マールブランシュ) 394.
眞理の意味 Meaning of truth (ジェームズ) 286.
人口の原理に關する論文 Essay on the principle of population (マルサス) 504.
人生の價値 Der Wert des Lebens (デューリンク) 186.
人性論 A treatise of human nature (ヒュンム) 238-9.
人知新論 Nouveaux essais sur l'entendment humain (ライプニッツ) 89, 195.
人知の起原を論ずるの書 Essai sur l'origine des connaissances humaines (コンディヤック) 183.
人知の原理に關する論文 Treatise on the Principles of human Knowledge (バークレー) 230.
人本主義 Humanism (シラー) 288.
人類創生論 Anthropogenie (ヘッケル) 356.
人類史の哲學への思想 Ideen zur Phil. d. Geschichte d. Menschheit (ヘルデル) 384.
社會改造の原理 The Principle of social reconstruction (ラッセル) 188.
社會契約について(民約論に同じ) 439-71.
社會教育學 Sozialpaedagogik (ナトルプ) 329, 532.
宗教の本質 Das Wesen d. Religion (フォイエルバッハ) 412.
充足理由の原理の四つの根原について Ueber d. vierfache Wurzel d. Satzes vom zureichenden Grunde (ショーペンハウエル) 161, 207.
主觀及客觀の超驗性 Uber Transzendenz d. Objekts u. Sabjekts (シューベルトゾルデルン) 242.

純粹意志の倫理學 Ethik d. reinen Willens (コーヘン) 329.
純粹感情の美學 Aesthetik d. reinen Gefühls (コーヘン) 329.
純粹經驗の批判 Kritik d. reinen Erfahrung (アヴェナリウス) 186.
純粹現象學への思想 Ideen zu einer reinen Phaenomenologie u. phaenomenolog. Phil. (フッサール) 318.
純粹認識の論理學 Logik d. reinen Erkenntnis (コーヘン) 137, 272-3.
純粹理性批判 Kritik d. reinen Vernunft (カント) 73, 80, 146, 155, 160, 164, 201, 248, 250, 254, 261-2, 319, 424.
序論及批評的補遺 Einleitung u. Kritischem Nachtrag (ランゲ著唯物論史への, コーヘン) 272.
自然及恩寵の原理 Principes de la nature et de la grâce (ライプニッツ) 373.
自然創造史 Natürl. Schöpfungsgeschichte (ヘッケル) 353.
自然科學的概念構成の限界 Grenzen d. naturwissenschaftl. Begriffsbildung (リッケルト) 281, 433.
自然哲學講義 Vorlesungen über Naturphil. (オストワルト) 357.
自然淘汰に依る種の起原について On the origin of species by means of natural selection (ダーウィン) 504.
自然と精神,文化哲學の一の試み Natur u. Geist, Versuch einer Kulturphil. (リンデ) 422.
自然の體系卽物理的及道德的世界の法則について Système de la nature ou des lois du monde physique et du monde morale (オルバッハ) 352.
自然科學と文化科學 Naturwissenschaft und Kulturwissenschaft (リッケルト) 281.
實證哲學論 Cours de phil. positive (コント) 135, 417.
實在論的特徴 Realistische Grundzüge (リール) 210.
實在論の諸原理 Ueber die Prinzipien d. Realismus (キルヒマン) 184.
實踐理性批判 Kritik d. praktischen Vernunft (カント) 324, 424, 510
實體概念と作用概念 Substanz-u. Funktionsbegriff (カシラー) 275.
實用主義 Pragmatism (ジェームズ) 286, 341.
死と不死とに關する思想 Gedanken über Tod u. Unsterblichkeit (フォイエルバッハ) 412.
資本論 Das Kapital (マルクス) 489.

ス

水晶の靈 Kristallseelen (ヘッケル) 357.
數學的物理學講義 Vorlesungen über mathematische Physik (キルヒホッフ) 293.
數理哲學入門 Introduction to mathematical phil. (ラッセル) 188.
Scepsis Scientifica (グランヴィール) 300.

セ

生起的方法か批判的方法か Kritische od. genetische Methode (論文, ヴィンデルバント) 320.
政治篇 Politeia (對話篇の一部プラトーン) 336-7.
政治論二篇 Two Treatises of Government (ロック) 466.
精神科學入門 Einleitung in d. Geisteswissenschaften (ディルタイ) 325.
精神科學の基礎の研究 Studien zur Grundlegung d. Geisteswiss. (ディルタイ) 325.
精神科學に於ける歷史的世界の建設 Der Aufbau d. geschichtl. Welt in d. Geisteswiss. (ディルタイ) 325.
精神について De anima (アリストテレース) 156.
精神の現象論 Phaenomenologie des Geistes (ヘーゲル) 264, 266.
精神の自然史 Histoire naturelle de l'âme (ラメトリー) 351.
精神物理學要領 Elemente d. psychophysik (フェヒネル) 402.
精密科學の論理的基礎 Logische Grundlagen d. exakt. Wissenschaften (ナトルプ) 275.
說命 33.
正名篇(荀子) 169.
生理學辭典 Handwörterbuch d. Physiologie (ワグネル編) 401.
生理學摘要 Handbuch d. Physiologie (ミューラー) 177.
生理的心理學綱要 Grundzüge d. physiolog. Psych. (ヴント) 402.
世界史の批評としての倫理學 Ethik als Kritik d. Weltgeschichte (ギョールラント) 275.
世界の知識と本質とに於ける矛盾 Widerspruch im Wissen u. Wesen d. Welt (バーンセン) 535.
世界の謎 Die Welträtsel (ヘッケル) 356.
小宇宙 Mikrokosmos (ロッツェ) 379.
生の循環 Kreisrauf des Lebens (モレ

ショット) 355.
生の不思議 Die Lebenswunder (ヘッケル) 356.
セレーナに與ふる書翰集 Letters to Serena (トーランド) 349.
善惡の彼岸 Jenseits von Gut u. Böse (ニーチェ) 458.
先驗演繹論 Transzendentale Deduktion der reinen Verstandesbegriffe (純理批判の一部) 257, 260.
先驗的觀念論の體系 System d. transzendentalen Idealismus (シェルリング) 234.
先驗的實在論の批評的基礎づけ Kritische Grundlegung d. tr. Realismus (ハルトマン) 208.
センダヴェスタ Zendavesta (フェヒネル) 379.
全知識學の基礎 Grundlage d. gesamten Wissenschaftslehre (フィヒテ) 161.

ソ

僧佉耶經 Sankhya-Sūtra 393.
綜合哲學體系 A system of synthetic phil. (スペンサー) 142.
ソフィスト難論法 De sophisticis elenchis (オルガノンの一部, アリストテレース) 77.

タ

第一序論 Erste Einleitung in d. W.L. (フィヒテ) 161, 258.
第一哲學の省察 Meditationes de prima philosophia (デカルト) 27, 194.
第四福音書 24.
第二序論 Zweite Einleitung in d. W.L. (フィヒテ) 161, 258.
對話篇 (プラトーン) 18, 76, 89, 407
道德感情說 Theory of moral sentiments (アダム.スミス) 489.
道德形而上學 Metaphysik d. Sitten (カント) 424.
道德形而上學の基礎づけ Grundlegung d. Metaphysik d. Sitten (カント) 511.
道德法 Das Sittengesetz (シュタウディンゲル) 440.
道德發生論 Zur Genealogie d. Moral (ニイチェ) 458.
妥當の問題 Problem d. Geltung (リーベルト) 227, 288, 324, 373.
ダルヴィニスムスに於ける眞理と誤謬 Wahrheit u. Irrtum im Darwinismus (ハルトマン) 534.
單子論 Monadologie (ライプニッツ) 373.

チ

力と物質 Kraft u. Stoff (ビュヒネル) 355.
力の保存について Ueber d. Erhaltung d. Kraft (ヘルムホルツ) 354.
知識學 Wissenschaftslehre (ボルツァーノ) 162, 316.
知識改良論 Tractatus de intellectus emendatione (スピノーザ) 194.
知識學の概念について Ueber den Begriff d. W.L. (フィヒテ) 161.
知識學の理想主義を解明せんとする論文 Abhandlungen zur Erläuter. d. Idealismus d. W. L. (シェルリング) 262.

ツ

ツァラツストラ如是說 Also sprach Zarathustra (ニイチェ) 123, 458-9.
通俗科學月報 Popular science monthly (雜誌) 285.

テ

哲學概論 Lehrbuch zur Einleitung in d. Phil. (ヘルバルト) 7, 9.
哲學概論 Einl. in d. Phil. (コルネリウス) 9.
概學哲論 Einl. in d. Phil. (ヲルヒ) 10.
哲學概論 Einl. in d. Phil. (メルデック) 10.
哲學概論 Kritische Einl. in d. Phil. (シュトゥルーフェ) 10.
哲學概論 Einl. in d. Phil. (ヴント) 10, 129, 381.
哲學概論 Einl. in d. Phil. (キュルペ) 11, 174-5.
哲學概論 Einl. in d. Phil. (ヴィンデルバント) 11.
哲學概論 Einl. in d. Phil. (エルザレム) 11, 119.
哲學概論 Einl. in d. Phil. (ロスキー) 12.
哲學概論 (桑木博士) 12.
哲學概論 (紀平博士) 12.
哲學概論 (宮本學士) 12.
哲學概論 (帆足理一郎氏) 12.
哲學概論 (伊藤保美氏) 12.
哲學概論 Einführung in d. Phil. (ジュテルンベルヒ) 9, 35.
哲學概論 Einl. in d. Phil. (パウルゼン) 118.
哲學小辭典 Handwörterbuch d. Phil. (アイスラー) 422.
哲學研究のための集成的入門 Enzyklopaedische Einl in das Studium d. Phil. (ハイデンライヒ) 10.
哲學原理 Principia philosophiae (デカルト) 43, 391.
哲學綱要(桑木博士) 12.
哲學綱要 (朝永博士) 12.
哲學全局研究入門書 Einl. in d. Studium d. gesamten Phil. (エルハルト) 7.
哲學史の見地よりの哲學概論 Einl. in d. Phil. vom Standpunkte d. Geschichte d. Phil. (シュトゥルンベル) 10.
哲學史教科書 Lehrbuch d. Geschichte d. Phil. (ヴィンデルバント) 497.
哲學史綱要 Grundriss d. Geschichte d. Phil. (ユィーベルウェッヒ) 268, 422.
哲學上の諸學說の體系的分類の研究 Esquisse d'une Classification systematique des doctrines Philosophiques (ルヌーピエ) 8.
哲學體系 System d. Phil. (ロッツェ) 149, 210.
哲學集成 Enzyklopaedie d. Phil. (ドルネル) 9.
哲學的諸科學集成綱要 Enzyklopaedie d. phil. Wissenschaften im Grundrisse (ヘーゲル) 264-5.
哲學, 其一般問題及特殊問題, 批評的觀念論入門 Philosophie, ihr Problem u. ihre Probleme, Einführ. in den Kritischen Idealismus (ナトルプ) 10, 130, 275, 437.
哲學, 其範圍と諸關係 Phil. its scope and relations (シジウィック) 336.
哲學的諸科學概論 Einl. in d. phil. Wissenschaften (プリークレプス) 10.
哲學的諸科學集成 Enzyklopaedie d. phil. Wiss. (ルーゲ) 276.
哲學的超驗性の價値及起原 Wert u. Ursprung d. Phil. Transzendenz (カイベル) 243.
哲學的必然性論 The doctrin of phil. necessity (プリーストリー) 541.
哲學的批評主義及其實證科學に對する意義 Phil. Kritizismus, u. ihre Bedeutung f. die positive Wiss. (リール) 210, 320.
哲學に於ける科學的方法 Scientific method in phil. (ラッセル) 188.
哲學入門 Introduction to phil. (フーラートン) 11.
哲學入門 Zur Einl. in d. Phil. (スペディッセン) 7.
哲學の論理學及範疇論 Logik d. Phil. u. die Kategorienlehre (ラスク) 284, 327, 416, 434.
哲學の問題 The problems of philosophy (ラッセル) 188.
哲學要領(下田次郎氏) 12.
哲學論攷 Logische Untersuchungen (トレンデレンブルク) 196.
哲學論文集 Essais philosophiques (デカルト) 176.
傳光錄(靈山紹瑾禪師) 550.
テアエテトス篇 Theaetos (對話篇の一部, プラトーン) 19, 91, 154-5.
ティマイオス篇 Timaios (對話篇の一部, プラトーン) 366.

ト

動物論 De anima (アリストテレース) 390.
獨斷論及批評主義に關する哲學的書簡 Phil. Briefe über Dogmatismus u. Kritizismus (シェルリング) 262.
トピカ篇 Topica (オルガノンの一部, プラトーン) 132.

ナ

內在哲學 Immanente Phil. (カウフマン) 243.

ニ

二十世紀の獨乙哲學 Deutsche Phil. im 20ten Jahrh. (モーク) 422.
尼夜耶經 169-70.
人間機械論 L'homme machine (ラメトリー) 351.
人間悟性論 An essay concerning human understanding (ロック) 29, 145, 160, 176, 179.
人間創造と心靈實體 Ueber Menschenschöpfung u. Seelensubstanz. (講演.ヲグネル) 354.
人間的なあまりに人間的な Menschliches, Allzumenschliches (ニイチェ) 458.
人間の悟性に關する研究 Enquiry concerning human understanding (ヒューム) 238.
人間の世界概念 Der menschliche Weltbegriff (アヴェナリウス) 186.
人間認識能力の理說及形而上學 Theorie d. menschl. Erkenntnisvermö-

gens u. Metaphysik (ラインホールド) 148.
人間不平等起原論 discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité parmi les hommes (ルソー) 419-70.
認識と誤謬 Erkenntnis u. Irrtum (マッハ) 187.
認識の確實性について Ueber die Gewissheit d. Erkenntnis (ヴィンデルバント) 276.
認識の形而上學 Metaphysik d. Erkenntnis (ニコライ.ハルトマン) 275.
認識の省察 Meditationes de cognitione, veritate et ideis (ライプニッツ) 195.
認識の對象 Gegenstand d. Erkenntnis (リッケルト) 86, 281, 313.
認識の直觀的基礎 Intuitive basis of knowledge (ロスキー) 227.
認識問題 Erkenntnisproblem (カッシラー) 115, 275.
認識論概論 Einführung in d. Erkenntnistheorie (メッサー) 175.
認識論概論 Einf. in d. Erkenntnistheorie (アイスラー) 149, 175.
認識論及知識學の基礎 Fundamente d. Erkenntnistheorie u. Wissenschaftslehre (カウフマン) 243.
認識論及論理學綱要 Grundriss d. Erkenntnistheorie u. Logik (シュッペ) 241.
認識論的論理學 Erkenntnistheoretische Logik (シュッペ) 241.
認識論の意義及問題について Ueber Bedeutung u. Aufgabe d. Erkenntnistheorie (ツェラー) 163.
認識論の基礎 Grundlagen einer Erkenntnistheorie (シューベルトソルデルン) 242.
認識論の根本問題 Das Grundproblem d. Erkenntnistheorie (ハルトマン) 208.
認識論の二途 Zwei Wege d. Erkenntnistheorie (リッケルト) 28, 318, 320.

ネ

熱の機械的當量の研究 Bemerkungen über das mechanische Aequivalent d. Wärme (マイヤー) 354.
念處經 517.

ノ

ノーヴァム,オルガナム Novum Organum (ベーコン) 73.

ハ

ハイラスとフィロノウスとの三つの對話 Three dialogues between Hylas and Philonous (バークレー) 89, 230.
方法叙説 discours de la methode (デカルト) 42, 62, 80, 194.
方便心論 (龍樹) 170.
法律學の形而上學的原理 Metaph. Anfangsgründe d. Rechtslehre (カント) 472.
法律の精神 De l'esprit des lois (モンテスキュー) 469.
婆須槃豆傳(高楠博士) 396.
判斷論 Lehre vom Urteil (ラスク) 282, 319, 327.
判斷力批判 Kritik d. Urteilskraft (カント) 324, 384, 424.
範疇の體系 Vom System d. Kategorien (ヴィンデルバント) 276-7, 434.
範疇論 Kategorienlehre (ハルトマン) 208.
範疇論 De Kategoriis (オルガノンの一部, アリストテレース) 77-8.
反動史 Geschichte d. Reaktion (カスパール.シュミット) 451.

ヒ

悲劇の出生 Die Geburt der Tragödie aus dem Geiste d. Musik (ニイチェ) 455.
微分法の原理 Das Prinzip d. Infinitesimalmethode (コーヘン) 272.
批評的哲學概論 Kritische Einl. in d. Phil. (アイスラー) 11.
批評的實在論 Critical realism (セラース等合著) 190.
晝の見解と夜の見解 Die Tagesansicht gegenüber der Nachtansicht (フェヒネル) 379.
ピロン概説 Pyrrhonische Grundzüge (セクストゥス.エムピリクス) 299.

フ

ファウスト Faust (ギョーテ) 89, 104.
物質と記憶 Matière et mémoire (ベルグソン) 221.
佛教史 (ターラナータ) 396.
物心因果性と物心並行論 Psychophysische Kausalität u. psychophysischer Parallelismus (リッケルト) 403.
心理的因果性と物心並行論の原理とについて Uber Psychische Kausalität u. das Prinzip d. psychophysischen Parallelismus (ヴント) 403.
物理學と感覺與料との關係 (ラッセル) 189.
物理學的及心理學的生理學的基礎に立てる認識論 Erknentnistheorie auf physikal. u. psycho-physiol. Grundlage (ツィーエン) 187.
フィヒテの理想主義と歴史 Fichtes Idealismus u. d. Geschichte (ラスク) 327.
プレリュディエン Praelüdien (ヴィンデルバント) 276.
文化哲學と先驗的觀念論 Kulturphil. u. tr. Idealismus (ヴィンデルバント) 422.
文化哲學の經驗的及先天的考察の可能について Ueber d. Möglichk. d. Betrachtung von unten u. oben in d. Kulturphil. (レーセル) 422.
文化哲學への思想 Ideen zur Phil. d. Kultur (コイゲン) 422.
分析論前篇 Analytica priora (オルガノンの一部, アリストテレース) 77.
分析論後篇 Analytica posteriora (オルガノンの一部, アリストテレース) 77.
Voprosi philosophii (雜誌) 227.

ヘ

ヘーゲルの秘密 The secret of Hegel (スターリング) 267,
ベラミー Bel-Ami (モーパッサン) 445.
ヘルデルの歴史哲學批評 Rezensionen von Herders Ideen zur Phil. der Geschichte d. Menschheit (カント) 384-5.
ペロポネソス戰爭記 (トゥキディデス) 16.
辯神論 Theodicée (ライプニッツ) 537.
辯證論 Topica (オルガノンの一部, アリストテレース) 77.

ム

無根據の樂天論 Der Grundlose Optimismus (ランデスマン) 530.

メ

迷信と科學 Köhlerglaube u. Wissenschaft (フォークト) 355.
メノン篇 Menon (對話篇の一部, プラトーン) 76.

ヤ

楊子方言 36.
耶蘇傳 Das Leben Iesu (シュトラウス) 411.

ユ

唯一者と其所有 Der Einzige u. sein Eigentum (カスパール, シュミット) 451.
唯物論史 Geschichte d. Materialismus (ランゲ) 198, 269, 272, 343, 480, 511.

ラ

勞働者問題 Die Arbeiterfrage (ランゲ) 510.
樂天論 Ueber den Optimismus (カント) 537.

リ

利學(西周) 36.
理學鉤玄(中江兆民) 36.
理學沿革史 36.
力學原理(機械學原理を見よ) 198.
理想的の夫 Ideal husband (ワイルド) 494.

レ

歴史的及批評的辭典 Dictionnaire historique et critique 301.
歴史哲學 Geschichtsphil. (ジムメル) 332.
歴史と自然科學 Geschichte u. N. W. (ヴィンデルバント) 279.

ロ

六十科論(槃茶尸詞) 396.
ロゴス Logos (雜誌) 422.
論理學 (1843) Logik (ロッツェ) 210.
論理學 (1874) Logik (ロッツェ) 210.
論理學 Logik (デューリング) 186.
論理學 Logik (エルドマン) 149.
論理學 Logik (ヴント) 149.
論理學及形而上學體系 System d. Logik u. Metaphysik (フィッシャー) 267.
論理學說研究 Studies in logical theory. (デューイ) 288.
論理學大系 System of Logic (ミル) 80.

論理學と認識論 Logik u. Erkenntnistheorie (マイヤー) 149.
論理學論攷 Beiträge zur Logik (リール) 210.
論理研究 Logische Untersuchungen (トレンデレンブルク) 196.
論理研究 Logische Untersuchungen (フッサール) 304, 318.
論理學の原理 Prinzipien d. Logik (ヴィンデルバント) 267, 276, 279.

丙

事　項　索　引

凡　例

△形容詞的又は副詞的修飾語を有するものは意味の重きに從つて配列した。例へば「哲學の論理學」は「論理學」の條、「文化の單位」は文化の條。

△(　)は「又は」の意。

△[　]は作者の附加せるもの。

△參は「參照」の略。

△術語の他に一般に意味ある語を廣く集めて思索の資に供した。例へば「激烈なる反對」「疑難」の如きである。

ア

愛 317, 452; □——の神 24; □神の—— 61; □——する 18; □——情 344, 388; □——他の感情 211; □——知 15, 17-8, 37, 41; □——知者 17, 35; □——慕説 Eroslehre. 17, 35; □——欲 102.
アイオワ州 Iowa. 492.
曖昧 195, 256.
青 191; □——そのもの 191.
赤 362.
アカデミー學派 Die Akademie. 299.
惡 536; □根本—— radikaler Böse 532.
眞もの哲學 Philosophie des Als-Ob. 284.
アダム、イヴ Adam u. Eva. 64, 97, 354; □——の墮罪 531, 537, 541.
新し □——がる 114; □——き朝 125.
アテーネ Athene. 17, 20, 22, 464.
アトム Atom. (參、單子、不可分者) 346.
アナマロイテ Anamaleute. 492.
アヒレス Achilles. 75.
アブデラ Abdera. 345.
アプリオリ A priori. 269, 305, 330-2; □科學の—— 274; □經驗的主觀の——314; □全——の體系 331.
亞片を喫用するもの 401.
アポロ的 Apollonisch. □——一面 455; □——人生觀 457.
天降り論 Deus ex machina. 199.
阿彌陀如來 432.
誤れる富國論 488.
豫め知りうべきもの 406.
阿賴耶識 380, 415; □——論 382.
アリストテリアンソサイエティ Aristotelian Society. 120.
アリストテレース Aristoteles. □——のエンテレヒー A. s Entelechie. 335, 536; □——の純粹形式 410; □——研究者 498.
ありのままの姿 200.
亞流の徒 113.
在る 311; □——さいふこと 183; □——べきこと 436; □——べき(所)の世界 432, 536, 547; □——べきもの(參、存在すべきもの) 337, 545.
アルコールの靈 Alkohlgeister. 404.
アレキサンドリア Alexandria. 22, 53, 298; □——の哲學 50; □——時代 51.
安心立命 21.
アンチオキア Antiochia. 22.
アッシリヤ Assiria. 45; ——人 50.

イ

有意的 310.
有機 □——體 Organismen. 224–5, 348, 355, 358; □——體の現象 331; □——的關係 34.
憂苦愁惱懊惱 532.
有限 418; □——無限の區別と經驗的不可經驗的の區別 413.
優生學 Eugenics. 507.
有目的的 327.
優美 521.
遊牧時代 52.
有用 Brauchbarkeit. 96, 294–6; □——な道具 brauchbare Kunstgriff. 290.
如何に 28; □——に生きるか 512.
英吉利(參、英國) 267, 302.
意見 299; □自分の唱ふる—— 457–8.
石 391.
意志 Wille. (參、意欲) 337, 364, 386, 407, 441, 445, 449, 524, 526–7, 533, 542–3; □——と知性 40; □——に三つの段階 524; □——の客觀化 Objektivation d. Willens. (實在化) 291, 377; □——の規定根據 543; □——(の)決定 539, 542; □——の爭鬪 457; □——の自由 Freiheit d. W. od. Willensf.. 541–3; □——の自由の可能 542; □——の自律 Autonomie d. W.. 263; □——の衝動 Trieb. 291; □——の陶冶 523, 527; □[——の]法則 543; □——の法則即實踐的法則 525; □——のはたらき 428; □[——の]働く方向 542; □——の發現 376–7; □——の發動及實行 539; □——の本性 220; □——の理想化 523; □——的 363; □——活動の方向 303, 539; □——生活 542; □衝動的——生活 524; □理性的——生活 524; □——力 521–2, 527; □——間の相互作用 379; □——形式 379; ——教育 525; □——作用 236, 543; □——者 381; ——そのもの 428, 444, 533; □——單位 Willenseinheiten 379; □個體的——單位 379; □——斷滅の宗教論 106; □——發動と行爲との關係 382; □生きんとする —— Wille zum Leben 501; □格率 Maxime の單なる立法的形式のみを法則とする —— 543; □經驗的—— 539; □解脫境を求むる——の實現 534; □結合—— 473; □個體的—— 535; □自己の—— 456–7; □社會の—— 456–7; □實生活上の—— 523; □人間の身體の心的等値者としての本質的 —— Wesenswille als d. psychische Aequivalent d. menschl. Leibes. 522–3; □世界の本體は—— 533; □全體—— volonté générale 471–2; □道德的價値への—— 523; □多數の—— 475–6; □多數者の——は常に正義を代表する 475; □理性的—— 524; □團體—— 475.
意識 Bewusstsein. 273, 380, 403, 440, 442, 444; □——に直接に現はるゝ所のもの 244; □個人的—— 242; □——一般 Bewusstsein überhaupt. 185, 242–3, 245; □——現象 270–1; □——そのもの 407; □——的事實 244; □超——的 225; □——內容 Bewusstseinsinhalt. 241–2; □自己の——活動 528.
スラエル人 Israeliten. 51.
イタリー(伊太利) Italy. 267, 497.
異端邪說 54.
一元 406; □——論 Monismus 341, 343, 413–4; □——論對多元論 Plurallismus の問題 286; 生成——論 pyknotischer Realmonismus 346; □ヘッケルの——論 357.
一切萬象 415.
一神 □——觀 411; □——教 Theismus 409–411; □猶太の——教 47; □——教的 410; □——論 Monotheismus 408, 414, 416.
一即多 413.
一般的 □——確信 212; □——法則 278, 511.
何時 34.
何處 34.
イデア Idea, Idee. 534; □——を見る 533–4.
否 298.
異文明 23; □——の混血兒 22–3.
意味 □——の世界 331; □志向的 Intentionaler ——(參、志向) 318.
意欲 Wille. (參、意志) 306, 448–9, 476–7, 486; □——の中で最も根本的なもの 500–1; □——の價値 477; □——の形式 466; □——の結合 449; □——の實現 448; □——の衝突 464; □——の內容 462; □淺薄な—— 477; 生きんとする—— 485–6; □意識的—— 440; □高尙な—— 477; □謙抑な—— 477; □個々(個人)の—— 397, 463–4, 476; □個人の——の實現 463; □自己の—— 450, 453, 458, 460–1, 477; □衝動的—— 485; □他者(人)の—— 379, 453, 461; □多數の ——475; □貪婪な—— 477; □表象力を持つ—— 379; □我々の—— 378; □——者 449, 461, 463, 477; □——者の立場 577; □——主體 479; □——生活 534.
因果 Kausalität. □——の關係 172, 239, 302, 401, 403; □——の連結 239; □機械的—— mechanische K., 278; □——的知識 302; □——的認識 302; □——概念 Kausalitätsbegriff. 238–9, 302; □——系列の無限の連續 542; □自然的——性 538; □物理的——性と心理的——性 Physische K. u. psychische K., 379; □物理的——說 400; □——律 Kausalitätsgesetz 238, 302, 311; □——律の支配 542; □——論 336.
印象 Eindrücke. 238; □——の强弱 299.
印度 Indien. 55, 284, 489, 531; □——(系統)の思想 380, 414, 531; □——思想に共通なる思想の曖昧 397; □——アーリヤ民族 Indo-Arians 44' 409; □——人 51, 490.
因明 169–70; □古—— 170; □新—— 170.
陰陽 398.

ウ

有 20, 75; □唯一不變の—— 69.
牛 69, 413.
ウシャス 44.
疑ふ 43.
宇宙 347, 417; □——の根本原理 26; □——の最終極要素 343; □——の實體 408; □合理的宇宙論 rationale Kosmologie の對象たる—— 417; □多元論的—— pluralistic universe. 406; □——論 Kosmologie 335–6, 338, 542; □——論の時代 334; □合理的——論 rationale Kosmologie. 335.
內より課せられたるもの 274.
美しい夢 491.
暈 398.
運動 346, 350, 401; □——の抽象觀念 231; □——の法則 392; □機械的—— 357; □——そのもの 222; □——量の保存の法則 Gesetz d. Erhaltung d. Bewegungsgrösse. 392; □相對—— 350.
ヴァルナ 44.
ヴィッセンシャフト Wissenschaft. 67.
ヴェーバーの法則 Webers Gesetz. 401.

エ

英雄崇拜 459.
永劫の循環 353.
英國(參、英吉利) 466, 489; □——の政治上の原則 467; □——思想 51; □——人 361.
嬰知 217–8, 260–1; □——の本質 259.
埃及 45; □——人 51.
エーテル振動 214.
エネルギー Energie. 255, 358, 421; □種別的感官——の原理 Prinzip d. spezifischen Sinnesenergien. 177; □生理的—— 45, 310; □——論 361; □エネルゲティスムス Energetismus (エネルギー一元論) 343, 358.
エピクロス學派 Epikureer. 21, 32, 46, 157, 342, 450, 514, 540.
エラン ヴィタール Élan vital. 226.
エレア學派 Eleaten. 151, 193–4, 334, 413, 536.
エロス Eros. 116.
演繹 Deduktion. □——的推理 78; □——法 28.
緣起論(說) 101, 415; □業感—— 380.
演劇 493.
厭世 □——觀 455; □——的傾向 536; □——思想 531; □——主義的の講義 530; □——論 Pessimismus 529–30, 538–9; □——論の原語 529; □學的—— 530; □[ショーペンハウエルの]—— 533–4; □ハルトマンの—— 534; □——論及樂天論 Optimismus の基礎 538.
延長 414.

オ

歐洲大戰 474.
憶見 19, 154.
男らしさ 525.
重さの感 401.

カ

階級意識 503; □誤れる—— 503.
楔形文字 50.
解すべからざる障害 261.
蓋然 □——的 254–5; □——性 Wahrscheinlichkeit 301; □——性の程度 292.

概念 Begriff. 6, 238, 251, 261, 266, 285, 291; □——と存在 215; □——と物理的存在との關係 215; □——の起原 167, 238; □——の限界 254; □——の構成 Begriffsbildung. 29, 166-7; □——的認識(認識の條を見よ); □高位の—— 78; □正確な—— 31; □先科學的—— vorwissenschaftliche Begrifie 67; □低位の—— 78; 普遍的—— 364; □三つの—— 429; □——說 Conceptualismus 159; □——論 83-4.
改良主義 Meliorismus. 534.
行爲 Tat. 285, 458, 515; □——を產出する 285; □——と意志との同一 378; □——の規則 288; □——の規準 514; □——の手段 286; □——の責任 540; □——の中止 515; □事實一せしが如きより異つて——しうべきであつた 541.
感覺發條 541-2.
行動 376, 441.
幸福 46, 475, 516; □——な自然人 516; □——の概念 514; □——の合理的追究 21; □——の追究 61; □最大多數の最大—— The greatest happiness of the greatest number 516; □全心生活の調和より起る—— 516; □團體の—— 515-6.
家屋 391.
學 Wissenschaft. 19-20, 48, 67-8, 127, 154, 293, 300; □——の眞正の方法 194; □——の性質 6; □——のための——W. um d. W. willen. 26, 92; □——の目的 133; □——の理想 244; □宇宙(世界)の根本原理の—— 30, 22, 30; □概念を加工する—— □感性の形式の—— 248-9; □絕對者の—— 30; □絕對的の—— 30; □理念の—— 30; □批判的の—— 313.
新くあらしめたい 431.
學會 120 (諸學會名は本文同頁を見よ)
客觀 Objekt. □普遍妥當的な——の認識 248; □——的 228, 253, 241, 305, 311; □——的考察 34; □——的規定 323; □——的實在的 264; □——的存在(實在) 246, 254, 291, 321-2; □——的妥當性 247, 249; □——的內容 316; □——的連續 322; □——性 Objektivität (參認識の客觀性) 220, 226, 230, 250, 279, 283; □——性の意義 237, 249; □——性の規定 292; □——性の根據 283; □——性の特質 322; □——性の問題 168; □經驗的——性 314; □——論 Objektivismus 172, 306; □——論即實在論 Realismus 168; □——論的要素 235.
學者 484, 528.
確實 83; □——性 gewissheit. 244; □直接的——性 78.
確信 Ueberzeugung. 285; □個人的—— 10.
學說といふもの 484.
學派 120. (諸學派名は本文同頁を見よ)
學問 16; □——至上主義 457-8.
格率の單なる立法的形式 542.
學林時代 Scholastische Periode. 24.
可經驗的 erfahrbar. 418.
我見 19.
可思惟的 denkbar. 203.
假說 Hypothese (參、假定) 387; □大膽なる—— 405.
河川崇拜 58.
假定 Voraussetzung. 245, 388, 404, 538.
價値 Wert. 338, 424-5, 435-6, 460, 520; □——と存在 73; □——の創造 460; □——の體系 338; □——の世界 338; □最高—— 457-8, 476, 482-3, 488, 496, 499, 501, 506-7, 523, 526; □至高(上)—— 487, 513, 519, 521-2, 527-30, 536, 539, 547; □至高——の實現 540; □實踐的—— 307, □絕對—— 512; □同——の單位 449; □——意識 331, 428-9; □新しき——創造の豫備的事項 460; □——哲學 338; □——論的 axiologisch 129; □——論的傾向 269.
金 398.
歌舞伎芝居 494.
我慢 397.
神 18, 23-4, 97, 116, 235-7, 363, 366, 368-9, 391, 393, 395, 409-10, 412, 414, 418, 452, 497, 535-6; □——を直觀する 218; □——の愛 61; □——の中に溢るる本質 369; □——の憐知 537; □——の關與 394; □——の子 430; □——の神性 Gottheit. 412; □神性の三身 219; □——の助力 393; □——の善意 537; □[——の]全能 539; □——の屬性 414; □——の存在 542; □——の存在の論證 79; □——の天啓 157; □——の認識 25; □——の懷に住する眞理 300; □——本位 497-8; □——の樣相 414; □——の理念 395; □——即自然 Deus sive natura. 99, 414; □——中心の思想 499; □擬人的—— 366; □基督敎的(の)—— 412, 432; □原始人の—— 412; □精神的宗敎の—— 412; □天地創造の—— 24; □超越的—— 411; □超驗的實在としての—— 408; □唯一至善の—— 370.
川の流 220.
考へ □——方 Denkweise. 484; □——られたるものの論理的關係 198.
感覺 Empfindungen. 154, 177, 204, 210-3, 237, 252, 256, 261, 274, 285, 305, 308-9, 312, 323, 346, 402; □——と物理的存在との對立 215; □——の原因 214; □——そのもの 212; □外的—— 180; □心理學的—— 230, 252-4; □純粹內容としての—— 309; □——的材料 291; □超——的根據 263; □——者 252; □——者即現象 206, 214; □——內容 208, 323; □——與料 189; □還元—— reduzierte Empfindungen. 189.
感官 300; □——の性質 175; □——の觀念 236; □——の原因 236; □——知覺 174, 237.
感觸 304, 309; □——者 252.
感性的滿足 516, 521.
函數 Funktion. □生の—— 288; □生理現象の—— 359; □物理現象の—— 359; □——關係(參、作用) 70, 307, 357, 404.
感情 496, 526; □——移入 Einführung d. Gefühls. 222; □——生活 521.
感性 Sinnlichkeit. 203, 309; □——と理性との關係 216; □——の形式 248-9, 269; □——の形式の學 248-9; □——の分野外 255; □——的存在者 328; □非——的のもの 328; □——的知識 19; □——的知識の眞理性 182; □——的直觀 254; □——的認識 255; □——的認識の客觀妥當性 254-5; □——界 369.
カント □——を超越する 282; □——の位置 542; □——の解釋 201, 247, 320; □——の學說 271; □——の思想 253; □——の時代 303; □——の功績 213, 327; □——の徒 261; □——の批判書 132; □——の分類 136; □——の本意 272, 320; □——解釋家 205, 264; □——學者 34, 249, 319-20; □——原典の解釋 272; □——對スピノーザ及ライプニッツの爭 374; □——文獻學 Kantphilologie. 201; □觀念論的に解釋されたる(觀念論的解釋の下に於ける)—— 246, 268; □理性主義者の—— 520; □新——派(新の條を見よ).
カンポフィオーレ Campofiore の刑場 26.

キ

記憶 313.
機械 509; □三種の——學 mechanik の體系 359-60.
幾何學 Geometrie. 45; □——或は其他の哲學 19; □——的 61.
議會 □——主義者 473; □——政治 466, 471, 473.
記號的 195.
擬人 □——化の想像表象 344; □——的神 366.
記述 280.
技術 335.
擬制 Fiktion. 50, 289; □——主義 Fiktionalismus. 290.
規制的原理 regulative Prinzipien. 419.
犧牲的精神 507.
規則 253; □——的な列 236; □意味せられたるもの—— 319; □實在せるものの—— 319; □理解の—— 319.
規定 □外的相對的物質的の—— 350; □——者 250; □先天的——者 386.
歸納 Induktion. □——的 35; □——的方法 80; □——的推理法 77; □——法 28, 70, 73, 76, 78-9, 81; □概念的又は言語的——法 154; □新——法 80.
疑難 214.
規範 Norm. □肯定否定の—— 277; □構成的—— 277.
詭辯學者 Sophisten. 297, 334.
希望 538.
基本命題 299.
疑問 256, 329, 475, 527, 544.
希臘 Griechenland. □——古典 25, 497; □——古典の研究 497, □——思想 497; □——時代 527; □——人 20, 51, 69, 410, 514, 536; □——人の素質 530; □——神話 200; □——哲學 56; □——哲學の中心問題 24; □——哲學の發生 51; □最古の——哲學者 389; □——悲劇の出生 455.
基督敎 Christentum. 24, 96, 410, 531, 536; □——の敎義 497; □——の世界觀 339; □——の本質 96; □——的 410; □——徒 412; □原始——

Urchristentum. 508, 530.
キレーネ學派 Kyrenaiker. 513, 518, 530.
疑惑 42, 63; □大—— 48.
近世 527; □——の哲學意識 26; □——の文明 462; □——思想の特徴 498.
金錢萬能論 Mammonismus. 483, 487.
吟味 81.
キュルペ Külpe の七箇の理由 178.
拒中律 277.
虛なるもの das Leere. 345-6.
驚異 39, 41, 44; □——の對象 47, 58; □——の念 39, 58; □——の本質 41, 46; □大—— 48.
共產 □——的社會 492; □——主義 Kommunismus. 508.
强制的即獨斷的 123.
行の中に存在の響をきく 549.
逆理的例 404.
吸引反撥 352.
級數 □幾何學的—— 506; □算數學的—— 506.
救濟 97.
究知究理 46.
球の幾何學的概念 195.
究理心 2.
極限概念 Grensbegriff. 116, 254-6.

ク

苦 102, 109, 517, 519, 531; □——(の)原因 100, 533; □諸—— 101.
偶因 Causae per occasionem. 394; □——論者 Occasionalisten. 393.
空間 249, 271, 356, 366; □空虛なる—— 366, 392; □物體と—— 391; □——直觀 212.
空氣 344.
偶像 □——即先入の見 79; □——破壞 452.
愚人 398.
苦集二諦 101.
具體的 □——特殊相 233.
苦痛 485, 515.
クーノーフィッシャー, トレンデレンブルク論爭 K. Fischer-Trendelenburg-Streit.
區分 81.
求法 36.
雲 220.
快 514, 517; □——の感情 513; □——不快の感情 481; □眞の快苦の標準 517; □——の觀念 518.
繪畫 298.
外界 Aussenwelt. 209, 211; □——の直觀 381; □——世界の實在性の社會的證明 211.
快感 514-6; □——を生ずる所のもの 515; □——に量の差別の外質の差別を分つ 516; □——の計量 hedonic calculus. 515; □運動の—— 514; □感覺的—— 514; □現在の—— 515; □眞の—— 516; □靜止の——514; □「何に——を見出すか」518; □——そのもの 517.
懷疑 Skepsis, Zweifel. 26, 296, 303; □宗教的——175; □——的傾向 300; □——論 Skeptizismus. 239, 249, 296, 298-9, 204-5, □ヒュームの——論 240; □——論者 168, 300, 302-3.
外的 □「——のもの」228; □——物質的相對的の規定 350.
外部から與へられたるもの 274.
快樂 515, 517; □——の原因 515. □如何なる——を求むべきか 517; □感覺的——518; □精神的——514; 516, 518-9; □肉體的—— 514, 516. □——主義 Hedonismus, Eudemonismus. 513-4, 516, 519; □「——主義の」原語 513; □——主義の祖先 513; □アリスティッポスの積極的——主義 530; □ラメットリーの——主義 517; □——論者 515.
光榮革命 glorious revolution. 467.
化學の法則 244.
科學 science, Wissenschaft. (參. 個別科學) 6, 45, 67-8, 70, 330, 335, 357, 385, 492; □——と哲學との關係 70; □——のアプリオリ 274; ——の攻究 492; □——の成果 72; □——の範圍 6; □近世——の獨立 79; □經驗——Erfahrungswiss.. 323; □精密——exakte wissenschaften. 67, 332; □獨立せる——337; □法則——278; □——的管理法 108; □——的知識 44; □——方法論 73.
過去 456.
過失 386.
渦狀說 Wirbelstheorie. 392.
活力論 Vitalismus. 380; □新——Neuvitalismus. 380, 382.
貨幣 487-8; □——の集積 487.
關係 276; □——の概念 399.
還元感覺 reduzierte Empfindungen. 187.
關心の中心 381.
完全 □——說 Vollkemmenheitstheorie. 528; □——無缺 79.
關東大地震 482.
觀念 Ideas, Ideen. 180, 220, 231, 235, 238, 363-5, 388, 407, 410, 420; □——の起原の考察 230; □——の原因 235; □——の不斷連續 234; □——そのもの 235; □意識に自明なる——232; □經驗に起原を有する——230. □善の——365; □プラトーンの善の—— 410; □單純——simple ideas. 230-2, 234; □知覺せられた—— 231; □複雜——complex ideas. 230-1; □——界 Ideenwelt. 390; □——界の認識 155; □プラトーンの——界 368, 410, 432; □——界と個別世界との關係 366; □——本具說 Theory of innate ideas. 194; □——聯合Association of I.. 239; □——聯合の習慣性 302; □——論 Idealismus. 259, 262, 264, 273, 303, 342; □合理的——論 274; □主觀的——論subjectiver Idealismus. 234, 241, 370; □純粹——論 385; □プラトーンの——論 329, 335, 363, 367, 381, 389; □フィヒテの——論 262; □——論的 247; □——論的に解釋せられたるカント(カントの條を見よ) □新——論的運動 226; □——論者 281.
官僚的政治 106.
君主 467, 472-3; □——の意志 465; □——制 469, 472; □——專制政治 465; □——存在の起原 468.
君民統治契約 Herrschaftsvertrag. 468.

ケ

經驗 Erfahrung, Experience. 28, 79, 84, 178, 192, 212, 230, 238, 242, 251, 259, 304-5, 308-10; □——さいふ語 434; □——の意味(義) 199, 243; □——の意味のとり方 230; □の基礎 259; □——の集積 48; □——の制約者 332; □——の分析 321; □——其自ら 310; □——對理性の問題 323; □個人の—— 312; □直觀的に——する 229; □——世界 271; □——綜合判斷 165; □——的 28, 84; □——的醫者 158; □——論 159, 238, 291-2, 299, 310; □——論と合理論 Empirismus u. Rationalismus. 306; □——論的檢證 294.
經濟 Wirtschaft. □——の眞義 483; □貨幣——488; □個人——488; □社會—— 488; □——上の平行狀態 489; □——的財 484, 486, 490, 492-3, 502. □——的財の集積 483, 487-8, 491; □ [——的] 財の獲得 490; □個人主義的な——學 489; □社會主義的な——學 489; □——史 488-9; □——至上主義 483-4, 490, 492-3, 501; □——至上主義の好典型 487; □自由主義の——至上主義 490; □——至上主義者 489, 491; □——主體 488, 490; □——哲學 338.
計算 Berechnen. 291.
形式 280, 323, 331, 353, 380, 390-1, 407, 432, 480; □——と質料 Form u. Materie 389; □——と實質 47; □——的眞理性 167; □先天的——303; □——即本質 389; □——的方面 156.
形而上學 metaphysik. 20, 28, 30, 40, 82, 164, 211, 223, 331-2, 335-6, 338, 340, 416, 419-20, 427, 432, 538, 544; □——さいふ語 416; □——に與へられた批評(——の批評) 324, 330, □——の意義 337; □——の可能 330; □——の課題 545; □——の結論 550; □——の原語 334; □——の主要問題 542; □——の序說 80; □——の第一部 338; □——の立場 406; □——の問題 (——的問題) 273, 286; □アリストテレースの——391; □過去の—— 416; □採用し得べき—— 548; □自然—— 335, 533; □自然哲學的——538; □實體化された—— 420; □思辨的——の不可能 73; □新——の成立 335; □ショーペンハウエルの——382; □超驗的—— 420; □獨逸ローマンティックの—— 381-2; □道德——335. □獨斷的—— 339; □批評的——271, 339; □文化哲學的——說 428; □民衆——Volksmetaphysik. 88; □——化 420; □——的 304, 330, 335, 338; □——的の力 225; □——的機物 332; □——的確實性 83; □——的究明 5; □——的傾向 269; □——的原理 227; □——的思索の發足點 381; □——的時代 417; □——的臭味 258; □——的動物 40; □——的立場 329; □——的二世界說 metaphysische Zweiweltentheorie. 215; □——的任務 332; □——的要素 374; □——的點 372;
藝術 221, 328, 455, 497, 494-5, 521,

533-4; □——と人 494; □——の材料 493; □——の創造 495; □の創造鑑賞 457; □——の製作 494; □——の理想 494; □現代の——を批難 494; □人生のための——495; □——家 59, 456, 494-5, 528; □人道主義の——家 495; □人道主義の——家の好標本 495; □——至上主義 457, 481, 483, 493-4; □——至上主義に含まるる物本主義的要素への批評 496; □トルストイの——至上主義 502; □——至上主義者 494; □——論 493-4.
形體 278, 358.
系統 S. 314-5.
契約 Konventionalregeln. 454, 467.
系列 □數の—— 437; □物理現象の——と心理現象の—— 379; □論證の——299.
教育 Erziehung. 524; □——の便法 49; □(ヘルバルトの)——學 Paedagogik 526-7.
教授 Unterricht. 524.
教義 25.
教會 97; □——の教理 499; □——の哲學 78.
教政本位 448.
教父 □——時代 24; □——哲學Phil. d. Patristik. 416.
激烈なる反對 390.
解脫 Erlösung. 100; □——の希望 535; □——の思想 531; □神の——534; □——觀 534.
結果の媒介 302.
結合の規則 322.
決定論 (說) Determinismus. 383; 538; □——的要素 383-5; □——者 541.
ゲルマン民族 Germanen. 410, 448, 521.
權威 451.
原因 235, 302, 371; □——と結果 399; □——なき結果 403; □結果なき——403; □——そのもの 310; □四—— 78; □眞の—— 394; □第一——414-5; □物理的——350; □無制約的初發——542.
限界 271.
研究 □——の對象 330; □——する價値 3; □——法論 75.
言語 6, 347; □——內容 187.
原罪說 96.
原子 (參 不可分者) 290, 342, 346-7, 351, 392; □可計算的——界 322; □——論 Atomismus. 345; □——論の先行者 388; □——論の復興者 350; □機械的——論 360; □化學的——論 360; □——論者 344;
原始人の群居生活 547.
檢證 Verifikation. 292; □——の根據 308; □——の本質 292.
現象 Phaenomena, Erscheinung. 19, 204-6, 212-3, 247-8, 250, 252, 255-6, 270, 322, 355, 358, 376, 378, 398, 440; □——の意義 249; □——の意味のとり方 204; □——の學 248; □——の構成の要素 250; □——の多樣性 248; □——の二義 211; □——の認識 253; □——の認識の客觀性 226, 253; □——の領域外 255; □一回限りの特異の—— 278; □カントの——の意味 247; □——即經驗的認識 207, 214; □——即表象 205; □物理——(物理の條を見よ) □——以外のもの 253; □——界 154, 156; □——界の事物 378; □——それ自ら 253; □——論 Phaenomenalismus. 193,254, 281, 283; □カントの——論225, 246; □純粹——論 Reine Phaenomenologie. 318.
現實 72; □——性 Wirklichkeit. 391; □——性よりの切斷 280; □實現せられたる理想的——態 448; □——的のもの 264.
現世 498, □——本位 498-9.
原則 □三つの——261.
限定 301.
現法苦除 532.
權利 □——の有無 470; □——の問題 319, 423; □——關係 470, 490.

コ

槓杆の理論 47.
工業の發展 509.
孔子 409.
構成 □——說 73; □——的規範 277; □主觀的觀念的再——の作用 298.
肯定 □神聖なる——460; □——否定の規範 277; □——論者 168.
功用 Utility. 284, 307; □人生への—— 286; □——性 295.
功利主義 Utilitarianism. □生物學的——290; □——的 284; □——者 515.
誤解 427.
五行 398.
國家 106, 348, 472, 489-91; □の光明面 471; □——契約 470; □——主義 503; □誤れる——主義 503; □——成立の動機 471; □——成立の意味 471; □——成立以前の自然狀態 471.
五句義 158, 299.
國法 464.
極樂淨土 432.
ゴクレニウスの逆退的連鎖式 156.
五官 298.
心 380; □心理學的な——229.
個人 Individuum. 452-3, 489-90, 449-500; □——の體制 270; □——妥當的 315; □——的 297, 304, 370; □——的作用 256; □——的著色9; □——主義 Individualismus. 445, 447, 449-51, 454, 463, 500, 545-6; □——主義と社會主義 446; □——主義の概念內容 450; □——主義の生ずる原因 476; □貴族的——主義 459; □——主義そのもの 448; □——主義的 21, 457; □——主義的學說 445; □——主義的色彩 458; □——主義的要素 457-8; □——主義者 477, 479.
吾人の狀態 298.
五種淸淨 170.
個性記述的 idiographisch. 278; □——化 439.
悟性 Verstand. 212, 225, 227, 252, 347; □——の形式 248, 250-1, 269, 282; □——の所產 282; □——の附與 167; □——作用の區別 311; □——的 62; □——能力 39.
個體 Individuum. 505, 507; □生存の諸條件に適應せる——505; □——主義 Individualismus. (參 個人主義) 447.
五大 597.
古典主義 Klassizismus. 500, 520-1.
事柄 440.
誤謬 297, 381, 385, 418-21; □根本的な——214; □事物の存在を求める—— 231; □心理主義の根本——273.
合成物 371.
業說 378, 382.
個物 366; □——の世界 390.
合目的的秩序 387.
合理 □——化 323; □——的 28, 158; □——的の學 27; □——論 Rationalismus. 159, 229, 246, 310, 526; □——論的傾向 323; □學的——論 247.
個別科學 Einzelwissenschaften. (=科學 部門科學) 68.
コペルニクス的轉回 249-53, 256, 275, 282, 328; □——の精髓 257; □——は結局さうなる 275.
雇傭契約 509.
混同 329, 386, 407, 434.
困難 7, 247, 253, 403.
根本無明說 378.

サ

サイエンス Sience. 36, 67.
最高位置 475.
最後 □——の課題 337; □——の立脚地 301.
再生 Reproduktion. □——の綜合 251; □——の法則 252.
最小 □——可知差違 401; □——限度の課題 Minimumaufgabe. 293.
財欲 (參. 經濟的財) 491.
材料 318, 480-1, 494; □——即思想內容 318.
像 261.
相互扶助 Matual aid. 505; □——論 510.
サヴィトリ 44.
創造 116, 224, 460.
想像 251; □再生的——261; □夢みる——521; □生出的——力 261.
相對 298-9; □——論 Relativismus. 294-5, 304; □——論的傾向 269.
壯美 Das Erhabene. 521.
坐禪 62.
殺人的練習 496.
薩埵 Sattva. 397.
作用 192, 318; □——の性質 318; □——因 390-1; □——因と目的 390.
三位 219.
三界唯一心 380.
三階段 5.
參考書 8.
三眼說 218.
三原理 390.
三時期 455.
三段の綜合過程 251.
三否定 153.
三分說 437.

シ

死 40-1, 95, 109, 513; □價値ある——95; □「——せんとする純粹意志 reiner Wille zum Tode.」535.

自愛 470.
恣意 Willkür. 523.
私有 □——の觀念 470; □土地の——470.
自意識の確實性 301.
四因說 389.
自我 Ich. 60, 185, 242, 261, 263, 265; □——と環境 186; □——と存在 241; □——の觀念 161; □——の絕對自由 452; □——の認識 264; □——の本質 378; □——の樣相 228; □意識的——241; □可分割的——251; □可分割的非我 261; □個人的——242; □認識論的——241; □フィヒテの——375; □——意識 462; □——以外のもの 228; □——そのもの 224; □——主義者 Egoist. 453; □——主義者の聯(結)合 Verein d. Egoisten. 453-4.
思考 Denken. (參. 思想) 196, 256, 502; □——の所產 309; □——の措定 309; □——作用 293, 349; □——そのもの 397; □——活動(思想活動) 350, 367; □——對象の最大量 293; □——內容の最少量 293; □——能力 82; □——力 199.
志向 Intention. □——する Intendieren. 318; □——的意味 318.
四語の論過 420.
「然り」 298.
時間 271, 356; □——的先行者 305; □——空間 (參. 時空) 248-9, 282; □——空間の形式 252; □物理的——226; □カントの——論 271.
指揮者音樂 Kapellmeistermusik. 115.
事行 Tathandlung. 261, 375.
時空 Zeit und Raum. 197, 210, 242, 309; □——的性質 313; □超——的性質 313.
刺戟 176; □外的——210.
四元 vier Elemente. 343-4, 366.
事件 □——の生起を豫言する 174; □——科學 278.
自己 452, 500; □——の觀察實驗 499; □——の存在 40; □——安住の地 22; □——修養 Selbstzucht. 525; □有限なる——の力 412; □——意識 Selbstbewusstsein. 524; □——投入 Sichhineisetzen in sie. 211; □——法則性 Eigengesetzlichkeit. 307; □——保存 Selbsterhaltung. の努力 348; □——惑溺 522.
仕事 358.
思想 (參. 思考) 297, 350, 355; □——の起原 245; □——の自由 54; □——活動 (思考活動 350, 367; □——そのもの 294; □材料の上に表現せられたる——493; □先科學的——388.
自殺 533; □——敎唆者 530.
獅子 459, 526.
事實 405; □——と理想 337; □——の奧底 5; □——の問題 quid facti. 319; □意識的——244; □精神的——325-6; □「粗製の——」312; □——的なるもの 280.
自性 Prakrti. 396-7.
自然 Natur. 55, 79, 325-6, 425, 429, 436, 482, 498-9, 546, 549; □——と理想 429; □——と歷史 384; □「——に歸れ」470; □——の概念 427, 430, 547-8; □——物の概念 546; □——の過程 349; □——の進行 506; □意志活動から獨立に與へられた——の進行 540; □「——の眞の原因」372; □——の認識 331; □——の範圍 482; □——の不變の行程 353; □——の理想化 425, 428-30, 435-7, 448, 482-3, 496, 527, 539, 546-7; □超——界本位 497; □——人 (參. 幸福) 516; □——そのもの 46; □所動的——natura naturata. 414; □存在する所の——538; □抽象された——331; □能動的——natura naturans. 414; □理想化せられた(全)——428-9, 432; □——因果律と意志の自由との對立 544; □——科學 Naturwissenschaft. 278, 301, 312, 331, 405, 434, 482, 543; □——科學の基礎 277; □——科學の對象 325; □——科學の見方 546; □——科學者 4; □——科學者の任務 294; □——科學的唯物論的時代 162; □純粹——科學 reine N. W.. 82, 165, 249; □數學的——科學 mathematische N. W.. 324; □——機械的——觀 410; □——形而上學 metaphysik d. Natur. 335, 533; □——權說 Naturrechtstheorie. 465-6; □——現象427; □——研究 349; □——狀態 466; □——齊一律 308; □——的覺術 27; □——的要素 430; □——哲學 Naturphilosophie. 265, 335-8, 384, 538; □——哲學と歷史哲學との三つの相違點 278; □——哲學時代 152, 334; □——哲學的學說 340, 545, 548; □——統一の原理 340; □——淘汰 natural selection. 504-5; □——法則 543; □——法說 499; □——目的觀(論)的 Naturteleologie. 384; □——力 483.
四禪の安樂境 517.
四諦八正道 100.
質 341.
實有論 Realismus. 159.
實行力 521, 525.
實學 4.
實現 432; □具體的統一的——331.
實際 □——的 46; □——的結果 286; □——的相違 286; □——生活上の理想 295.
實在 Realität. 196, 244, 297, 419, 546; □——の解釋の仕方 213; □——の概念243; □眞——の概念 549; □——の學の統一 336; □——の眞相 546; □——の眞風光 549; □——の眞理 535; □——の全面 547; □——の辯證法 Realdialektik. 535; □——即物自體 259; □經驗的——241, 314, 330, 315, 323, 342, 408, 413-4, 418; □經驗的——の構成的形式原理 321; □經驗的——の絕對的妥當の主張 315; □經驗的客觀的——性 312; □現象的——realitas Phaenomenon. 206; □第二の——(參. 第二の存在) 416; □心外獨存の——200; □超驗的——407-8, 411, 414, 416-7, 419, 432; □認識の範圍外にある——407; □物理學的——そのもの 215; □——化 (參. 實體化) 267, 420, 432; □——者 364; □——主觀 Realsubjekt. (參. 經驗的主觀) 314; □——性 Realität. 314; □「經驗的——性」249; □——的意味 316; □——不生滅の說 344; □——論 Realismus. 241, 259, 262, 323, 434; □觀念論的——論 Ideal-realismus. 406; □新——論 New realism. 116, 163, 183; □先驗的——論 transzendentaler Realismus. 208; □素朴——論 naiver Realismus. 172; □批判的——論 Kritischer Realismus. 163, 172, 183; □「部分的に批判的な」——論 182; □——論的 226; □——論的傾向 269; □——論的見解 211; □——論的色彩 283.
實相 □——即絕對者 224; □——論 101.
實證 □實際的——praktische Bestätigung. 291; □——的 406; □——的段階 417; □——的知識 322; □——科學 Positive W.. 84, 223, 412; □——主義的 457; □獨逸の——主義 192; □——論 Positivismus. 184, 412, 417; □——論の根本敎說 184; □獨逸十九世紀の——論 184; □——論的傾向 417.
實人生 106.
實生活 46, 92, 239; □——上の關心 420.
實踐 □——的 294, 363; □——的意義 32; □——的關心 420; □——的試驗 Praktische Erprobung. 291; □——的部分 77; □——哲學 Praktische Phil.. 336; □——道德說 63; □——理性の優位 Primat der praktische Vernunft. 523.
實體 Substanz. 356-7; □形而上學的——381; □心的——(心的の條を見よ); □物質的——233, 235, 244; □——化 Hypostasierung. (參. 實在化) 366, 419-20, 421, 432; □——界即觀念界 154; □——概念 238-9; □——そのもの 368; □——論 335;
實なるもの das Volle. 345.
實念論 Realismus. 194.
實用 92, 292; □——科學 51; □——主義 Pragmatism. 163, 284, 291-2, 294, 296, 306, 502, 523; □——主義の起原 284; □——主義の語 285.
質量 mass. 248, 358, 360.
質料 materie. 389-91, 407; □——即實質 389.
視點 32, 484; □——が四つ 33; □——と結果 406; □——の統一 406; □二つの——33.
支那 □——の思想 380; □——人 51.
自發性 Spontaneität. 309.
十句義 zehn Tropen. 158, 298.
十九世紀 268.
習慣 239.
十字軍 482.
十二因緣 101.
十六 □——諦 170; □——類聚 397.
事物 239, 290, 298; □——の記號即假象 198; □——の實體 358; □——の眞相 85, 196; □——の尺度 452; □——の絕對の相 222; □——の存在を求むる議論 231; □可能なる——28; □現象界の——378; □箇々の——48; □主觀外に獨存する——229; □先感覺的——205; □——そのもの 45, 205.
四分の一缺けたる頭 258.

指標 Index. 274.
思辨的 5.
資本家 510; □——階級 504.
自明 40; □——的 81.
四門の遊行 41.
思惟 Denken. (參. 思考) 193, 195, 244, 253, 274, 291-2, 351, 414; □——と存在 245; □——の形式 276; □——の主 253; □——の二面性 (參. 理性活動の二面性) 316; □——の法則 308; □——過程 407; □——經濟 Denkökonomie. 244; □——經濟說 Denkökonomische theorie. 284, 292, 294.
自由 43, 475, 542-3; □——の意味 543; □——の感情 259; □——の回復 460; □個人々々の絕對的——452; □——意志 freier Wille. 540, 543; □——意志の存在 541; □——意志(の)問題 540; □[——意志の]問題の起原 540; □——問題の歷史 542; □——意志の論證 540; □[カント,ロッツェの——意志の]論證 544; □道德の成立のために——意志を必要とするといふ考 544; □——競爭 492; □——精神 458.
知らんと欲する作用(知る作用) 436.
自律性 Autonomie. 306; □——への物の存在それ自らの依存 375.
眞 286; □——らしさこと 300.
新 □——カント派 Neu Kantianer. 114, 116, 247, 255, 268, 309; □價値論的——カント派 Werttheoretischer N. K.. 282; □論理主義的——カント派——Logistischer N.K.. 282; □——トーマス派(主義) Neuthomismus. 114, 410; □——フィヒテ派主義) Neufichteaner. (——nismus.) 114, 267.
信 Glauben. 544.
心意作用 131; □三——133.
神恩說 96.
神我 Pursa. 396-7.
信仰 24, 54, 79, 96, 98, 301, 352, 491-2; □——の根據 158; □——は無價値 125.
人口 □——の增加 506; □——の增加率 504; □——增加の統計 504.
神學 Theologie. 542; □——の下婢 24; □——の辯護論證 24; □——的段階 416; □——中心 24; □——論 335; □合理的——rationale Th.. 335, 418; □消極——negative Theologie. 368.
人格 Personlichkeit. □——の概念 545-6; □——的色彩 410; □——主義 546; □——本位の學說 545-6.
眞僞 181; □——の判斷 298; □——の標準 287.
進化論 48, 504-5, 510; □——の影響 534; □——の根柢 505; □——の出發點 506; □——そのもの 504; □漸次的進化 534.
神經感情 Innervationsgefühl. 211.
人事時代 334.
神人 □——の關係 290; □——說 96.
信者 566.
信ずる 98.
「眞正の作」 113.
人生 331; □——を解すべき力 496; □——の意義 94; □——の極致 458; □——の進行の道筋 540; □——の眞義 484; □——の——たる所以(の本質) 426, 539; □——の道具 286; □——への功用 286; □——の問題 538; □——苦 100; □——哲學 335; □——無(至)上の目的 494, 517; □實——495.
人性 499; □——の完全なる發達 491; □——の全面的發達 528; □——邪惡の假定 532; □有限なる——の能力 530; □——論時代 152.
身體 347, 377, 393.
神道 5.
人道主義 Humanism. 499, 508; □——的要素 495.
眞知 19.
人知 □——の對象を求むる謬想 233-4; □——發達の段階 417.
心的 □——現象(心理現象) 317, 348; 358-9, 361, 400, 402, 405; □——現象の世界 338; □——現象の特質 317; □——作用の實體化 227; □——實體の意義 380.
眞如 415; □——緣起(參. 緣起論) 415.
神祕 □——主義者 159; □——說 Mystizismus. 217.
人本主義 Humanismus. 446, 496-500, ~~546-6~~; □認識論上の實用主義の意味での——497; □文藝復興期の——498-9; □私のいふ——500; □——的(人文主義的)時期 497; □——の代表者 498.
人民 467-8; □——の意志 468.
眞理、Wahrheit. 5, 287-8, 294-5, 452; □——の標準 294; □——自體 Wahrheiten an sich. 162, 316-7; □新しい——5; □事實からの——195; □直觀的——181; □普遍妥當的な——allmeingültige W.. 298; □理性からの——195; □論證的——182; □——性 108, 259, 306; □形式的——性167; □實質的——性 167-8.
心理 □——學 Psychologie. 177, 273, 325-6, 336; □——學の根本誤謬 273; □——學の對象 325; □——の任務 326; □——學的說明 420; □——學的動機の內容 47; □——學的方面 318; □記述的分析的——學 beschreibande, zergliedernde Psy.. 326; □構成的說明的——學 Konstruktive, erklärende Psy.. 326; □合理的——學 335, 419, 542; □實驗心理學 Experimental Psy.. 310; □生理的——學 Physiologische Psy.. 310; □先驗——學的立場 Transzendental psychologischer standpunkt. 282; □比較——學 vergleichende Psy.. 326; □[ヘルバルトの]——學 526; □變態——學 Pathologische Psy.. 237; □——生活(參.精神生活) 326; □——主義 Psychologismus. の根本誤謬 273; □——主義者 159; □——主義的 (參. 生起的) 257; □——的 236, 255; □——說 217.
侵略史 489.
人類 □——の自然的性狀 465; □——の進むべき方向 384; □——の權利 520; □——進步の二大機關 495; □——社會 453; □——太初の自然狀態 470; □——論 336.
心靈 Seele. 347-8, 377; □——實體 355.
神話 69; □——を信ずるもの 274; □——的衣裳 365-6; □——的要素 456; □吠陀——36; □斷片的——Myth. 88; □統一的——Mythologie. 88.
社會 455, 491, 525; □——の習慣 464; □——的概念 212; □——主義的學說 445; □——契約 Contrat Social. 468, 476; □——教育 525; □——現象 348; □——主義 Sozialismus. 107, 462-3, 509-10, 545-6; □——主義の基礎論 510; □——主義の歷史 508; □——主義的組織 510; □——主義的社會 492; □——主義的社會の實現 492; □——主義的理想社會 491; □近世——主義 510; □近世——主義の直接原因 509; □經濟的——主義 473; □——主義者 475; □——狀態 52; □——民主黨 Sozial demokratie. 413.
捨欲 534.
種の起原 Origin of species. 505.
主意 □——主義 Voluntalismus. 522-3, 528; □——主義といふ語 522; □心理學的或は自然形而上學的の——主義 523; □(テンニースの)——主義 522-3; □(ニイチェの)——主義 526; □私のいふ——主義 525; □——主義的 Voluntalistisch. 363; □——說 Voluntalismus. 382; □——的 525; □——的生活 453; □——論的目的論的 288.
主客の對立 (參. 主觀と客觀, 主觀對客觀) 214; □三種の——313.
主觀 Subjekt. (參. 認識主觀) □——を制約する 214; □——と客觀 241, 306; □——と客觀との爭 262; □——と客觀との關係 279; □——に制約せられたるもの 214; □——の意識活動 264; □——の形式 197, 253, 256, 279, 281; □——の所造 252; □經驗的——empirischer S.. 312-3; □經驗的——のアプリオリ 314; □經驗的——の形式 313; □心理學的——Psychologischer S.. 279; □認識論的——erkenntnistheoretischer S.. 314-5, 323; □認識論的——の形式 313; □超驗的——transzendenter. S.. 314; □超個人的——Ueberindividueller S.. 252, 256, 312, 322; □超個人的——の所產 322; □——的 241, 270, 305, 317; □——的觀念的 Subjektiver Idealistisch. 264; □——的色彩 9; □——(的)對客觀(的) 228, 311; □——的特質 423; □——的な解釋 34; □——的連續 322; □——S. 314-5; □——S. の性質 315; □——外の或もの 172, 193; □——活動 264; □——能力 168; □——論 Subjektivismus. 229, 243, 306; □——論の根據 243; □——論即觀念論 168; □經驗論的個人的——論 empiristischer, individualistischer S.. 370; □心理學的——論 psychologischer S.. 271; □絕對——論者 304; □大膽なる——論 260.
主權 467.
儒教 2, 409.
種差 31-2, 34.
種子 344.
主情主義 Sentimentalismus. 519, 521-2, 528; □——の特徵 519-20.
種族 □——の體制 270; □——的 304.

手段 Mittel. 441; □「單に——」511-2.
主知主義 Intellektualismus. 226, 522, 526, 528; □——といふ語 526; □——的 Intellektualistisch. 363; □——的傾向 520; □——者 527.
受容性 Rezeptivität. 309.
狩獵採果の時代 52.
「諸學の母」 348.
勸產法 Maieutik. 152.
叙述の體系化 484.
處世術 21.
所動的のもの 301.
所與 Das Gegebene 274, 282, 323, 342; □——學 Gignomenologie. 187; □——內容 323; □——內容の非合理性 Irrationalität. 323; □直接——187, 255, 323.
情意 420; □——的態度 60; □——的直觀 455; □——的要素 41.
聖敎量 171.
松果腺 glans pinealis. 393.
商工時代 52.
常恒不變の主宰者 405.
常識 Commonsense, Gemeinverstand. 44, 48, 66, 405; □——の範圍 6.
生ずる 346.
狀態 372.
情緒情操 519.
上帝 408.
衝動 Trieb. 440-2, 445, 481, 524; □根本的——485-6; □營利——489; □——生活 525; □——そのもの 444.
成道 550.
淨土敎 532.
商品 512.
證明 299.
剩餘價値 mehrwert. 509.
終極項 Endglied. 208.
宗敎 Religion. 211, 412, 521, 534; □——の哲學化 96; □——的 22; □——的懷疑 175; □——的關心 420; □——的熱狂家 481; □——改革 98, 499; □——思想 51; □——哲學 Religionsphil.. 336; □自然——naturreligion. 58; □成立——positive R. への反對 353.
充實 erfüllen. 318.
重心の理論 47.
充足理由 277.
重量 401.
宿罪說 Erbsündenlehre. 64.
宿命 Fatum. 538; □——說 Fatalism. 538.
循環 229; □——論 199.
春秋戰國時代 37.
純粹 □——の創造活動 255; □——意識 reines Bewusstsein. 225; □——概念 reiner Begriff. 82; □——經驗 reine Erfahrung. 308; □アヴェナリウスの——經驗 308; □——形式 391; □——持續 durée pure. 224, 293; □——持續即時間 226; □——持續の空間化への反對 226; □——持續の相 227; □——思惟 reines Denken. 274; □——思惟の論理學 274; □——思惟說 83; □——數學 reine Mathematik. 165, 249; □——哲學 reine Phil.. 29; □——直觀 reine Anschauung. 274; □——統覺 reine Apperzeption. 252, 260; □「——理性の二律背反 Antinomien d. reinen Vernunft.」542; □「——理性批判の概要」417.
シユッペー派 230.
觸覺の研究 401.
職業神の崇拜 58.
殖民史 489.
食物 □——と生物の個體 504; □——の增加 506; □——の增加率 504; □——の不足 506.

ス

隨意運動 377.
水晶 357.
推理 291, 502.
數 341.
數學 Mathematik. 29, 79, 212, 324; □——の本質 301; □純粹——reine M.. 165, 249; □——的自然科學mathematische Naturwissenschaft. 324; □——的眞理の對象 316.
數字 19.
スールヤ 44.
スコラ □——哲學scholastische Phil.. 390, 415, 497, 499, 541; □——哲學者 317.
ストア學派 Die Stoiker. 21, 32, 40, 77, 131, 284, 299, 347, 450, □——の論理學 157.
スミスA.Smithの人間利己主義說 290.
數論 (=僧佉耶 Sankhya) 396.

セ

生 Leben. 420, □——の函數Funktion d. Lebens. 288; □——の哲學 Phil. d. Lebens. 336; □——(命)の躍動 élen vital. 224-5; □——への關心 420.
星雲說 Die Kant-Laplacesche Theorie. 50.
聖學 36.
聲樂 493.
生起的 Genetisch. 256; □——見方 256-7, 268.
生活 □〔エピクール〕の——法 515.
制限の原則 Grundgesetz d. Beschränkung. 473.
聖賢 398.
生產的活動 491-2.
性質 Qualität. quality. 276, 318, 372; □——複合 Charakter-complex. 191; □可感的—— 232; □第一——first qualities. 167, 181, 232, 237; □第二——second qualities. 176, 181, 232, 237.
精神 Geist. 235-6, 341, 348, 352, 364, 369-70, 382, 391, 405, 416, 459-60, 491, 545; □——の優越性 332; □——の意義 385; □——の特徵392; □多數の——370; □氣候の——に及ぼす作用 401; □——科學Geisteswiss.. 325-6; □——科學の基礎 325; □——活動 513; □——作用 402; □——生活Geistesleben. (參. 心理生活) 326, 430, 519; □——生活の哲學 Phil. d. Geisteslebens. 429; □如何なる——的生活をなすか 512; □理知的——生活 519; □——的原理 389, 396; □——的事實 325-6; □——哲學 Phil. d. Geistes. 265, 336, 338; □——物理的體制 Psychophysische Organization. 270; □——力 300; 461.
靜寂なる曠原 Ewige Wüste. 219.
聖書 Bibel. 158-9.
生殖器崇拜 58.
生成發展 224; □——の動力 381.
生々流轉 47.
生存 Leben. □——意志 Wille zum Leben. 502; □——競爭 struggle for life (existence.) 504-5, 507, 510; □——競爭の手段 502; □——競爭の敗者 506; □團體間の大規模の——競爭 506; □——慾 40.
政黨內閣 458.
西南獨乙派 Südwest-deutsche Schule. 73, 323, 327, 423, 523.
聖ピーター寺 St. Peter's Cathedral. 429.
政府 467.
生物 298, 315, □——學 Biologie. 501; □——學的機能 502; □——學主義 Biologismus. 502; 510; □——現象 382; □文化哲學上の——主義 501, 512; □——主義的 294; □——進化の法則 505; □——論33b.
精密科學 exakte Wissenschaften. 67, 332.
生命 224-5, 501-2; □——の維持503, 506; □——維持の手段 484, 502; □——の斷滅を計る 513; □——の哲學 Phil. d. Lebens. 221; □——現象 358; □——そのもの 46; □——欲 46, 506; □將來の——欲 485; □——力 382; □——力の概念 387; □一般に——といふもの 507; □個體——501-2, 506-7; □個體——の維持 502-3; □最高價値としての——508; □種族——501-2; □種族——の維持 513; □單なる——の延長 513; □肉體的——513; □生物學的——92, 95, 492, 501, 512.
制約 Bedingung. 308-9, 332, 419; □善行の——295; □經驗の——者Das Unbedingte. 332; □無制約的——unbedingte Bedingung. 419,
生理 □——學 Physiologie. 176; □——學的考察 379, 387; □——學的導出法 Physiologische Ableitung. 319; □——現象 361; □——現象の函數 359; □——主義的傾向 Physiologische Richtung. 269; □——的組織 310.
性理學 36.
省慮 40.
小兒 459-60.
小乘佛敎的自我否定 455.
小說の或主人公 223.
逍遙學派 Peripatetiker. 77, 131.
世界 Welt. 265, 345, 376, 391, 413, 537; □——が理解 412; □——と自我 264; □——の運行の筋書 541; □——の概念 34; □——の主體 322-3; □——の調和 537; □——の認識の統一 83; □——の本質 47, 535; □——の本體(——の實體) 385-6; □——の目的 287; □——の理念 330; □超感覺的——263; □——觀 Weltanschauung. 86; □二元論的——觀 dualistische W. A.. 409; □唯一不二の——觀 86; □——最終極の原理 389; □——材料332; □——人的 Kosmopolitisch. 20; □——人生は將來如何になりゆくであらうか 538; □——そのもの534, 537; □可能なる——537; □最善の

——537.
世間 496; □——知 Weltweisheit. 27; □——知と哲學 29; □——知重視の傾向 26; □——知對由世間知 27.
刹那主義 439, 445.
善 Gut. 532; □——の觀念 Idee d. Guten. 365; □プラトーンの——の觀念 410; □——行爲の標準 489; □最高—— 515.
全我 261.
先驅者 476.
潛在性 391.
戰爭 507.
全體 452.
選擇 □——の原則 Grundgesetz d. Auswahl. 478; □自由の——541.
全知 69.
先天 □——的 a priori 197; □——綜合判斷 Synthetische Urteile a priori. 164-5, 248-50, 423; □——直觀 Ansch. a. p.. 249; □——認識 Erkenntnis a. p.. 253; □〔——〕分析判斷 165.
先入 □——の見 3; □——判斷 43.
專門の所傳 550.
絕對 □——者 Das Absolute. 224, 229; □——者の考察 273; □——者の學(學の條を見よ) □—— 無假定 95; □——無抵抗主義 513.

ソ

綜合 Synthesis. 34; □——的完成體 280; □——的表象と其對象 256; □——哲學 Synthetic philosophy. 83.
爭鬪 525.
僧侶階級 53.
俗學者 Philister. 456.
屬性 Attribut. 414.
ソークラテースの皮肉 Sokratische Ironie. 154.
ソフィステース 17.
ソフィスト(——ステン) Sophist. (en) 18, 53, 283.
存在 79, 281; □——を要望せらるるもの 524; □——が認識に依存する 386; □——と死滅 40; □——と思惟 196, 236; □——の有限性 40; □——の起原及目的の闡明 530; □——の範疇 327-8; □可能的——364; □現實的—— 364; □自然的——545; □第二の——407, 413; □超越的——transzendente Existenz (Sein). 279; □同時——302; □物理學的——と理性的認識 199; □——する 233, 244; □——すべきもの 29, 337; □——するもの 29, 235, 280, 337, 347, 524; □——するものの因果的關係 198; □——するものの總量 353; □心外に——するもの(心外の——者) 233-4; □知覺せられずとも——するもの 232; □——者 328; □感性的——者 328; □超感覺的——者 328; □知覺する能動な——者 235; □——物 297; □——物の究竟原理 20.

タ

多 Mehrheit, Das mannigfaltige. 342, 410; □一部——413; □——と運動 75; □——の綜合的統一 Synthetische Einheit d. Mannigfaltigen. 276.
對應像 Gegenbild. 197.
大(量) 397.
代議制度 473.
大器量人 549.
體系 □——的關心 systematisches Intersse. 115; □全アプリオリの——331; □二つの——262; □知己の——287; □フィヒテの——258.
體驗 Erlebnis. 61-2.
第三の場合 die dritte Möglichkeit. 195.
大自覺の對象 550.
對人關係 492; □理想的な——490.
大神境 550.
對象 Gegenstand. 61, 70, 247, 250-1, 280, 285, 298-9, 317-9, 327; □——を認識する二つの方法 222; □——の意識 441; □——の限定 71; □——の志向的或は心的內在. Intentionale od. psychische Existenz d. G.. 317; □——の二方面 32; □——の認識 172, 193; □——の模寫 167; □——自身(そのもの) 317-8, 323; □可感的——232-3; □各科學の——71; □考へられたる——318; □自然科學的認識の——440; □人知の——231; □眞理の——316; □生理學的並びに實踐的學の 440; □數學的眞理の——316; □單純にして認識し易き——81; □超越的——321; □內在的志向的——(參.——の志向的或は心的內在) 317; □認識論的考究の—— 324; □物理學の——189; □唯一不二の——85-6; □——界 209; □個々の學の——性 281; □——論 Gegenstandstheorie. 317.
態度 57-8, 60-2; □——には三種 58; □意志的——58; □感情的——58; □情意的——61.
對當の四邊形 156.
大なる眞實 125.
太陽 □——系 225; □——國家 491; □——崇拜 58.
大龍 459, 526.
對立 116; □二つの——111.
道具 292; □——主義 Instrumentalism. 288, 294; □人生の——286.
道德 Moral. 328, 437, 458; □——の標準 295; □カントの——460; □君主—— Herrenmoral. 459; □世間の——459; □超人の——459; □奴隸—— Sklavenmoral. 459; □——上の責任 543; □——概念の論理的制約 544; □——的行爲の究極 516; □——的傾向に反對する所の傾向 532; □——的罪惡 537; □——的に完全な人間 533; □——の可能であるべきための制約 533; □——律 Sittengesetz. 542; □——律の事實的存在 542.
多元論 Pluralismus. 341, 343.
多神教 Polytheismus. 410; □——的 409-10.
多數 □——決 453; □議會の——決 466; □——決主義 472, 474; □——者 476.
正しい □——考 283; □——もの 298.
立場 Standpunkt. 484; □——の曖昧 280.
妥當 Das Gelten, Geltung. 195, 279-80 436; □——の意義 280; □——の範疇 Kategorie d. Geltens 328.; □——の王國」280; □純粹內面的——280; □——する世界 436; □——者 Das Geltendes. 328; □非感性的——者 328.
他人 453.
多摩 tamas. 397.
多樣態 Das Mannigfaltige. 252.
墮落 367.
他律的 heteronomisch. 461.
單位 449.
斷言的命令 Kategorischer Imperativ. 511, 532.
單子 Monaden. 195, 199, 341, 363, 372, 407; □——の——414; □——論 Monadologie. 371; □ライプニッツの——論 363, 373, 381.
膽汁 355.
單純無雜のもの 371.
團體主義 439.
單なる □——多識 151; □——斷片 281.

チ

知 19, 21, 295; □——を愛する 19; □——と意志 534; □——の指導 527; □——の追究 39; □博大なる——527; □——的活動 534; □——的坐標系 212; □——的作用 430; □——的修養 16; □——的段階 48; □——的直觀 intellectuelle Anschauung. 219, 260-3, 534; □——的陶冶 526; □——的文化 50, 55; □ 的文化發達 49; □——的要素 41; □個人の——的發達 49; □社會の——的發達 49-50; □——信問題 158; □——者 17, 19, 35; □——性 378, 526-7; □——性の所產 271; □——(そのもの)の開發 526-7.
智 18.
癡 532.
注意 423, 432.
註釋的講義 23.
抽象 □——の傾向 278; □——の作用 311; □二重の—— 233; □——觀念 abstract ideas. 230-1; □誤つた——觀念說 231-3.
中世 158.
知識の過剩 123.
知覺 Wahrnehmung, perception. 175, 231, 235, 237, 248, 298, 344, 371-2; □——(せられたもの)の原因 234-5; □——の綜合 251; □——の束 bundle of p.. 239; □——の反覆の程度 299; □——の與料 206; □——する能動的な存在者 235; □——せられずとも存在するもの 232; □——せられた觀念 231; □——せられる 233; □——せられること 232; □——間の時間上の距離 174; □——內容 174; □——表象 173, 370; □——の豫料 Antizipationen d. W.. 206.
知學 36.
地球が廻轉するといふ主張 293.
知識 22, 33, 521, 546; □——を求める 17; □——と存在との關係 281; □——と力學 350; □——の愛慕 18; □——の根柢 261; □——の眞理性 17, 284; □——の全體的統一 108; □——の對象 232; □——の追究 15, 23, 31-2; □——の

内容的統一 408; □——の標準 294; □——の本質 414; □——の本質の論 30; □——の論理的特性 141; □——は力である 284; □新しき—— 82; □新なる——の統合 127; □一切の—— の統合 108; □蓋然的——303; □感性的——(參. 感性の條)19; □四種の——194; □絶對的 —224; □哲學的——の範圍 23; □——學 Wissenschaftlehre. 30, 258, 261; □——學と批判哲學との問題 260; □——學の問題 259; □實踐的 ——學 261; □フィヒテの——學324; □理論的——學 261; □——形式論 147; □——そのもの 31, 253; □——批判の業 146.

知情意 526.

力 387; □——と意志的精神 387; □——の中心 386; □衆愚の——54.

直覺 (直觀に同じ) 78.

直觀 Intuition, Anchauung. 219, 248, 251, 254-5, 261, 263, 302, 309; □——を重んずる哲學者 221; □——及思惟の形式 270; □——といふ言葉 216; □——の傾向 278; □——の多樣態 309; □感性的——sinnlische A. 254; □知的——(知の條を見よ); □內的 264; □——的195, 221; □——的眞理 181; □——的表現 245; □——的に經驗する 229; □——的に認識する 220; □——形式 82, 210; □——說223, 229; □——說の起原 217; □——哲學 258; □——能力 219, 227; □——法 84; □——論 Intuitivismus. 221; □——論者 227.

直接 □——に與へられたる所のもの 378; □——的確實性 78; □——的方法 287; □——事實 234; □——所與 Gignomena. 187, 255, 323.

貯蓄の觀念 483.

ツ

罪 □——を犯さざるの能力 posse non peccare. 541; □——を犯さざるをえないこと non posse non peccare. 541.

ツェテーティッシュ Zetetisch 卽探究的 123.

ツェンタウール Zentaur. 200.

テ

定義 65, 127, 293, 314, 511; □——の變遷 33; □カント以後の哲學者の—— 29; □哲學の ——23, 25, 27; □普遍妥當的な——34; □六種の—— 23.

定言的 kategorisch. 255.

定命的 deterministisch. 541.

超人 Uebermensch. 124, 458; □——說 505.

超越(絕)的 transzendent. 228, 314.

超驗的 transzendent. 339; □——といふ語 416; □—— 的意味 282, 321.

條件 543.

哲學 1, 5-6, 15, 19, 21, 25, 30, 36, 45, 60, 71-2, 127, 143, 223-4, 276, 336-7, 343, 427; □——といふ語 1; □——と科學との限界 46; □——と教義 25; □——と神學 25; □——と他の知識 47; □——と特殊科學 27-8; □——の起原 334; □——の完成 62; □——の此等の二部門 337; □——の根元 296; □——の宗教化 95; □——の勝利 27; □——の存在の理由 29; □——の對象 31, 63-5, 68; □——のための—— 92; □——の定義 23, 25, 27; □——の獨立性 24; □——の任務 141; □——の方法(方法の條を見よ); □——の分化 143; □——の表現法 88; □——の無用 91; □——の問題 61, 91, 129; □——の問題の分化 145; □——の力用 99, 103; □——の理念 121; □——の領域 27; □——の領域の限定 29; □——の歷史 5-6; □——卽神學 23; □——卽——史84, 118; □——もの——Philosophie des Als-Ob. 234; □新なる——51-2; □アリストテレースの——25; □アレキサンドリアの——50; □印度の——56; □吠檀多——161; □オイケンの——431; □學としての——68, 88-9, 115, 120, 210-1; □實體の——426; □カント(の)哲學 51, 103, 205, 425, 429; □カントの——の中心81; □カント——の物與 237; □佛蘭西のカント——の特徵 544; □カント, フィヒテの—— 262; □希臘——(希臘の條を見よ); □近世の——53; □教父——416, □根元——Elementarphilosophie. 309; □今日の——163; □教會の——78. □個々の——337; □御用——25, 291; □自然——(自然の條を見よ); □支那の——56; □實踐——336; □人生——426; □諸——10; □純粹——29; □精神生活の——431; □正統吠陀——99; □生(命)の——221, 336; □スコラ哲學(スコラの條を見よ); □第一——20-1, 73, 132, 258; □妥當の——426; □中世の——53; □直觀を方法とする——89; □同——Identitätsphilosophie. 246, 257, 267-8, 283; □內在——(內在の條を見よ); □二義の——20; □ニイチェの——425; □法理——Rechtsphil.. 338; □美——338; □批評——(批評の條を見よ); □プラトーンの——25; □ヘーゲルの——106, 537; □無意識者の——207; □陽明の——51; □ライプニッツ, ヴォルフの——104; □理念としての——117, 122; □浪漫的の——(浪漫的の條を見よ); □——的56; □——的懷疑 65; □——的統一 84, 142; □——的理解 423. □最近の獨乙——界267; □——概念 21, 23; □神學中心の——概念 24; □——概論 8, 12; □——概論の立場 13; □客觀的——概論 10; □主觀的——概論 8-9, 11; □批評的——概論 11; □——可能否定論 71; □——(研究)の困難 6-7; □——會 121; □——綱要 8; □——史 5; □ユニーベルヴェッヒの——史 334; □——史の尖端 114; □——史的價値 114; □——者 16-8; □教育者としての——者 7; □最古の希臘——者 389; □古代の——者 23; □詩人的——者 455; □直觀を重んずる——者 221; □浪漫的の——者 83; □——序論 23; □——入門 8; □——分類の歷史 130; □——蔑視の理由 4; □——無用論 7.

天 408-9.

電氣 □人體——350; □——學 Elektrizität. 93; □——物質觀 331, 343, 361.

天啓 Offenbarung. 159, 182, 302; □——對理性の問題 159; □——と理性 158.

天國 421, 497; □——の思想 531; □地上の——531; □地上の——の可能 531; □「——的無邪氣」444.

天才主義への反抗 476.

天子 409.

電子 Elektron. □——說 256-7. □——論307-8, 360.

天文學 Astronomie. 45.

ディオニソス的 dionysisch. □——の要素 455; □——人生觀 457.

ディジョン Dijon の學士院 469.

ト

獨乙 7, 303; □——一元論者協會 Der deutsche Monistenbund. 357; □最近の——哲學界 237; □哲學國たる—— 4.

統一 331, 350, 427, 438; □各科學の成果の—— 73; □形式的——406; □最終—— 337; □視點の——406; □方法の——406; □部分的——72; □普遍妥當的な——438; □最も重要なる——438; □——的338; □——的說明 338; □——的知識 69, 74, 127; □——原理 339, 341; □最高の——體 143; □前後不二の——體 47; □全體的——體 48; □同——體の見方の相違 145; □獨立の——體 143; □——欲 406.

同一 □——自然の二領域 338; □——哲學 Identitätsphil.. 246, 257, 267-8, 283; □——律 277.

動因 432; □動力因卽作用因 389.

統覺 Apperzeption. 372-3; □經驗的——empirische A.. 252, 313; □根元的——ursprüngliche A.. 252; □純粹——reine A.. 252, 260; □先驗的——transzendentale A.. 253, 267, 313.

同格的 389.

動作者 Agens. 185.

投射 Introjektion. 243.

同質說 96.

同情 489.

動植物 392.

統整的要求 137.

東方の學者 497.

動物の隨意運動 350.

陶冶 Bildung. 524.

東洋文明研究 52.

德 Virtus. 21, 295, 516, 525; □三——397; □四——491.

獨墺學派 316, 418.

獨我論 Solipsismus. 315, 370; □形而上學的—— 243; □認識論的——242.

特殊 □——の領域 72; □——科學 27; □——科學の研究の及ばざる

領域 330.
獨斷 □——的 dogmatisch. 11, 330; □認識論的——論 erkenntnistheoretische Dogmatismus. 242; □ライプニッツ, ヴォルフの——論 303.
獨立 □——なる認識作業 233; □——自存 172, 461; □——性 26.
ドヤウス 44.
飛ぶ矢 75.
トリニティ・コレジ Trinity College. 230.

ナ

內界 209.
內在 □——的 immanent. 314; □——的志向的對象（參. 對象の志向或は心的內在）317; □——哲學 Immanenzphilo ophie. 230, 240; □——哲學卽意識一元論 Bewusstseinsmonismus. 240.
內省 227.
內的 □——感覺卽反省 180; □——對外的 228; □——直觀 264; □——狀態 228.
內容 □——と對象 317; □——の全體の聯關統一 147; □——統一そのもの 331; □新——50; □全體的な—— 331.
何 28, 305; □——をなすべきか 300.
難琴の歎聲 6.
南宋畫 104.
汝 315; □——のもの 21; □——宜しくなすべし Du sollst. 459,-60.
難點 199-200.
難破船 239.

ニ

ニカイヤ會議 167.
肉體的害惡 537.
憎み 317.
二元 □——觀 411; □——論（參. 物心二元論）Dualismus. 341, 343, 405-6, 410, 413, 415; □——論の根柢 405; □——論の代表者 389; □——の矛盾 344; □模範的——論 391; □——論的要素 414-5.
二世界說 Zweiweltentheorie. 279, 328, 416; □——への反對 417.
二重眞理說 Doppelwahrheitentheorie. 25-6, 159.
ニイチエ □——の考 460; □——學會 Nietzsche-Gesellschaft. 461.
日本人 2.
尼夜耶派 167.
人間 238, 352, 357, 392-3, 452, 511; □——を尊重する 520; □——の自然的性情 496; □——の觀念 230; □——の不完全 22; □實生活と沒交涉な—— 522; □神化されたる——412; □癡頑的な——518; □——（自身）の理想化 496, 499; □——起原論 64; □——活動 431; □——性の完成 384; □——生活の最高目標 452; □——不平等の起原 470; □——らしさ humanus. 498; □——利己主義說 290; □——本位 498; □超——力 22.
認識 Erkenntnis. 203, 212, 238, 250, 474, 283, 288, 292, 297, 300, 420, 502, 530, 535; □——の意義 72-3; □——の客觀性 Objektivität d. E.. (參. 判斷の客觀性) 246-8, 253, 279, 292, 303, 433; □——の客觀性の根據234; □——の客觀的標準 284; □——の客體Objekt. d. E.. 228; □——の起原(起原の論) 216, 238, 245; □——の研究 319; □——の現象論Phänomenologie d. E.. (=內省的心理學) 316; □——の自律性 307, 386, 434; □——の綜合 251; □——の對象 321, 323, 381, 386, 440; □——の妥當性 Gültigkeit.の問題 160; □——の統一 406; □——の統一慾 405; □——の內在性 240; □——の內容 78; □——の能力 216, 218; □——の方法 326; □——の方法と成果 406; □——の人 124; □——の普遍妥當性 Allgemeingültigkeit d. E.. 304; □——の目的 290; □——の要素 381; □——の理想 419-20; □——への關心 420; □暗黑な——152; □一切の—— 210, 276; □概念的(よりの)—— 29, 304; □概念的——の對象 364; □客觀的—— 227, 256; □學的—— 280; □感性的——（參. 感性の條）255; □科學的（自然科學の）—— 47, 433; □觀念界の——155; □經驗的—— 214; □合理的なる—— 28; □相對的——224-5; □自己—— 82; □實踐的——442; □思惟による——135; □事物の——157; □眞の(眞なる, 眞正の)—— 43, 151-3, 264; □眞知の——155; □綱對的——225; □先天——253; □哲學的—— 47; □物理學的——（物理の條を見よ）; □明析確實なる——42 □歷史の——29; □——する 328; □直觀的に——する 220; □——價値（=經驗的實在）315; □——價値の獨立 306; □——觀 159; □近世の——觀の主なる對立 159; □——作用 228, 280, 418; □——作用の無限遡行の事實的不何能（無限遡行）418-9; □事實論——作用 321, 418; □(獨立なる)——作業 419; □——者 173; □——主觀 Erkenntnissubjekt. 252, 269, 271, 322, 330, 375, 378, 381, 385-6; □——主觀の相對性 304; □——主觀の自律性への——の依存 375; □——主觀の制約 381; □——主觀の論 319; □——主體 Erkenntnissubjekt. 47, 50, 397; □超個人的——主體 50; □——所成 60; □——統一の要求418-9; □——能力の檢索 330; □——能力の限界外 418; □——能力の範圍 330; □高等——能力 215; □天賦の——範圍 315; □——批判 Erkenntniskritik, 26, 29, 81, 83; □——理說 Erkenntnistheorie. 86-7, 368, □——論 Erkenntnistheorie. 30, 34, 74, 80, 146, 163, 279, 306, 314, 323-4, 334, 433; □——論の研究 162; □——論の原語 148; □——論の攻究範圍 328; □——論の祖 329; □論の中心課題 167; □——論の——論（參. 論理學の論理學）328; □——論の文獻 150; □——論の問題 29, 167; □カントの——論 161, 270, 327-8, 411, 417; □ショーペンハウエルの——論 206; □文化科學の——論 433; □本書でいふ——論の意味 150; □リールの——論 213; □——論卽形而上學 30, 187; □——論者 329; □——論的 305, 329; □——論的と形而上學的とに分けたる理由 145; □——論的任務 332.
如來 430.

ヌ

ヌース 217, 344.

ネ

ネグロ人 Neger. 413.
念佛 62.

ノ

能感覺體 205.
農業時代 52.
能動的のもの 501.

ハ

バイロイト Beireuth. 450.
法悅 517.
報酬 53.
法則 278. 331; □——の單なる形式 543; □ヴェーバーの—— Webers Gesetz. 401; □物體界を支配する——225; □物體界の——392; □物理學上の—— 255; □普遍必然的——270; □——化 331; □——科學 Gesetzeswiss.. 278; □——定立的 nomothetisch. 278.
方法 Methode, method. 31, 70-1, 74, 85, 286, 378; □——の確定 71; □——の規則 85; □——の契約 Traktat d. M.. 80, 319; □——の統一 406; □——の問題 322; □——の理解 83; □——卽機關 77; □——的 methodisch. 127; □概念的認識の—— 84; □各科學の(研究の)——72, 87; □加工又は綜合する——30; □價値批判的——wertkritische M.. 320, 322; □カントの第三—— 320-1; □歸納的——（歸納の條を見よ）; □形式論理學的—— 84; □個別化的—— individualisierende M.. 73, 86; □自然科學の—— 80; □實用主義的——pragmatical method. 341; □眞の—— 81; □心理(心理生理)主義的——psychologische M.. 319, 321; □生起的—— 320; □先驗的——transzendentale M.. 82, 121, 160, 319-20; □先驗心理學的—— transzendentalpsychologische M.. 320-1; □先驗論理學的—— transzendentallogische M.. 320-1; □綜合的——metodo compositivo. 80; □直觀的——222; □直接的——287; □哲學の——5, 75, 82, 85; □哲學的思惟の——121; □批判(評)的——Kritische M.. 319-20, 322; □批評的——對生起的——の問題 319; □カントの批評的——433; □普遍化的——generalisierende M.. 73, 86; □分析的——metodo risoltivo. 80, 222-3; □辯證的——dialektische M.. 84; □唯一不二の ——85; □歷史研究